

築

城

龍門

歩

ようやく白む東方の明かりに、靄の晦暝は、巨大な城郭で排除された。星々の燦めきが薄らぎはじめたころ、すべてを吸収するような天蓋の空間は、わずかに無窮の彼方に曳航する光を反射し、茫々と広がる海面へ滴らせていた。まだ明けやらぬ加納藩の城下は、すでに秋の虫の音も絶えている。ゆるやかに吹く海風の中にしつとりとまどろむ、黎明を告げる静かなひとときが、戦きつつ破られようとしていた。

背景と定かに分かれたれもせず、折り重なる塀、幾種類もの櫓や城門、本丸御殿などを従えた五層六階の天守が、漆黒の瓦と、曙光を撥ね返す白壁とによって明度の対比をうみだしながら、重厚な石垣の上にひとときわ聳え立つ。高い丘の地形を生かして合理的に縄張りされたそれら建造物は、濠や樹木などと一体になって律動的な諧調を弾じている。

この、遙かに仰ぐ天守の矢狭間から、燈台の明かりが濃い靄の中に滲んでいた。

「冴乃……」

幽かな艶をもつ紫紺の透明が卯月吉景の視野に満ちて、氷結したように深まっていた沈黙はぬるんで溶けはじめた。

永文二年の晩秋である。外気が直接入り込んでくる板敷きの天守は、冬の到来を告げるように冷えきっている。燈台に揺らぐ灯が、太い通し柱と、それを中心に構成された空間の堅固な境界線とを、ぼんやりと照らし出している。

吉景のやや後方に立っている冴乃は、無言であった。

「私は幕府の力を恐れるものではない」

矢狭間の格子の間から遠く海を眺めていた吉景は、重い扉を押し開くようにつぶやいた。冴乃の位置からは、吉景の表情を見ることができない。いつも変わらぬ夫の後ろ姿ではあるが、分厚い床板の冷めたさが足袋を貫くのか、わずかに窺われる夫の横顔の皮膚はいくぶん強張っているようだ。

「冴乃にも幸せな日々はあったろうか」

去りゆく記憶を追い求めるように、吉景は語りかけた。吉景の口から洩れた白い呼吸が、矢狭間から入るゆるやかな風に乗って冴乃を包んで消えた。

「……ええ。今でも幸せですわ」

応じたものの、吉景の言葉はいかにも唐突だった。吉景はこれまで、ほとんど過去に関心を示したことはなかったのだ。彼は今、氷の底に沈んだような静けさの中で、遠くに見える幻影にも似た海原や、ひっそりと鎮まり返る城下の街並みの装いに誘われたのかもしれない。

ふいに問われて、夜明け前の寂しさが冴乃の心に冷たく沁み込んできた。いつもよりさらに緊張している夫から受ける切迫感から、なにかしら人懐かしい想いがつのり、過ぎ去った日々の記憶がおのずから蘇る。

茶室風につくられている角櫓から、西の山端に落ちかかる月を眺めたとき。中庭の池に舟を浮かべて散る桜に濡れたとき。降りしきる雪の宵、火鉢に暖まりながら寒さを噛みしめたとき――。

……これらはけっして特殊な時間ではないはずなのに、今の冴乃には急に、二度と再現することがないように思われたのである。

「存在しているということは、慚愧だ、屈辱だ」

追憶に耽っていた冴乃の脳は急転した。吉景のこんな過激な言葉を聞くのは、最初の夜以来、ほとんど初めてであ

った。心の傷口が突然意識され、要所要所に力強く打ち付けられた留め金から放射される黒い光が冴乃の心理に細波を起こした。

「解答が得られるか否かを、おそらく私たちは、問題の前に立って直感するにちがいない。そして、その直感の彼方に、大きな問題が横たわっている。それは価値への問いかけだ、宇宙とは何か、という仕方の問題だ。ここには、何故か？ と問う以上に困難がある。〈何〉は本質に関する問いで、〈何故〉は事象に関する問いだからだ。慚愧と屈辱は、生の直中そのものだ。日常性の泥濘にはまりこみ、生と死の対峙を目の前にして、そこから抜け出そうとする必死の足掻きを晒すことだ。それは先験性でもない、衝動でもない、意思でもない。むろん、喜怒哀楽さえ搾り出されることはない。根底的な、言いしれぬ生なのだ。この、言いしれぬ生の理由こそ、存在の理由であるはずだ。そして存在は、事象としてそれ自体を現わすのか、もしくは事象させるならかの主体がその支えとしてあるのか？ 物体に関して、本質と事象の二元性を問題にするのは無意味かもしれない。しかし、人間の場合はどうだろう？ 事象の底流に、やはり〈人〉存在自身の神秘があるのではなからうか？ すなわち、主体性は事象に対して潜在するものではないのか？ なるほど、それまたしかに私だ。が、しかしまた、部分であることも疑いようがない。私は〈人〉を、個体それ自身においてすら時間軸・空間軸と共に事象を堆積する存在だと考える。ここに個人の可能性が弾力を秘めているのだが、いっぽう事象が人間のすべてを表現しているなら、事象そのものが私たちの存在であるなら、おそらく、私たちの意識は、露わにされる羞恥に堪えられないだろう」

城下はしだいに明るくなってきた。濃淡のわずかな移ろいを見せる陰影の中に、家並みや木々が小さくたたずんでいる。天守の内部はまだ薄暗い。

「しかし、いずれにしても私たちの意識に対して先行するのは事象であり、その限りにおいて私たちは事象の領域を脱しえないはずだ。というのは、把握されることならば、それはすでにして事象なのだから。とはいえ、事象一般はむろんだが、与件としての主体性があるなら私自身の行動の軌跡すらも、私自身に対して相対的になる」

吉景はゆつくりと冴乃を見やった。

冴乃の位置からは、吉景の姿は左方からは外の光を浴び、右方からはくすんだ燈台の明かりが差して朱色の翳りを頬にゆらめかせ、陰影も判然としない。

「私は、この相対性が悲しいのだ。私が動いたのか、それとも私を取り囲む社会——時代が動いたのかわからぬ。にもかかわらず、一方では相対性の基準が固定されている。私自身ではあるが、他者ではない。私の生きている時代ではあるが、他の時代ではない。私は、こうしたどうにもならぬ閉鎖系に、取り返しのつかぬような恐怖と焦燥とを覚えるのだ。何方を向いても、無限の中に閉じ込められている時間空間の有限にぶち当たる。私にとっても有限は無限にあるだろう。その意味では無限とも言えようが、しかし私の行き着くところは、私であることのみによって、有限なのだ。僭越な欲望かもしれないが、私はこの有限の壁を突き破りたい、相対性を絶対性と置換したい」

一語一語に想いをこめて語る吉景の瞳は、表皮を焦がす熱を帯び、希望も湛えているが、その奥には虚ろな洞が宿っている。その黒い瞳孔に蠟燭の炎が小さく映り、極微の世界へ吸い込まれるようだ。

吉景の強い視線を和らげて受けながら、冴乃は夫が何を言いたいのか探っていた。そして、先を促すように瞳を光らせた。

「嘲笑ったのか？ いいだろう、その愚弄は正当だ……」

冴乃は、つと、抗議するように夫を矢のような視線で見上げた。吉景はかまわず続けた。

「私がこの時代に反逆し、時代的参加に生きる人々と別様の行動を選択するとしても、けっきょくこの時代への対立性しかもてないだろうし、とすれば、けっして相対性から離脱することもできないだろう。しかも、有限を超えたところは、また、有限性へ至るのだ。というのも、還元するならば、人間存在は宇宙構造の時間空間的な単位の一つだから。畢竟、この時代の産物だ、私の結果だ……水から飛び上がった魚は、水に戻るか、あるいは陸の上で干から

びて死ぬ。魚という種から脱却することもできずに」

短くなった蠟燭には、融けて流れ落ちる油が凝固して、醜く凹凸が刻まれている。冴乃は、水底から浮び上がる泡が急速に膨脹するように、不安が増幅するのを感じた。

吉景の眠れぬとき、あるいは夜の魅惑に誘われるとき、こうして一夜を語り明すことは珍しくない。だが、昨今の彼の雰囲気には、何か危険を感じさせる微細な針先が潜んでいるようだった。二十一歳の時に加納の城主となり、爾来、藩の統治や経済・文化の振興に力を注ぎ、大名として常識的な生活を送ってきたのだが、近ごろ急に藩政への関心を示さなくなっていたのである。寝所に閉じ籠もり、かたくなな姿勢で一点を凝視したまま過ごす時間も多く、伴も連れずに突然遠乗りに走りだすこともあった。

散佚する過去の出来事をつなぎ合わせて、冴乃は、ここ二月ほどで変貌した夫の言動に伏在する因果性が、あの時と共通であるようにも思った。漠然としたおそれは、既に彼女の中で、恣の自由を獲得していた。

「私は個性を問題にしているはずではなかった。しかし、有限性と相対性に囚われた私の宿命は、必然的にそこへ私を追い込める。何故なら、個性は有限性と相対性だからであり、あの慚愧と屈辱への忍耐を要求しうる唯一の存在価値だからだ。とはいえ、時代精神は常に個性の伸張と軋轢を起こす」

言葉を切った吉景は急に、憎悪を籠めた表情で、装飾はほとんどないが、冷たい機能美を放つ天守の内部を見回した。

「どうだ、この城郭は。隙のない経始、強靱な構築、格好の地形。これは既に完結しているのだ。新しい人間の生きる余地を拒絶しているのだ。しかも、私がこの城で生まれたとは。……愚痴か怨嗟か。繰言と言われてもしかたあるまい。だが、幾度悔やんでも悔やみ切れない心地がするのだ。私は選択する権利もなく、大名という定着液の中へ投げ込まれた。そして、天正十六年から存続する伝統的なこの城郭と共に、与えられた法度を踏襲し維持しつつ、私をその情況へ埋没させてきた」

吉景の静かな声は、堅格子窓から漏れることもない。ただ、瞳全体が形のはっきりしない炎のように、めらめらと燃え盛っているようだ。

「私は加納城の美しさを貶めることはできない。いや、この完全さを讃えずにはいられないほどだ。しかし、完全さに直面して、その強い斥力を感じない者があるか？ 完きものは、他の何ものの介入をも拒絶するのだ。常に、それ自体のみであることを主張しているのだ。私たちを蠱惑的におびき寄せながら、しかも私たちとの距離を厳然と保っている。深みへ引き摺り込み、自らは無関係に、時間的でない距りの空間に酔い痴れさせようとする。だが私もまた、私の独自性を創造したいのだ。己に、その完全性へ挑むことを課するのだ。即ち、私が状況を形成しなければならぬ。僭越を免れまい。が、私はこの焦躁に憑かれて以来、ひたすらこの城から逃れ出ることを望むようになった。私を育んだ時代精神の象徴としてそそり立つ加納城が、亡霊のように、私の眼前へ巨大な翼を拡げる。先が見えない、見えない。ここにとどまってはならぬ。私は遮られた呪縛を解くのだ。私の個性が畢竟、時代精神の写像であり、有限性と相対性であっても、そこから予想だにしない世界が開けないとは誰が言えよう。もちろん持続は不可能だし、必要もない。瞬間の閃光で私は満足しなければならぬ。何故なら、持続はむしろ毒素を培養して私の体内に瀰漫するからだ。そして、私の個性への意思が結果によって判断されるなら、私はその意思の実践と共に死を選ぶ」

冴乃は、はっとした。言葉の過激さとは裏腹に彼の表情は穏やかだが、揺がぬ決意を抱いているように感じたからだ。

この時、太陽が金色の片鱗を水平線上に現わし、その直射を受けた冴乃と吉景は眩しげに光の顫動を眺めやった。「権力にしろ、他の何らかの、私の意思と対立するものにしろ、実践に際しては、けっきょくは私自身の意思の純粹だけが問題となる。この意味では、権力が強ければ強いほど意思は瀘過され、研磨され、透明になるだろう……」

ここで吉景は言い激んだ。しかし、それは決意の崩壊ではなく、冴乃に表白することへの逡巡であった。固唾をの

む冴乃の視線を背後に感じたまま、吉景は眼下に広がる情景を見下ろしている。

「城をつくる」

吉景の言葉が時空に深く刻まれた。刻まれた言葉を、冴乃は五感で確かめた。一瞬後、衝撃的な初夜の出来事と短絡し、激しい火花が散った。

天守の中は沈黙に凍てついた。

黄金の球体が眩暈きつつ海面へ直射光を落とし、彩りも華やかに細波立っている海上へ悠然と浮上しはじめた。城下はまだ寝鎮まっているのであろうか、町人たちが活動しだしても、むろん二人にそのざわめきは届くはずもないのだが、閉め切つてある家々の戸が遠く立ち並んで、ことさら静寂が深まるようである。氷に反響する鼓の冴えた音色のような冬の足音を微かに聴く思いで、冴乃の胸に寂寥感が吹きすさんだ。

落葉樹の葉は落ち、残っているものもおおかた色褪せている。靄は晴れ、すべてのものがはつきりとした隈取りを見せ、黒いほどの青空は、まるで宇宙へ落ちこむようだ。

冴乃はふと、天守の内部の明るさに気付いて、気持ちを下ろち着けるように灯を吹き消した。つんと刺戟する臭気が、しばらく天守内の空気に立ちこもった。襟元を合わせ直して顔を上げると、矢狭間からいっばいに洩れくる稿模様の光束が美しい。しかしそれは、冴乃の波立つ心理状態をさらに掻き乱すかのようだった。

武家諸法度が新しい築城工事を禁止しているうえに、一国一城令によつて支城の廃止が命じられている。工事に取られ掛ければ、否、吉景の企図が幕府に漏れでもすれば、切腹御家断絶は必至である。仮に寛大な裁定が下つたとしても、減封か改易は免れない。それほど嚴重な禁制を侵してまで、築城を実行しようというのだろうか？

まさか、と冴乃は思った。が、すぐに別の道筋を考えた。吉景は話の過程で「瞬間」と言つた、「死を選ぶ」とも言つた。そこまで突きつめた思考の帰結であつてみれば、「築城」は戯れ言ではないだろう。だとすれば、単なる夢想ではなさそうだ。ただし強行すれば、破滅へと向かつて家中を巻き添えにするにとどまらず、治世の混乱や幕府の介入によつて領民にすら迷惑を及ぼしかねない。

だいいち、着手する以前の問題として、家臣や親族から徹底的に反対されるだろう。立ちふさがる一体化した勢力に対して、いかに領主といえども吉景一人で太刀打ちできようか。

それとも吉景は、過程にある自己に陶醉するつもりなのだろうか？ あるいは、主君への家臣や領民たちの忠誠を、吉景は信じているのか？ だが、そのとき、將軍に対する吉景の忠義はどう位置づけるのだろうか？

冴乃は、あらゆる面において吉景のあまりにも自己中心的な思惟と、けつして実現できないという壁にぶちあたらずにはいられなかった。それでも、吉景における意思と実践とが結合する可能性が大きいと感じ、どう反応すればいいのか冴乃は手探りしはじめた。

思い起こせば、吉景は真剣かつ誠実に政を執り行う一方、側室もおかず一途に自分を愛してくれた。そうしながら、吉景はいつも窮屈そうだった。自分で手綱を絞つて、必死に柙の中に収まろうとする姿勢が見られた。その自制感を表に出さず、今思えば社会と領主という制約を引き受けようとしていた。とするなら、押しつぶされそうになるほど抑圧してきた己の内生命が、遂に溢流したのではないか。川が溢れるように、火山が爆発するように。

冴乃の思いはゆつくりと回転していった。

死、それも肉体的な死ばかりでなく、その前に生じるであろう社会的な人間としての死に怯まず、悠久の歴史と巨大な社会、そして幕府権力に挑もうとする吉景の直向な情熱を、無碍に断罪すべきではないのかもしれない。結果はわかっている。まさしく絶望的だが、それ以上に悲劇的であり、終焉に向かつてたじろがない吉景に対し、固有の美学と、武士らしい雄々しさを評価することもできる。感傷的な英雄の幻影として描出することも不可能ではない。

冴乃もまた、大名の妻という立場に居たたまれないほどの束縛感を覚えることがある。生まれる時がわずかでもずれていたら、または男に生まれていたら別の生き方があつた、あるいはあるかもしれないという漠然とした違和感に

囚われるのである。その意味で、夫の気持ちがわかるような気もするのであった。そう、吉景が対峙するのは、時代とか社会的座標などの特殊な情況に関するものではない。人間の生そのものにおける根本的な壁なのだ。その壁が、時代的な意匠をもって個々人の前に立ち現われるにすぎない。

考えを巡らすうちに、先ほどまで抱いていた負の想念の濃度が稀薄になってきた。重大な決意を打ち明けてくれたことに心安らぐ思いがして、破局をも顧みず自己実現に到り着こうと意気込む吉景の意思に寄り添っていくという選択も悪くはないのではなからうか。

冴乃は既に夢幻の流れに揺曳していたのかもしれない。絶大な権力に抗いつつ築城の指揮をとる吉景、そして、その傍にびったりと寄り添う冴乃自身の姿。槌音の勢力的な響き、積み重ねられる石塁、空間を貫く巨大な通し柱や丸柱——そんな光景が、吉景の告白によって継起された。もはや空想の出来事ではなく、現実から遊離して象られた事象である。吉景と共に死へ赴くであろう自分自身が、その死に逡巡してないという精神状態も、冴乃の矜持を満足させていた。

「わたくしも新しい城を見とうございます」

冴乃は思わず知らず、こう言った。吉景は驚き、困惑し、それから目を輝かせた。

「冴乃を信じていいのだな」

吉景は冴乃を強く抱きしめた。

「冴乃には謝罪もしなければならぬ」

吉景はかすかに声を震わせた。冴乃との生活は、既に八年間に及んでいる。だが、吉景は子を生もうとはしなかった。

吉景の意思であることを知らない家臣たちは、御家断絶を恐れていた。冴乃の地位はしだいに貶められつつあったのである。

手を握り締める吉景の暖かみに、彼女は優しく許しの頭を振った。

「もう、こんなに明るくなりました」

ふたりは天守の階段を一段、一段、ゆっくりと降りていった。

加納地域は大名の封地として格好の地形であった。東を海に接する港町が西へゆるやかな勾配で上昇し、領内のやや東方寄りにある円錐台状の丘陵に昇り詰める。僅かに下って再び上昇し、隣国と西の境を成す真地山の高峰に至る。しかも南北は古浦と房矢の二筋の川で区切られており、四方を自然の防塞で固められた、東西へ伸びる舌状の領土となっている。その反面、交通の便が悪く、流通経済のかなり発達した永文時代にあつて、商業は振興しなかった。しかし、それも農業生産を上回るほどの漁業と海運の利益で補われ、町人や武士のある程度の生活に堪えうるだけの財力は有していた。

この地の「城山」と称される楯状台地に威容を誇る加納城の創業者は、池永政輝であった。しかし、政輝は西軍に与して関ヶ原の戦いに敗れたため、代わって慶長五年、卯月信隆が六万石の譜代大名として封ぜられたのである。信隆は直ちに、城郭の大改造に着手した。三層の天守を五層六階とし、さらに乾小天守を増築した。曲輪は政輝の手腕でみごとに縄張りされていたが、丘陵の上にある関係から、濠は浅く防備に不十分であった。それゆえ、三の丸の外部に東の丸を経始して、古浦川の上流から運河で引き込んだ水をその外周に巡らした。こうして、四年間にわたる大工事は慶長九年の末に完成し、石高のわりには規模の大きい、現在の機動力に富む平山城が囲りを睥睨するようになったのである。

だが吉景は、この完璧とも思われる加納城を嫌悪したのだった。外部に対する防衛の周到さ、皮殻の厚み、形式の統一性。それらはすべて内生命を表層へ集中させた結果の象徴にほかならない。内部の空間構成は、実は時間との有

機的関連性を断った空洞ではあるまいか。そう、この城の時間空間は、外皮のためにある。ところで、外皮が要求されるとすれば、それは種子の充実のためではないか。さらに、かつて歴史の先端を切ったこの城も、もはや時代を形成した現在、単なる表象でしかない。

あるいは、こうした憎しみは、完全性が有する強力な斥力に対する嫉妬であるかもしれぬ。にもかかわらず、吉景は憎しみも嫉妬も触媒にすることなく、自己の場を求めていることは吉景の自覚的な事実だった。幕藩体制という既成の場に自己を蕩尽することなら、吉景という人間でなくともいい。彼はそれを拒絶するのだ。個々の人間に特殊性はもちろんあるが、しかし、相互に人間であることの基線から特定の点上を占めるとすれば、それらの相対的関連は特殊性を払拭し去る。すなわち、同一平面上における基線と点との距離の問題でしかない。同一次元の関数であり、時代精神から必然的に演繹される個性性なのだ。したがって、この個性性は受動的である。

吉景が求めるのは、それゆえにこそ世界の直中へ彼の価値を投げ込みうる能動的な質、即ち、個性であった。ここに主体性が生じる。しかし、人間存在自体が関連によって自己と外界とを形成するのであれば、否、単に、関連づけられる、というその距りによってのみ自己と外界との区別が生じるのであり、この二つの元が総合的な世界を構成するのであるなら、関連そのもの、即ち、事象そのものが時間空間の内容であり、その意味から、個性の絶対的な相対性は幻想でしかない。また、関連は意識によってもたらされるものではあるが、意識は畢竟、触媒にとどまるのであり、それ自体はいかなる機能をも有することなく、外界と自己との間に結合子として介在し、外界と自己を変容させるのみである。

とはいえ、意識は生物的な営みの最も根底における契機であり、生の場を主体的に形成することを可能にする能力であるが、人間は意識を意識するゆえに、形成された情況が自己から自立して能動的に主体に作用する、という反作用が発生するのである。意識はこうした弁証法的な相関関係をもたらし、個性の絶対的な相対性を不可能にする。つまり、相対化すらをも相対化する。とすれば、個人としての存在意義はない。

しかし、帰納法が人間において実現されるならば道は展ける。なぜなら、帰納法は特殊を前提とするからだ。即ち、まず存在意義を指定することが可能だからである。それは必然的に、基線上の点の質的な相違を思わせる。だが、これは時代精神の中にとどまっていたは果たされえない。時代に反逆した実践において、演繹されて在ることの上に質的な特殊性を獲得し、その時点から自己を帰納しなければならぬ。帰納に要する時間は、それ自体が時代性とならないほどに短く、しかも、自己の特殊性が時代精神と接触するほどに長くなければならない。それは実行へ着手した瞬間に始まる。そして、決して戻することは許されないのだ。

したがって、極論すれば吉景にとって新城の構築でなくともよかった。仮にの話だが、大船建造でも参勤交代の停止でもいい。とにかく、反逆すること、それによって時代の範疇から脱出することが眼目なのである。しかし、こうした合目的な意味をも含めて、彼の骨髄までも徹した加納城の象徴性を崩したかったのだ。彼自身が先に立つ。そして、吉景と融和し合体した新しい城郭が、彼の彼でなければならぬ個性の象徴となり、反時代的行為であることから、世界における存在意義を主張する。

とはいえ、城の普請をどの程度の期間、幕府から隠蔽しておくことができるかが最大の難関である。発覚はむしろ時間の問題であるし、切腹は避けられまい。当然、妻や家臣も連座させられることになる。だが、吉景はなお、その反逆の実践を生きてみたかった。

四人の家老はなかなか来ない。冴乃に話し終えたその足で、彼らに築城の計画を公表したのだが、吟味の名目で相談を午後にしたと下がっていった。そのときの光景が腹立たしく想起される。といっても、かくべつ印象的なものではない。吉景が想定したとおりの衝撃と驚愕と当惑、そして直ちに見せた対立的な姿勢。四人が四人とも同じような反応だった。

そんな挙動や、それに抱く自分の怒り等に自嘲的な苦笑を洩らしながらも、吉景は苛立たしげに手指を動かして待っていた。本丸の裏庭に面した奥座敷である。秘密を保つ必要から、誰ひとり近寄ることは許されていない場所だ。既に中空から傾いだ秋の太陽が、逆に明りを吸収するように、淋しく照っている。

独り——孤独感が吉景の脳裡を去来した。城主が坐る高座の居心地も悪くない。ひっそりと静まり返った城中に、この穏かな生活に、どんな荒波を立てようというのか。……すてにして徒労感と空しさだが、ぬるま湯のような柔らかさで彼の内部へ入り込んだ。必然的に、さきほどの家老職の態度に対する猜疑の念が頭をもたげた。吉景の弟、卯月與茂を中心として、彼らは主君への対立的な結束を固めているようでもあったのだ。かつては、何事も吉景の面前で討議されていた。加納藩における主君と家臣との間には、そうした信頼があったはずである。しかし、それも僅か二月余の空白が置かれただけで、その日その日に処理すべき政務がなおざりにされたとはいいながら、こうして脆くも崩れ去ったことを示されれば、畢竟、安寧に委ねる双方の妥協だったのかもしれない。とすれば、明らかに変貌した吉景と、己の立場にすぎり付く彼らとの間に、時間的なずれが生じるのは当然ではないか。対立的に見えた彼らも、あるいは、吉景の変化による吉景自身の写像なのかもしれない。

こう考えると吉景は、先行しているというよりも、むしろ取り残されたような寂漠感を覚えた。のみならず家臣たちや、眼前に展ける庭の景観など、彼へ対峙する世界がすべて、相互の因果性も及ぼし合えないほどに因果性を喪失して、遠い非空間的な距たりをもって知覚された。

分厚い座布団に胡座をかいてじりじりと待つ彼の太腿と張脛の接触部分は、気味悪く汗をかいていた。突然、耳をつんざく蝸の鳴き声を意識して、狂気じみた破壊欲の衝動に襲われた。

ようやく家老たちが入って来た。吉景に対座して、四人が一行となった。それぞれの面貌は持っている。が、表情はどれも似かよったものだ。

「遅くなって申し訳ありません」

うやうやしい挨拶をすませると、與茂がこう口を切った。兄とは二つ違いの二十四歳だが、妙に老成した印象を与える。

「さぞ意気の合った相談がまとまったろうな」

脇息に身をもたせかけて、吉景は皮肉な薄笑いを浮かべた。それは、朝、四人から受けた漠然とした距りを、支配力の弱化という具体的な一面で捉えた吉景の自辱の笑だった。

「いえ、見解をまとめめる余裕ありません。補修工事さえ容易に認められぬ今日、新規の築城が許可されるはずはありません。それを知りながら、われわれに諮られた。そんな兄上の真意を量り難いのです。いったい、なにゆえ幕府の命に叛こうとなさるのか」

「叛く、などという言葉を使ってもらいたくはない。私は時代精神への反抗を意志するのであって、幕府を相手にしているのではないのだ。なるほど、幕藩体制は時代を形成した大きな原動力であるにしろ、もはやそれは自らの形作った時代の傀儡と化している。権力とはそうしたものだ。そしてまた、現在の私は幕府に忠誠を尽くす意思も義務もない」

「義務がないとは言えますまい。五年前、兄上は大名誓詞を提出されました。貴方の存命中は有効なのです」

「私ではなかった」

「戯言を仰言いますな。私は、存命中、と申し上げたはず。私ではなかったなどとは、將軍を侮辱することになりましょう」

「では、お前たちがその無理解ゆえに私を侮辱していることに気付かないとでもいうのか。かつての意思が、時間を超えて規制するとは愚かな話だ。選択の連鎖だから有効だというのか？　しかし、選択の契機においては主体的であっても、選択の系に関する限りにおいて、常に外部の状況からそれを迫られるという受身の立場にある。跳ね返され、

弾き飛ばされ、どこへ行くかも知らぬ氣に生き続ける。それでも、私が過去に提出した誓詞の内容に従属させられねばならないのか。畢竟するなら、自死する自由を棄てねばならないのか。そうは言わせまい。自死とは、過去の拒絶だ、放棄だ。とすれば、自死のきっかけが内面的にも外面的にも生なまの中に遍在するとの事実だけで、誓詞の破棄は十分に正当だ」

「愚痴はおよしなさい。いつまでも自死の自由を信じられる人々は幸せだ。とはいえ、現在生き続けていることに對する責任を、自死の自由に照らし合わせるとき、兄上はどう処理しようとなさるのか。一個の人間をすら生存させること、それは社会にとって莫大な負担であり、激しい痛みでもあるのです。外界の条件が過去の貴方の選択と関わり合いをもっているとしたら、そして生きる場に関する外界の優越を認めざるをえない事実てんたんに恬淡てんたんであるなら、破滅を避ける道は、過去の条件と選択の關係を持続する以外にないと容易に断定しうることでしょう」

「当然のことだ。しかし、私は外界に對して無限の貸しを与えている。私の生きてきた行動の集積と、跳ね返されるときの痛みとの——これが責任だ。というのは、自死こそ、人間の行動において最も外界との接触を緊密にするからだ。私が真摯に生きるとすれば、このうえさらに、社会に對して優越する権利がある。しかも、破滅を恐れぬ者に、お前はどんな強要の力を加えようというのか」

「社会は決して、なんびとの死も惜しみはしない。自死の自由と姿勢を楯に大きく振りかぶるのは滑稽です。真摯、などと曖昧な表現でごまかすとは、そんな人々に特有の傲慢と感傷だ。とはいえ、もし私たちが貴方と同様の考え方を実践すれば、世界はどうなりましょう。まさか、貴方だけにその資格があるというのでもありませんまい」

奥茂の真つ直ぐな鋭い視線が吉景に眩しかった。

弟の考えは正しい——ふつとかすめたそんな思いを、吉景は強引に黙殺した。

「その限りにおいてなのだ。お前たちにできるはずがない。反逆者は、太陽が凍死しても常に少数なのだ」
喉元まで這い昇った言葉を、吉景は秘かに嚙み潰した。

「私が要求するのだ。私の尊厳と名誉を懸けて、反逆の権利を主張するのだ。そして、私の存在価値を世界へ投げ込むことによって認承させるのだ。したがって、実践が先に立つ。私は城をつくる」

「要求はむろん貴方の自由に委ねられます。しかし、個々の人間には自己の存在価値を主張する権利がありますまい。権利は社会によって与えられ、価値は歴史によってのみ認証されるものです。簡単な、明白なことではありませんか」

「意義あるものは価値をもつ。私が意義を見出すならば、価値は生まれるのだ。お前は、真に行動の意義を感じ取ることができるか？ 羞恥すべきかもしれぬ、だが私は散えて断言する、私は城築じょうちくに真の意義を実感するのだ。このとき、意思は収斂し、力強い忍耐が宿る。裏返しとなつて、その意欲は使命感として私へ迫ってくる。こうした意義の看取こそ、社会のまったく関わり知らぬことであり、個人の特権なのだ。そうではないか。時代の進行の中に反逆者が誕生しないとすれば、同質の扮飾で煌きびやかに飾り立て膨脹した世界は、凋落し、やがて、むしろ全体の破滅が訪れるだろう。逆の方向から見るとすれば、反逆者は社会の犠牲となつてしまふのではないか。結果的には、社会のために身を滅ぼすのではないか。反逆者こそは、献身的な世界の救済者ではないのか」

「それを兄上が買つて出ようというわけですね。貴方は夢想していればいいのだ。英雄崇拜はもう古い。そうして單純に模型化された考え方は、抽象としてはけっこうでしょう。しかし、抽象は明らかに現実を貫き通つたものでなければなりません。貴方があくまでも抽象をそのまま、この社会にもちきたらそうとすれば、けっきょく実体のない幻影を相手取ることになります」

兄に對峙する奥茂の表情は、嘆きと苦悩の翳りを帯びている。

それに気付いた吉景は、かえって苦々しい怒りの昂じるのを抑えることができなかった。いかにも分別ありげな見解を諄々じゅんじゅんと述べ立てる。袴を着けて端座し、額から汗を滲ませながらもいっこうに暑そうな氣配も示さず、卯月家と家臣と領民とを一身に背負っているかのようだ。

「やめてほしい」と懇願するどころか、取り乱すようすもない弟を見ながら、吉景は、苦々しい思いと苛立ちを覚えずにはいられなかった。

太陽もやや傾いた。真珠のような艶のある柔らかい雲が、青空に鮮かだ。射し込む午後の光は、金色を含み、東へ向かっている吉景の目に池周りの風景から眩しく反射してくる。いつの間にか、威勢のいい蟬の声は跡絶えていた。突然、吉景の眼が見開き、異様な輝きを放った。

「私は、最後的には、現実を、問題としていない、のだ」

ゆつくりと、一語一語に区切りを籠めて吐かれた吉景のこの言葉は、瞬間、内容を露わにして、強大な浸透力で周囲の現実性を、それらすべてを無効にするような或る閉鎖時空の中へ押し潰した。追い打ちをかけられた四人の家に沈黙が襲った。

吉景としては表現すべきではなかったかもしれないが、反抗の構えとして、また、抽象の現実に対する反照の可能性を信じる契機として、自らに示すべき唯一のことだったのだ。

再び鳴きだした蟬の声が、初秋の昼下りの静寂をつん裂いた。

史茂は俯きかげんで搾り出すように呟いた、「兄上は、あまりにも人間外的な生き方をしようとなさっている」

「人間的ではない生き方があるとしてもいいのか。そしてまた、人間的な生き方がそれほど大切なのか」

「ありますとも、大切ですとも……」

ここまでにわかに口ごもった史茂を見て、吉景は激しく目で促した。

「まことにぶしつけで失礼なのですが、兄上、御子はどうなさるおつもりか。妾妻を置かれ……」

「言うな！ 冴乃には責任はない」

瞬間、憤りに沸き立った吉景は、史茂の声に覆い被せて遮った。

他の家老職が無言でざわめく中、史茂は反発した。

「では、兄上の一存なのですか」

「そうだ」と吉景は居丈高に言い切った。史茂がいぶかしげな眼差しで吉景を見ながら、わずかに身を退いた。

「兄上、それではあまりにも身勝手に過ぎましよう。築城の件ばかりではなく、嫡子をも儲けようとなさらないとは、いったい私たち一族をどうお考えになつていらつしやるのか。義姉上もおかわいそうだ」

「多数のために己を殺せというのか」

「どのように足掻いても越えることのできぬ常識は、常に時代の中にあるものです。その常識の一つが、多数者と少数者との関係であると私は思います。しかも、兄上自身をも殺す結果となるのであれば、いずれの立場からしても築城は取りやめるべきです」

「私が城をつくりたい、少なくとも私個人に関しては、それだけで決定的なのだ」

「貴方はそれで満足なさいましょうが、私たち一族や家臣、さらには領民ははなだだ迷惑いたします。可能だとお考えになるなら、その迷惑を取り除いていただきたい。当然、配慮されるべき条件です」

「私は多数者の優越を否定し、単に多数であるに過ぎぬ集合に対する義務を拒絶するのだ。個人の尊厳を多数によって屈服させるのは、尊厳そのものの価値を貶める、集合体維持の便法にはかならない。多くの人々が一致して或る目的を標榜する。と同時に、必然的に少数者もまたその目的へ捻じ向けられる。しかし、それら多数者側の要求が通った結果、その恩恵も弊害もおのおのに対してまったく等値なのだ。すなわち、目的の価値は、多数者のものであるうと少数者のものであるうと、いささかの優劣もない。多数決の原理は、それゆえ、農民一揆として表われるような全の底辺から湧き起こる運動とはまったく別意の、単なる政治体制なのだ。この観点から見れば、そしてこれこそ最も重要視すべきなのだが、少数者が自発的に敗れねばならぬ理由もなからう」

「或る選択を外部によって強いられた集団の中で見解が分かれた場合には、そう考えられぬこともありますまい。だ

が、兄上と私たち一族の問題においては、これまで維持してきた一定の状態を、単に継続しようとする集合に対して、その内部から貴方一人が能動的に集合全体を巻き添えとしつつ定常状態を破ろうとなさっているのです。原初的には能動的でも受動的でもなかった、その意味での無関係の集合の中に、貴方が集合と乖離した行動を採るだけで、貴方と私たちとの間に能動と受動という関係を新しく持ち込むことになります。これははなはだしい罪悪です。むろん、私たちにまったく影響を及ぼさない行動ならば、許される場合があるかもしれません。しかし、始源における定常状態、すなわち、人間社会において、全の有する受動的な自由が最上位に優越していることの承認と、それを転覆することに關する罪の意識こそが、人間社会の秩序を形作ってきたではありませんまいか、責任と義務、すなわち必要最低限の倫理ではありませんまいか」

「なるほど、私がおまえたちの自由を侵すことによつて罪惡を犯す結果になるということは認めよう。だが、時代は常に閉塞の方向へ加速度的に向かうものだ。この運動こそ、まさに歴史自体の孕む危険性であり、私たち個々の個性と存在価値を無視する最大の毒ではないか。歴史は、全による社会的な欠如の充填への意識的あるいは無意識的な意思によつてつくられてきたし、またその動きは、奥茂の指摘するとおり倫理的な精神に基礎づけられている。むろん私自身、その範疇内にあることは否定できぬ。しかし、時代は歴史の形式であり、この時代的な意匠が私たちの直接関わりうる時代精神であることを考えるならば、私にとつての当面の相手は時代の意匠でなければならない。なぜなら、意匠こそ、それ自体において不可逆的に閉じようとすることによつて、それを形成した欠如の充填への力強い運動を拒絶するからだ。ということは、実は歴史形成の余地すら残さずに、全の發展的な運動そのものをも停止させることになる。ここに、反逆の、あるいは創造の、全における受動的な自由を凌ぐ価値と責任とがあり、罪惡を善に転換する契機がある。すなわち、私の私でなければならぬ存在意義を確立するための、逆の意味からする倫理的な基盤が据えられる」

「貴方は生の無意味さに堪えられないのだ。乾燥に戦^{おの}く弱々しい精神が、神経症的な叫び声を張り上げているに過ぎない。生は、意味を探し求め、創らねばならぬほどに無意味であることに気付いている貴方は、そのことを直視することが怖いから、理屈をこね回しているのです。ほんとうは兄上も、平等院でも建立すれば心安らかなのでしょ

が」

「極楽浄土など、信じたくとも信じられぬわ」

「そうですね。個人にとつて死と死後に意味はないのですから、死に向かつて生きているわれわれは、無意味に向かつて生きているとしか言いようがありません。しかも、死への道程は偶然や必然の産物を堆積するだけです。とすれば、私たちにとつてはもはや、ただ牛のように堪える以外の術はありません。堪え抜いたところで、どんな価値も生じないことも知っている。だが、それでも、堪える、牛のように。こうした忍耐心に、生命力が宿るのです。それも、溢れるようにでもなく、また輝くようにでもなく、切羽詰まったぎりぎりの必要度に応じて」

「そうした生命力が何ものをも創造しないなら、人間は滅びるがいい。私は牛でありたくない。死への道程に、単なる偶然や必然の産物を積み重ねたくもない。私も人間の必要度に応じた生命力の存在を信じ、肯定しているのだ。ところが、必要度の内容と量は人によつて大きな違いがある。それこそが、個性の源泉だ。私は持ち合わせた生命力で、他のあらゆる存在の仕方と異質になってみせる」

筆頭家老の浅居が口を挟んだ。

「異質でありうるとお考えなのですか」

「もちろんだ。反抗の時点において純粹でありさえすれば、個々の人間はそれぞれ異質となる」

「純粹であることは、自己の欲動に委ねさえすれば誰でもできましよう。したがって、正義であることこそ、社会的な人間としての使命だと私は考えますが」

「社会正義ではなく、自己に対する厳密性こそが問題なのだ。それは純粹さによつてのみ保証される。関連の透明性

だ」

「厳密性と仰言るならば、殿ご自身、矛盾した考えを抱いておられます。というのは、現実を問題としない、と表明されながら、現実的な時代の意匠を相手取る、と述べていらっしやるからです」

「私が厳密性に含ませた意味は論理的なものではない。私の抱いている意思と、その実現への行動との密接な因果関係なのだ。厳しい断念と放棄によって種々の夾雑物を取り除き、動機から具体化へと直接的に貫くことだ」

また注釈を加えなければならぬのか。語れば語るほど吉景は、当初の意図へただいたずらに扮飾を加えてしまい、意思がかえって不純になってゆくような気がした。しかも、語らなければならぬ。なにゆえ説明を求めるのか。一個の人間の精神は、言語表現による伝達によって全人類のものとなり、語り手の内容は空虚と化す。大きな犠牲である。しかし、避けられぬ。

〈関連〉に激しい憤りを感じながらも、自らを生贄としつつ生きる人々を憐憫をもつて受け容れ、吉景は無力感に苛まれながら、ずるずると彼らとの会話へ引き摺り込まれていった。

「しかし、私は論理的な矛盾をおかしているのでもない。何故なら、現実を否定するという仕方では現実を問題としないのであり、現実を拒絶するという仕方では現実を相手取るのだからだ。この行程は、思弁から実践への移行における必然性ではないか」

汚臭を嗅がされたような表情で、吉景は早口にこう言った。

「けれども、兄上」と奥茂が再び語りはじめた。

「実現されるべき、兄上なら兄上なりの理想的な世界観を明瞭に把握するとき、はじめて現在時の構造を否定し、拒絶する権利が与えられるはずです。否定の契機は、現状への単なる不満でもなければ懷疑でもない、未来像そのものの内部にある重要な属性なのです。この点に、兄上の反逆の弱みが窺われる。そうではありませんか。現在時における世界の構造もまた、たとえそれが不完全なものであっても、少なくとも肯定性への運動を不断に継続しているという意味の否定性、すなわち、否定性の立場から観るならばそれもまた肯定性であることからする、どっしりとのしかかる重みを有しているのです。この重量感を積極的に認めなければ、私たちは、認識あるいは行動の核心を喪失することになります。懷疑さえも認識なのですから」

言葉を切った奥茂は、急に口調を変えた。

「輕佻に過ぎるというのだ。なるほど、時代は民族的様式をもつて形成され、おのおのの時代は、兄上の仰言るように、それぞれの意匠を着け、一時代における深い幾重もの層が微妙に交錯しては蠢き、相互に作用を及ぼしつつ歴史を運んでゆく。そして個人の行動としては、一方では意匠へ順応的に関わる仕方、すなわち歴史への時代的参加があり、他方では意匠に対する反抗、すなわち歴史への非時代的参加がある。兄上は後者を選択なさった。しかし、兄上といえども非時代的参加に堪えることはできないでしょう。厩大な過去を背後に控えて、その過去の無限に奥まつた岩盤からぎしぎしと押し寄せる圧力を、全の外部へ飛び出した者がどのようにただ一人、背中で受け止めるというのです？ 歴史は虚妄を許さない。常に実体的に、あまりにも実用的に成形するものです。戦も飢饉も祭典も希望も、何もかもすべてを呑み込んで現実性として漂白し、時々刻々と過去の谷底へ流し去ってしまう。そして、正にその谷底から放射される重力の体感と、時空の先端に抽出されてあることの不安こそ、人間の共生感を醸成するものであり、私たち一人一人を時代的な参加へと包み込む。人間は身の危険を直感するものです。こうした共生の輪から外れるならば、一人きりで事象地平の崖っぷちに踵を接しなければなりません。多くの者は時空の滝壺に引き込まれ、ある者は精神の迷宮に迷い込み、ある者は多くの人々を巻き込んで破滅し、ある者は孤独な自死にいたる。輪の中と外の均衡が崩れると、世界が阿鼻叫喚の修羅場と化す。しかし、人間の過去、現在の営為の評価はべつとして、今も誕生しつつある新たな人間が希望を抱くかもしれない不確定な状態のまま、人類を絶滅に導く恐れのある芽は摘まねばならない。私は心からそう考えます。ですから、とどまることのないであろう意匠形成と崩壊の過程において、可

能な限り全との調和を維持する行動が、継承者としてしか生きられない私たちの使命であり、責務なのです。にもかかわらず兄上は、自己の個的価値を主張するために、なんら新しい世界観を提示することなく時代精神を否定なさる。

それは僭越な、単なる子供じみた反抗でしかありません。領主の地位にある駄々っ子が、自己を誇示しようと大袈裟な見振りを見せる。私にはそんな気がされてならないのです。事実、もし貴方の意図が現時点で公儀に通じれば、貴方は実際的ないかなる抵抗を試みる術もなく、赤子の手をひねるよりも簡単に処理されてしまうではありませんか」

奥茂がこう言い終わると、その場に居合わせる五人の間に血走った雰囲気張り詰めた。いくらなんでも「公儀」という言葉は禁句だろう。それまではほとんど反応を示さなかった三人の家老も、卑屈とさえ思われるほどの複雑な当惑を表わしている。吉景の反応を読み取ろうとも考えるが、しかし彼をまともに見る勇氣もなく、奥茂との間に挟まれて、落ち着きなく視線を小さきみに動かしたり両手をさすったりするばかりであった。

吉景にとつても、弟の最後の言葉は意外かつ当然ではある。だが、城築の計画が幕府に洩れた場合を想定する、その想定すら生じないほどには、彼や家老たちとの間に信頼を通わせていると思っていた。しかし、外界を遮断して思弁にふけっている間に隙間風が吹いていたのかもしれない。いや、もともと信頼が身勝手に一方的な幻想だったのかもしれない。

とはいえ、奥茂の気持ちがわからないでもなかった。現実を重視し、全的な行動を選択しようとする奥茂が、論理の補強として公儀を持ち出すのは必然である。なぜなら、現実社会において必然性として説明しうるものがあるとしても、それは論理的な構成による解釈と大きな誤差を生じるからである。論理は生の精神を止揚した抽象世界にしかない。

公儀による制裁か——吉景はふと、自嘲的な笑みを浮かべた。「制裁」は時代精神の、すなわち、いかなる内容と形式であれ時代の中核を成す思想は常に権威と化すのだが、その権威という固定観念の、見苦しい悪足掻きに過ぎない。というのは、吉景は直接的に全的な倫理を犯し、社会に反逆するのではないからである。彼は単に、時代と社会に融着した権力と矛盾するに過ぎないのだ。にも関わらず、その矛盾を社会的倫理にまで敷衍するのが、権力といえたいの知れぬ怪物なのである。否、権力と社会倫理とは、そんな関係を結び合っているのだ。

一方、奥茂は苛立たしげに俯うつむいていた。政治権力による圧殺——何故これを言葉にしなければならなかったのか。単なる脅威に過ぎないのだ、現実を貶おとしめる以外の何ものでもないのだ。激しい後悔の念と慚愧と同時に、彼はまた、虎の威を振りかざした羞恥も感じないわけにはいかなかった。空間的、時間的に無限の拡がりをもつ、この濤々と連なる全人類の、否、全宇宙の歴史における、崇高なあるいは凡庸なあるいは醜悪な営みを、些細な事実の彼岸に流れる営みを顧るとき、彼は、そうした卑小な事柄を抹殺しうる偉大さを表現すべきではなかったか。

常に変革される宿命を負うものではあるにしろ、なお個々の時代は、あらゆる瞬間と分離しえぬ永遠に過渡期的な状況として、全人類の飽くことのない営為における意識的・無意識的な選択や淘汰の結果としての実現態なのである。現時の世界を嘲笑する者は、過去の人々が流した血と汗を嘲笑する者だ。歴史は長期的な観点から見れば決して飛躍しない。というのも、歴史は長期的な見地こそを要求するからだ。人的交流や民族性、風土、交易などと、それらが具体化された像である文化・文明や経済活動、および政治形態等々の形式との相互作用によって少なからぬ影響を受けつつ、連続的に、建設と破壊を繰り返すものである。それは、既に決定づけられた緻密に有機的な、それでいて不合理な超一恣意的連関以外の何ものでもない。

この膨大な積層複合体の鈍重な、しかしそれゆえに揺がぬ推移の運動の方向に対して、微小な構成員である一個人が何を為しうるか。否、成否の問題ではない。戦国時代の英雄や凡庸な武将、雑兵ぞうひょうたちもまた、全の渦中にあつて相対的な動きをしたに過ぎないのだ。否定されるに堪える全と歴史、およびそれらが必然的に抽出した時代性への畏怖と謙譲のほかに、いかなる個人の生き方があるか。人間の機能として、存在の仕方に関する合目的な能動的意思があることは認めざるをえない。むしろ、それは人間に可能性が具わっているという意味で評価すべきことだ。だが、

それが表現あるいは実践として表出される瞬間、空間的時間的な連鎖の直中に巻き込まれ、質的な変換を受けて全体の受動的な合目的性の方向へ捻じ向けられる。この認識も、吉景の言う、勇氣ある断念ではないか。だからといって、主体性が無意味であるとするのではない、それを捨て去れというのでもない。しかし、全と個の次元としての差異、その両極に横たわる深淵を見詰め、個を包括する全の超越的な力に忍従することこそ、人間存在の自覺的な出発点であるべきだ。

叩き割って吉景の前に投げ出してやりたいような思いが、奥茂の脳裡に大きな角速度をもって回転しており、表現される直前に次々と焦点を狂わせる。頬の筋肉を痙攣的に顫動させながら、奥茂はぎらぎら光る視線をただ畳のへりに注ぐばかりだった。

「咎めまい。事実、私は己の地位に甘んじている。しかも、それを正当化する論拠を私はもっていない。しかし、なお私は抗議する。現在時の時代の継起的状況の為しうることといえば、せいぜい圧殺による惜しくもない幕藩体制の維持くらいのものだ。必要性を要求する動機こそ重要であるのに関わらず、最後の結果であり最も取るに足りぬ問題が表面にのさばり出る。身分、貧富、格式、横並び等々——まるで、個の内部にある価値観を転倒することが社会化だといわんばかりだ。奥茂の尊重する調和とは畢竟、外壁にべたべたと装飾を貼り付けることに過ぎぬ。しかもその調和は決定論的なものであり、それを継続するならば、着ぶくれた人間と同様、身動きできなくなるにちがいないのだ。それゆえ、意匠は変革されねばならぬ。調和を動的に捉えて初めて、個性による存在価値の主張が実効性を発揮し、個人の価値観がそのまま社会化の段階においても適応されるのだ。とはいえ、この個性は人類を包括する宇宙から析出された具象であることを認めるとき、なるほどその限りにおいて、私は新しい世界観なくして時代精神を否定する権利はもつまい。しかし新しい理念は、全き否定の核である虚無の中にその萌芽があるのではなからうか。この否定はむしろ、否定の契機となった全人類を包括する宇宙をも否定せねばならぬ。とすれば、宇宙は価値ではなく、単なる契機に過ぎない。だから私は、奥茂の言う〈時代的な参加〉を拒絶するのだ。虚無こそ純粹無垢な時間空間であり、したがって、大いなる自由と創造の可能性の場であるはずだ。そしてまた虚無は、おそらく抽象的な世界への入口でもあろう。あるいはこの扉から、私は観念の世界へ迷い込んでしまうかもしれない。だが、みごとな統一性と指向性で貫かれている自然界を支配する抽象的な法則を考えると、私は逆に、抽象が秘めている現実感と実効性によって、観念的な世界を形成する勇氣をもらう。現実感が抽象化による事象の統一性によって裏付けられているのならば、抽象性そのものが現実感を醸し出す——そうだ」

吉景は自信ありげな表情で言葉をつないだ。

「今こそ私は、抽象から成る観念的な認識の仕方とその構成を恐れない。だいいち、普遍的な価値が観念の中へもちきたらされずに、他のどんな地平で意義を発揮するというのか。なぜなら、価値が必要とされるのは人間精神における観念の否定性においてであり、その否定性が新たな否定性へと昇華させられることにあるからだ。この価値が築く宇宙が、全人類を包括する宇宙と異なることは、前者が完結的な様態であるに反し、後者は欠如的な様態である点に帰せられる。具体性は常に有限の連鎖だ。しかし抽象は、具象として表徴する無限の可能性だということができる。したがって、美や真理として具象化される抽象こそ完結態であり、自由と創造に満ちた開放系として定常状態を保つ。すなわち、時間空間との端的な調和を純粹に事象しうるのであり、それゆえ、時空の中におけるあらゆる具体性との整合性を担保している。しかし、欠如態は時代的様式、すなわち秩序体系として過渡期なものであり、漸時閉鎖系へと移行するだろう。運動の限りにおいては開放系といえるが、時間と共に、むしろ私たちのそれに対する時代的参加という作用によって平衡状態へ閉じこめられる。したがって、意匠は本質的には閉鎖系と言わねばならぬ。ところで、精神活動とは究極的には抽象化であり、それが主体的合目的性を有しているとすれば、私たちは必然的に開放系を意旨するだろうし、完結的な存在の仕方を憧憬するだろう。それゆえ精神は、閉鎖系化および受動的合目的性と根本的に矛盾する。しかも見るがいい、秩序体系すなわち支配組織は、時代の形式として人間を兌換物にまで貶め、

かつ人間の統一性と有機性を解体し、細分化するではないか。したがって、物質、生命、そして社会、個性、と密接に連なる存在価値の重層化をたどる宇宙構造にあって、支配組織のみはこの重層化から遊離する。これもまた、決定的に人間と対立するもの以外の何ものであるか。それゆえ私は、支配組織と時代の意匠と矛盾対立することによって、本質的な人間へ復帰しなければならないのだ。一瞬の全き虚無から、本質と矛盾しない私自身の存在の仕方を、換言すれば、開放系を、生きなければならないのだ。しかし、もし私たちが時代精神の細部にわたって関わるならば、混乱錯綜するのは私たちであり、支配組織と同様に何事をも実現しえまい。それゆえ決断が必要なのだ。決り取った意匠の本質を模式化し、その観念世界において行動する諸念が必要なのだ。これはまた、閉塞しゆく時代に対する痛烈な断罪ともなる。……とはいえ、私は全としての人間に何ものをも期待していない。むしろ、すべての一人一人に対しても信頼をおくことはできぬ。したがって、私が、紫の夜陰を翔る一条の流星のように果敢無いものであるにしても、自己の存在価値を、歴史の内部にありながら、しかも時代的に参画しない明瞭な世界線を描くという仕方を実現しようとするとき、全との静的な調和を図る術を持たないのだ」

身を乗り出して熱っぽく話す吉景は、おそらく、前に坐っている奥茂や家老たちへ語り掛けたのではなかった。その表情に憂いが漂っていたとはいえ、現実問題に直面する切迫した緊張は稀薄であるように見受けられる。命題から命題へと、もはや対象の具体的な現状とは無関係に組み立てられた世界、それは現実でもなく、かといって夢でもないが、その中に自ら巻き込まれ委ねた者の苦しみと喜び、高揚があった。そして、共通の状況に生きる吉景と奥茂の間には、こうした世界へ分岐することによって、議論する前よりも遙かに越え難い差異が明らかに生じていた。しかも、おのおのの形成した場の外延は相変わらず、否、いっそう激しく抵触し、必然的に軋轢を起こすべき実質的な関連を保っているのである。

深い吐息を洩らして、吉景は脇息にもたれ掛かった。嘔吐し尽くした後の、悪臭にもかかわらず感じられる虚脱的な快感が、他の四人の胸裡にも巢食っていた。

ふと動いた吉景の視線と共に、四人も外の景色へ目を惹寄せた。既に夕暮れである。西門の方角から、蝸の澄明な鳴声が遠く聞こえてきた。

吉景は去った。四人は黙礼して主君を見送った。薄い闇の中、貧苦に打ちひしがれた老人のように項垂れている。

奥茂はげげばしい夕空を見ながら、まだ臓物にこもる熱気と、それとは反対に皮膚の表面を襲う冷めたさに感覚が輾転し、悪寒が全身の筋肉を震わせるように蛇行した。

もはや吉景の決意は揺らぎそうにもない。遠からず実行に移すだろう。それは全との関係を破断することであり、したがって個を自滅に導くことになる。しかもこの場合、個とは、吉景自身であると同時に、卯月家でもあり、その支配下である加納藩でもあるのだ。そして、これが現在の政治体制なのだ。〈家〉、藩、幕府——これらは個と矛盾することもある。しかし、時代の中心たる重みをもつ体制こそ、人間の個体を抽出し、支えるものではないか。それを否定するならば、個体を否定し、生きること自体をも否定せねばならぬ。言うならば、反逆とはたしかに生死の問題との対決である。これは自死を意志する者には起こりえない。すなわち、始源的に生への執着をもつ。それゆえ、死と接しつつも常に生き続けなければ敗北である。つまり反逆は、根本的な内部矛盾をかかえているのだ。

こう考えるとき、全と対立しようとする際、個は堅固な体制の前に立ちすくみ、単にその権力ばかりでなく、冒し難い尊厳に打たれて自ら跪いてしまうのではないか。兄が全と個との、こうした関係を充分に認識しているとは思われぬ。私なら、平手打ちを食わされたように身を退ける。

——書見台の前に端座して、奥茂はじっと考え込んでいた。

その尊厳を敢えて冒すならば、宇宙に対する最大の冒瀆であると言わねばならぬ。社会において罪惡と言わねばならぬ。禁制を破るからではない。全の骨組みである法度（法律）を無視することによって、全に対立するからだ。全

の内部で、人為的に癌細胞を発生させるさせるからだ。全の中における〈無関係〉という次元の自由を乱して、人々の営為を否定するからだ。それゆえ吉景は、事実上いかなる敵対関係にもない個々の人間に対してすら罪を働く。とすれば、その処罰は時代の権力、即ち刑法によって執行されねばならぬ。

公儀に訴えて吉景を糾弾すべきか。あるいは、闇に葬るべきか……なぜなら、幕府が全の体制を保障しているのであり、その体制を残したまま幕府が自ら禁を破らぬかぎり、幕府は吉景という奥茂の直接的な君主に優越するからだ。というのも、全はより包括的な全に優越されるべきであるからだ。

しかし、公おおやけにした場合、卯月家の現在の地位は危うくなる。ところで卯月家は、吉景を個的単位と見做みなす場合、彼を包含する全である。したがって、公にすることは差し控えねばならない。というのは、残る道があるのだから。それは、吉景を主君の座から引き摺り降ろすことである。このままでは藩政が乱れてしまう。術はいくらでも考えられる。隠居願、暗殺、乱心、不治の病等々。沈黙を守って忠義面を引っ下げているが、最終的には家老たちも秘かにその手段を願っているに違いないのだ。

いつしか奥茂は、燭台を食い入るように見詰めていた。風もないのに炎は時折不規則に揺れ、薄い紙の上を火影が這い回る。そのたびごとに部屋全体が陰影をゆらめかせ、空間自体すら動くようだ。外界から仕切られ必要なだけの通風口しかない限定された空間の中で、油は静かに、安全に燃え続ける。しかし、それもまた、防護の紙を燃やそうとするのか、まともに吹きつける風があつても、なお……。

奥茂は無性に燈台あかりだいを蹴倒したくなった。

突然、激しく頭かぶりを振って、奥茂は書見台に突っふした。

——違う、違う、貴方が悪いのだ、兄上。貴方の構想を聴いたとき、私たちが受けたのは苦しみではなかった、どうしようもない悲しみだった。一瞬、できることなら貴方の意図を援助したいとも思った。だが、いったいどんな方策があるというのです、この時代に？ 兄上、私たちはもつと近しいはずだ、もつと信頼し合えるはずだ。貴方はご存知か、貴方が蹴るように座を立った後、私たちが言葉もなく項垂れていたことを。枯れかかった額に手を当てて、白髪の浅居は泣いていました。そして、私たちの間に洩れた唯一の言葉を、彼は震える声で言ったのです、「殿は私たちを愛してくださいませんか」と。愛し合うことが、理解し合い、許し合うことと何の摩擦もなく一致するならば、そうなれば、私たちは大らかに何気なく生活することができようものを……。

兄上、貴方はご自分の生き方に関してあまりにも潔癖で意識的に過ぎるのではありませんか？ 義姉あね上との件についても同様です。嫡子を儲けようとなさらぬ理由を私は知らないが、しかし、家を考慮するとき、軽卒な行動は許されないはずだ。連綿と継続してきた〈家〉は、その血脈自体、独立した尊い生き物です。そう、たしかに〈家〉とは、血脈でつながった共同生命体なのだ、これからも生き続けるものであり、私自身でもあるのだ。貴方という枝から芽を出そうと主張しているのに、貴方はその芽すら出させようとしない。それではあまりに残酷だ、僭越だ。しかも、義姉あね上の立場を考えると私は辛い。彼女も彼女の背負っている〈家〉がある。〈家〉、という観点に立てば、彼女の〈家〉に対する責任は、卯月家の嗣子を生むことよつてのみ果されるものではありませんか。貴方の愛する女性にょしょうは深く傷ついている。それでは貴方も醜く傷ついているはずだ。

静かな奥深い森の中で罵声を張り上げて平穏を破り、いたずらに動植物を脅かす。それで吉景の意思が、当初の純粹さを失わず、理想的に遂行されるのか。

唇を噛み締めた奥茂の耳に、秋の虫の声が急に種類を増して聞こえてきた。

「私にすべてを任せていただきたい」

次の日、吉景を待つ間、三人の家老に向かって奥茂はいささかの迷いもなさげに、静かに言った。濃度の高い一夜を過ごしたのであろう、奥茂の面貌は土色にげっそりと瘦こけていた。しかし、彼の眼は、やや充血してはいるが漆の

艶のように重厚な光を湛えている。その力強い視線と落ち着いた物言いが、三人の家老に訴え掛けぬはずはなかった。しばらくの沈黙の後、彼らは同意した。

「どうだ」と、高座に坐るなり、吉景は四人を見回して怒鳴るように問うた。嚴重な人払いで物音一つしない天守の五階、吉景の大声はいかにも場違いな感じだった。

ようやく頭を上げると、奥茂は一躍^{ひとじ}に進み出た。

「はい、いちおう築城の方針を実行することに同意いたしました」

この言葉を聞くと、吉景の表情はかえって急に強張^{こわば}った。後ろに控える家老たちには、瞬間、暗い驚きが射し込んだ。闇の中で互いの位置を探り合うような、息を殺した時間が経過した。——全神経を集中させる。何かが動く。何かが触れた。そんな気もする。自ら動くことは危険である。幾十年も太陽の直射光線を受けていない天守の分厚い床板が、冷めたく体を硬直させるようだ。丁鉋^{ちような}で削られただけの林立する柱の表面が荒々しく波立って、室内の雰囲気をいっそう不安げに戦かせている。その日も快晴だった。狭間からは、ただ一杯の明るさだけが臨まれる。

奥茂と吉景との間には、決意した者と、予期しない事態に直面した者との対照が明瞭に現われていた。

意想外、そして疑念——予想していたならば恐らく単純に喜ぶこともできたであろうが、今吉景は、そんな猜疑を心の中に宿して、拒絶されたときとはまったく別様の、複雑な気持ちを抱かずにはいられなかった。が、弟の沈着冷静な態度にかまけてしまったのか、覗き込んでいた視線をそらし、ぎこちなく坐り直した。

「ご異存はありますまい」

「むろんのことだ」

短く取り交わされた会話も、その座の緊張を和らげることはなかった。しかし、その質はいくぶん変わったようだ。奥茂が方針を述べはじめた。

「幕府はかつて、城築の地選に関してはほとんど第一候補地を却下してまいりました。この傾向は現在も変わっておりません。これは、大規模な土木工事についても同じことが言えます。それで、私の考えなのですが、こんど幕府に申請する事業を、第一に、古浦川と加納城の外濠と房矢川とを結ぶ運河の建設、次に築城、最後に古浦川の灌漑工事、という順序として、いずれかの許可を得るようにしたらいかがでしょう。むろん、新しく城を建設する場合としては、この加納城を取り壊して、単なる政務のための家敷風の建物を建築することを条件とします。無鉄砲に行動を起こすより、幕府の許可を得るほうが得策ではありますまいか」

吉景は黙っていた。

「そして幕府に対しては、私たちが運河の建設工事を最も強く希望しているように見せかけるのです。この私たちの姿勢には、幕府が首肯^{しゅこん}するに足る十分な理由がありましょう。加納の地はこれまでしばしば古浦川の氾濫に遭い、甚大な損害を強いられています。兄上の治政下では幸いに二度の洪水でとどまっていますが、それでも当時の混乱は激しいものでした。とすれば、まずこの氾濫に備えた灌漑工事として、運河を建設するのは当然ではありませんか。しかもそのうえ、本城と古浦、房矢の両河川とを結ぶことは、卯月領下の中心部を水路によって貫くことになり、戦略的、政治的、交通および経済的な面に多大の利益をもたらすはずです。当藩はどちらかといえば財政の豊かなほうでしょうが、にもかかわらず、洪水による損失を軽減し、さらに多くの効果を上げれば、よりいっそう経済の繁栄は促進されます。こうした、あまりにも正当な事業を幕府が歓迎する可能性はありません。また、古浦川の灌漑工事も、農業の過度の振興という意味から、幕府にとって芳しくない印象を与えるでしょう。しかし一方、城築に関して、幕藩体制そのもののへの謀反の意思がないことを理解させるならば、単に財源の消耗以外のいかなる結果をも招来しないことは明白です。しかも、加納城取り壊しというよい工事まで行うのですから、過去の幕府の傾向とこれらの条件とを考慮すれば、築城の許可が下りるのもそれほど困難ではないと思われます。もっとも、前後の二つの工事の目的と築城のそれが、あまりにもかけ離れているという難点は覆うべくもありませんが、しかしそれも、この城の老朽

化と兄上の意思とを適当に組み合わせ潤色して伝えれば、過去の卯月藩の公儀に対する忠誠を顧みても、十分な可能性を残しています。ですから、まずこの三つの事業を一度に申請してみなければなりません。許可が下りなかった場合は、また別の方途を考えても遅くはありませんまい。最後の手段としては、兄上ご自身に関しては既に決着がついていらつしやるでしょうし」

最後の言わずもがなの言葉にわれ知らず後悔し、一瞬吉景の表情をうかがったが、それはべつとして、奥茂の方針は築城と卯月家存続とのある程度の可能性を巧みに組み合わせた妥協案のように思われ、聞き手たちにはほっと和らいだ気分が感じられた。

一方、吉景も警戒心を露わにした眼差を変えなかったとはいえ、奥茂の提案に耳を傾けているかの表情を示している。むしろ、あまりにも強い関心が時間と空間との稠密な凝固を醸し出し、暗く冷めたい床の上で付着したように身動きもならなかった位置関係、四人と対座する主君、やや前に出た奥茂、そして横一列に並んだ三人の家老という配置が、ようやく僅かに流動性を帯びはじめた。

奥茂は畳み込んだ。

「しかし、これも非常な危険を伴うということだけは、はっきりと認めてください。あるいは、すべての工事自体が穏当でないとでも解釈されて、何らかの咎めを受けぬともかぎりません。だが、それはまず考えられないことでしよう。大事業の遂行には、それ相応の必然性があるものですから。おそらく幕府も、申請の内容と背景を厳しく質す（た）でしょう。審理が有利に展開し、いずれかの許可という段取りになったとしても、幕府内における当藩への疑惑は長い間、完全には払い去れますまい。また、もし単に却下されるだけで済むにしても、一度起こされた審議による摩擦は、容易に元の状態へ戻るとも思われません。とすれば、いずれにしても我が藩と幕府との間に溝が掘られることは必定であり、その点こそ私の最も恐れるところなのですが、この間隙について、内部からも外部からも卯月家失脚を企てる謀略がまったくありえないとも言えなくなります。由緒ある家系の人々が領主の地位をひしめくように窺っている現在、譜代の小領主である卯月家のこと、よほどの注意を払わねばなりません」

「そんなことは承知のうえだ。もう言うな、妥協案など胸糞が悪くなる」

苛々しながら、吉景は急に弟の話を遮った。

「いえ、単なる妥協案ではありません」

「では何だというのか。幕府に怯え、家系を慮（おも）り、その枠だけは後生大事に保持しておく。私の目的がそれらへの反逆であるならば、お前の方針が妥協でなくて他の何ものでありうるか。私は全人类的宇宙から演繹された特殊性だ。これが社会との矛盾性および時代精神への反逆性を有するとき、確固とした個性となる。それゆえ、私自身の存在価値をもつ。そして、このときこそ私は、私を抽出した歴史から飛翔する権利を獲得する。なぜなら、価値こそ唯一の独立した存在の仕方ではないか。否、存在を存在させる力ではないか。この場にこそ、私は私を受け容れるべき世界の器を創り出す。すなわち、帰納化を行う。それゆえ、私は宇宙の中心となり、あらゆる事象は私から等距離に運動する。具体的に捉えられるもの、お前たち、幕府、〈家〉——それらは具体性であるにも関わらず、明確な性質のない茫漠とした、私とその背後に見る抽象の媒体に過ぎぬ。そして背後にあるのは、畢竟私自身の投影像なのだ。むろん、これはすべての人間の可能性でもある。だが、そこでお前たちは躊躇するだろう。等しい価値を有する者同士の間で相拮抗する調和、と、殊勝がましく項垂（うな）れて何もしないのだ」

座所に坐するときの癖になっている右手に持った鉄扇を固く握り締めてはいるものの、吉景の表情にはどこことなく漠然とした迷いが感じられ、語気にも集中度がない。そして語り終えると彼は、珍しく輪郭のぼやけた視線を上げて、扇子を開いたり閉じたりしながら遠い狭間の向うの青さに見入りはじめた。

奥茂がいよいよしげに横を向いて、言葉を継いだ。

「個性、意義、価値、果ては宇宙の中心——あたかも兄上が一人で存在しうるような考え方は、あまりにも傲慢に

過ぎましょう。私たちは動的な歴史の直中^{ただなか}にあつて、その運動と社会構造の僅かな誤差の範囲を動き、どちらの方向へ進むかもわからない未来のために生きるのみではありませんまいか。目的は歴史そのものによって自ずから決定され、個の価値を歴史の創造と評価に委ね、私たちは単なる踏台として、手段として、生を蕩尽^{とうじん}する以外に術はないはずです。もつとも、兄上にこんなことを申し上げても無駄でしょうが。しかし私は、兄上のような認識の仕方もなく、黙々と生きることに、おそらくは私の生命の浪費への忍従に、何故というはつきりした問いもなく徹底しようと考えております。こんどの城築の件に関しても、私はそうした姿勢を崩さないつもりです。現存する私たちだけの問題として片付けられるべきはありません。兄上は、私が家系を慮りすぎると非難された。しかし、兄上は卯月家の系図を見て何もお感じにはならないのか。幾百人もの名前がそれぞれの世代を担い、分岐し、大樹のように成長しつつ私たちの生命へ近付いてくる——そんな系図に、私は土中に埋もれた故人としてではなく、もつと骨を刺戟するような、それらの人々の姿や営み^{ほうふつ}が髣髴^{ほうふつ}するような、深い親近感を覚えずにはいられないのですけれども……」

「郷愁だ、偏狭な家系崇拜だ。歴史だ、卯月家だ、徳川家だ、皇家だ、藩だ日本だ。時間の進行と共にすべては郷愁の源泉となる。敵対する対象の前に、徒党を組む集団は相転移を起こす。そんなものに詠嘆を洩らす暇があるなら、行動することに情熱を傾けるがいい。いまさら愚痴は言うまい。しかし、常に暗い片隅でうずくまる生への呪詛を殺戮すると同時に自滅してしまうのであろう、私という人間を結果した祖先の徒輩^{やから}どもが、彼らに与えられる無視からする侮蔑を堪えるのは当然ではないか。極言するならば、卯月家の系譜に汚辱をもたらすのも、その先端に立つ私の自由ではないか。少なくとも私は、卯月家の存続という過去との連続性を拒絶する。なぜなら、連続性は私の帰納的行動を不可能にするからだ」

苦笑とも憤りともつかぬ痙攣^{けいれん}が、ふと吉景の口元をかすめた。

いつしか再び剣呑^{けんおん}な空気が流れた。主君とその弟との対話に、三人の家老は倦^うみ果てたような、それでいて妙に落ち着かない、ちぐはぐな気持ちを抱きはじめていた。しかし、奥茂はなおも食い下がった。

「郷愁や家系崇拜かもしれません。けれども、私には卯月家を、いえ、仮に切れぎれの血脈であっても、貶めることはできない。単なる形式的なものとしてではなく、生きていた、生活していた、ただそれだけで、語り掛けてくる内容に満ちた息吹を感じます。血脈を絶やすことは、少なくとも私には、父母を殺害することと同様、大きな罪であると思われるのです。しかも、単に卯月家のみならず家臣の将来に関わる問題であると考えれば、私たちも軽卒な行動はよくよく慎しむなければなりません。支配者の地位にある者も、その支配の対象となる系に対してのみ権力を及ぼすべきでしょう。支配者は、ともすれば従者の奉公を一方的に要求しがちです。なるほど兄上は、私たち家臣や領民の生死を思うままに左右することができましょう。だがそれは、人間の存在の仕方を支配することとは違います。権力は、直接には、主体的な生き方の契機を与えないはずですから。事実、私もこうして兄上と対立している。即ち、兄上の支配の系は、単に従者の生殺与奪権に限定されています。また、主従関係は幾重にも層を成して形成されており、したがって、支配者と被支配者の地位は相対的ではありません。こう考えれば、現在の社会構造において、権力の有用性はむろんのこととはいえ、一方、その性格の曖昧さをも強く感じるのです。しかも、領主の座が絶対的でないことから、厳密に言うならば、領主の行動によってお家取り潰しや減封等の結果を招き、その家臣を人間的、社会的、経済的に苦しめる権限はありません。なぜなら、支配者がその地位を剥奪された瞬間、以前の従者はその支配下を脱するからです。もちろん、これら従者の投げ込まれた状態は結果的にはより上位の権力者の意思によると言えましょうが、逆にその結果によって、上位の権力から見て、断罪の対象となった主従は個であることが証明されます。というのは、ある特定の観点の前に分離させられない集合体こそ、個と見なされるからです。即ち、公儀と関わり合う場合、卯月藩は一体化されるのです。したがって、藩の代表者である兄上は、その集合体の持つ、より深い一般的意味に対して責任を負わねばなりません」

聞いているのか、吉景は？

——興味のなさそうな表情で相変わらず外を眺めている兄に、奥茂は突然切りつけたいような衝動を覚えた。無駄なのか、それとも私の考えが間違っているのか？ 何も偽ってはいない、決して欺こうとしているのではない。空しさと暗鬱と怒りで押し潰されそうな奥茂を心にもかけずに、吉景は自分の考えを反芻していた。

時代の閉鎖系化は、時代精神によって日常生活の中に具体化された意匠が、歴史の流れと共に移行する時代精神の変質にもかかわらず残存することによって、徐々に形式化されるところに原因が潜んでいる。そして、時代の初期においては新鮮であった意匠が形式化して、時代精神と極限までずれを生じ、歪みが顕著に現われたとき爆発的に新しい意匠へと変革される。ところで、私が奥茂の方針を採用することは、彼の意図である反逆という内容を骨抜きにする。なぜなら、正面突破ではなく、間道を抜くようにするからだ。つまり、手段を講じて築城すればいいというのはなく、権力に正対して城郭を構築しなければ意味がないのだ。

まとまりそうでなかなかはっきりしない考えに苛々している吉景の耳を、また奥茂の声がざわつかせた。

「明瞭な矛盾関係にある二つの行動は、矛盾をもたらずもの、即ちおのおの本質を互いに犠牲に供さねば両立いたしませぬ。これは当然、矛盾関係を取り除くことですが、しかし宿命です。具体的な実生活において、矛盾関係は成り立たないものですから。人格の尊厳を謳歌するにしろ、けつきよくは勝者と敗者、強者と弱者、支配者と被支配者、あるいは平坦な対等関係に還元されます。私たちは、私の提案を実行することによって卯月藩の存続を危険に曝すこととなります。兄上も、反逆の意図が実現されるか否かを賭けていただきたい」

奥茂は厳しく迫った。

吉景は白刃を喉元に突きつけられたようだった。

最初からわかっていたことではないか。実現のための妥協、社会化における内的価値秩序の転倒による適応手段は、畢竟、屈辱を強いるのだ。

奥茂が上目遣いに吉景を睨んでいる。挑戦的で、執拗な視線だ。

不意に奥茂の背後に巨大な人影が立ち昇り、大刀を振りかざした。吉景は反射的に立て膝になって脇息を倒し、人影に向かって鉄扇を叩きつけた。鮮血が飛び散り、鉄扇が跳ね返って床にころがった。奥茂が両手で割れた額をかばってうずくまっていた。驚いた家老たちは、奥茂の傍へ寄ろうとした。吉景が彼らを威嚇し、奥茂も身振りで制止した。

その場に立ちすくんだまま吉景は息を弾ませ、うつぶせた奥茂の後頭部と背中を見下ろしている。冷たい蒸し風呂のような無言が長く続いた。

吉景の肩から、しだいに力が摺り落ちるようだった。握り締めた拳を額に押し当てながら泣いているらしい弟の傍に行つて、大儀そうに血糊の付いた鉄扇を拾い上げ、虚ろな眼差しで眺めるともなく視線を狭間の外に捨てた。のどかである。やや沈みがちの色調を帯びた明るい城内の庭園。陽光を白く反射する曲輪の壁。松の緑や銀杏の黄葉。そして間近には、静かな広い濠の底から突き出して五層六階の大手守を支える石垣が、荒々しい肌を優雅にくねらせて迫りくる。警備に当たる武士が、平穏な表情で行き交う姿もちらほらと見える。

骨抜きか——吉景は喉の奥で自嘲のつぶやきを小さく漏らした。何を夢見ていたのだ。実践とは正に社会化ではないか。実践は人間を出口のない牢獄に投げ込んで化粧臭^{ふんぷん}芬々たる女郎蜘蛛の巣に絡め取り、金銀銅の色彩を放射し、安寧^{あんねい}という無害の陶酔を与える。人は抵抗力を失い、受動的な合目的性に必要な養分すら女郎蜘蛛に吸い取られ、干乾びて元の姿も判然としない、単なる泥のような混合物と化してしまう。個性の実践は畢竟、抽象世界における空想に過ぎないのか。なぜなら、実践的関連こそ社会だからだ。そして社会は、非社会的な行動をも制裁によって無矛盾化するからだ。行き着く所のない、漠々とした冷たい皮肉たつぷりの包容力。有限でありながら、しかもなお、無限に奥深い吝嗇^{りんしやく}な体系。それでは私にはただ、本質的な要素、反逆、の放棄を代償とした形式のみが残されるのか。時代の意匠に結果的に同調する、絢爛と輝く城郭を造るのみなのか。

吉景は、濠を満たす深い緑色に風いだ水の中へ、早くも凝固した血液で赤黒くなった鉄扇を力いっぱい投げ捨てた。時代精神は主体的意識をもたない。意匠は、常に後行する、歴史の残り糟にも似た遺産に過ぎぬ。

穏やかな空気を震わせた時ならぬ水音に、警備の武士が二、三人駆け寄ってきた。まだ水面に波紋が動いている。僅かに覗かれる主君の姿に気付くと、彼らは会釈をして通常警備に戻った。

だが、個人には意識がある、目的への主体性がある。現実的には、因果関係と価値秩序とを逆転させること、そして、観念世界において必然性を試行すること、もはやそれ以外に道はない。

床を踏み締めて、吉景は振り返った。浅居が奥茂の傷口に懷紙を当てがっていた。

「傷はどうか」と、自分の座に戻りながら吉景が尋ねた。

「幸い、たいして深くありませんし、出血もなんとか止まったようです」

普段はその素振りさえ見せない刺のある非難めいた口調で、浅居が答えた。吉景は気まずそうに表情を絞って、「すまぬ」と言った。

目を閉じ、唇を石のように結んだ奥茂の蒼白な顔は、怒りを抑えるために、微かに引き攣っている。寄せた顎、頻繁に上下する喉仏、ともすれば乱れようとする呼吸を無理に整える呼吸音。奥茂は両手を膝の上に突っ張ってしばらく微動だになかったが、やがて目蓋を開き、吉景に向かってゆっくりとうなずいた。

吉景が間髪を入れず言った、「よからう。奥茂の方針に従おう」

四人の家老は一瞬、身を乗り出した。

「私の実践内容は、あくまでも抽象世界の行動だ。やってみる」

幻聴か——解決を期待する余裕もなく、ただ成行きを見守るだけだった三人の聞き手には、唐突に思われる吉景の妥協に、なかなか現実感を覚えることができなかった。しかし、冗談を言うはずもない。主君の言葉を反芻していた彼らの動きには、徐々に喜色が滲み出してきた。軽い冗談を口の端に上^{のぼ}せたいような、坐り直してみたいような、そんなくつろいだ雰囲気がようやく三人の間に醸された。けれども、それは籬^{たふ}の緩んだ桶のような理解に過ぎないことを、彼らは間もなく知らねばならなかった。

いったん、ほつと安堵の息を洩^はらしたはずの奥茂は既に前よりも厳しく緊張し、吉景も「やってみる」と言うなり、苦虫を噛み潰した表情でどこを見詰めるともなく視線を据えていたのである。

ふと、崖線のような状況を鈍く感受して、家老たちは再び口元を引き締めた。吉景の態度は当然だが、奥茂を理解しかねたのである。

にわかに、新たな戸惑いの直中へ放置された彼らは、しかし、すぐに気を取り直した。吉景が同意を翻したらどうなるかと心配したのである。急にあわてだし、これまで終始沈黙していた二人が言葉を発した。

「殿、ありがとうございます。私どもも、何か殿のご希望にそのような方法はないものかという頭を痛めました。が、これといった計画も思い浮かばず、殿にお力添えすることのできなかった点、まことに残念です。無能を恥じるばかりでございます。しかし、なにはともあれ、奥茂殿の堅実な方針をお取り上げくださいましたこと、心より感謝申し上げます」

浅居がうやうやしくひれふして礼を述べた。そして松山がもはや囁^{さや}れた声で、吉景に言った。

「ただ、築城の許可が下りることと、殿のご意思が実現されることを祈るばかりでございます。このうえ……」

「もうよい」と吉景は遮った、「奥茂、先を話せ」

奥茂が背筋を真っ直ぐに伸ばして、話しはじめた。

「私が江戸^{のぼ}へ上り、工事の申請をいたします。兄上は先日ご帰国なさったばかりで疲れていらっしやるでしょうし、また兄上が直接交渉に携われば、どんな不測の事態を招かないともかぎりません。おそらく幕府は、不必要に審議を引き延ばし、腹の底を探り氣勢を殺^そごうとするに違いありません。よほど忍耐強く構える覚悟が必要だと思えます。

また、交渉中、万が一にも城築の計画が公儀に通じては元も子もなくなりますから、はつきりとした許可を得るまで着工してはならないことはむろん、あらゆる下準備は慎重に、極秘裏に運んでいただきたい」

吉景は承諾した。

「私の留守の間、兄上は藩政に興味を失っていらつしやるうえに、築城の期待感やら具体策やらでお忙しいでしょうから、浅居、松山両ご家老に政務を執っていただきます。浅居殿は兄上の助言者となってください」

誰も異議を挟まなかった。事務的な処置が決定すると、吉景は、一刻も早くその座をはずしたさげな、投げ槍なようすを示しはじめた。よろしく頼む、と言って立ち去りかけると、奥茂が強く引き止めた。

「いかがでしょう、ちょうどいい機会ですから、義姉上を江戸城へお送りしたいと存じますが」

そういえば、冴乃は吉景が強引に連れ戻してきたのであった。あまりに長く江戸を留守にすることは、この際特に、卯月藩に対する幕府の疑惑を深める恐れがある。吉景は進んで同意した。

二

吉景はためらいながら枕元の灯を吹き消した。侍女は置かないので、警護の武士が隣室にいるのだが、物音一つ立っていない。静まりかえった闇が訪れた。

雲が無造作に、黒く、白く、あるいは灰色に散らばり蔽いかぶさった永文二年十二月の或る朝、二十数名の伴を連れて、奥茂と冴乃は慌ただしく江戸へ向かったのである。ようやく奥茂の額から包帯が取れたが、傷跡はくつきりと残っていた。

吉景は洞ろな気持ちで、僅かな隙間をも恐れるように、ことさらきつく瞼を閉じた。ぐったりと疲弊した動悸が、病的に激しく、しかし、いまにも途切れそうに弱々しく、耳の奥で疼いている。彼自身の肉体の重みがことごとく背中へのしかかっていた。頭脳は鈍く痺れているのに、神経だけがぎらぎらと金属的に光っている。やがて、頭が枕もろとも深い水の底へ落ち込んでいくような失血感を覚えて、吉景は寝返りを打った。そして、掛け蒲団を掻き寄せ、思い切り体を丸めた。

城築の構想と、その実行を決意してから、満足すべき形ではないにしても、奥茂の深慮によって具体的な着手まで漕ぎ着けた。と同時に、目的と手段との間に張り詰められていた吉景の意思は、片方が具体化された瞬間、突然もう一方との均衡を失い、弛緩して稀薄化されたのであろう、使い果たされた精力の空洞の中へいっぺんに充満した疲労感が、吉景の深奥に滲み込んでいったのである。半面、それは生きることにより費やされる時間の報復と言えるかもしれない。生に対して真摯であればあるほど、人間は時間の不可逆性へ不断に対決しなければならぬ。そして対決に注がれた精力は、時間の裏側へ遠く流れ去ってしまう。このとき時間は、それ自体のためにではなく、人間の生のために蚕食され、あるいは汚され、あるいは密度を変えられて、それら数々の屈辱に対する報復として、呑み込んだ情熱を逆方向の質をもつ疲労感に変化させつつ、人間の内部へ、精力の出口へ送り返すのだ。あとは時間の一人舞台である。疲労感^{おのず}は自ら徒労感や空虚感に変質し、人間を絶望の淵へ追い立てる。

いつの間にか、吉景は底知れぬ心の翳りに喘いでいた。絶叫したいような、頭を砂の中に埋めてしまいたいような、腸^{はつわた}を抉り出したいような、肺臓から喉の皮膚にかけてむず痒い、吐き気さえ伴う、あらゆる逃亡の手段を奪い尽くした暗鬱。深く息を吸おうとしても浅い呼吸になり、かえって肉体的な苦痛を増す。

幾度も寝返り荒く呼吸しながら、吉景は奥茂が出掛けに念を押した言葉を思い出していた。

「決して短気を起こさぬように。許可が下りるまでは絶対に着工してはなりません」

深くかぶった塗ぬり一文字笠で額の傷を隠した奥茂は、とても裏うられていた。髭を剃り、一糸の乱れもなく髪を結い、全身糊を塗りつけたように整ったその姿が、それだけ衰弱を痛々しく印象づけるのだった。半月余りの旅程である、病に倒れるようなことがなければいいが——不安げに緊張した義姉あねをいたわりつつ、常に引き立てる節度を失わなかった奥茂の健康を気遣い、その極度の裏うられの理由を付度そんたくすることもなく、好ましい信頼を寄せた吉景だった。

吉景は辛抱強く目をつぶり続けていた。鋭い耳鳴りが単調に感覚を突き刺し、えたいの知れぬ黄色い染みが網膜の上でわずらわしく踊り狂う。しかしその合間を縫って朦朧と波打つ思惟を、彼は一心に捉えようとしていた。

反逆の意図がなし崩しにされたことは別として、これからの城築に関して吉景に一点の翳りを落とすのは、加納城の改造という条件だった。なるほど、彼は加納城を憎悪し、拒絶さえしている。だが、それは、加納城の完結性を認め、したがって既に余人の介入を許さない尊厳に打たれるからであつた。よりによって彼がここに生まれ、育ち、いやというほどその美を子供心に思い知らされてきたのだ。幼少のころから、彼は領主としての作法よりも、武道や学問よりも何よりも、あまりにも厳格に過ぎる城の美しさをおそろおそろ小さな肩に背負っていた。こうした苦々しい思い出を背景に、引力と斥力との間に弄ばれ、城内の、ひいては人生の何処いすこにもいたたまれないような圧迫を覚えるからであつた。

加納城はもはや、機能面においては時代から取り残され、無用となつてゐる。たとい、政庁と戦略の二面的な用途を未来への展望の下に備えた建築物ではあつても、単に時代が変遷するという事実だけで、建設された直後に合目的にはその資格を失うのである。にも関わらず、ある程度の期間それが機能面において耐えるのは、意匠が持続するからにほかならない。しかし、城郭建築について考えるならば、その機能も政庁としての役割のみに限られる。というのは、戦闘は時代の内的な要求であり、その様式は意匠を突き崩すために速やかに変容するからだ。同一の戦闘様式によつて意匠を本質的に変革することは不可能である。ところで、それゆえに加納城はその美を証左したのではなかつたか。美とは、結果であり、同時に始まりである。したがって、美は、美という贖あがないを求めぬ行為によつてのみ、その実現の可能性が扉を開く。美を目的とする行為は、耽美的、利己的なものに墮落せねばならぬ。機能美は、機能面に対する実利性の追求が生んだ結果に過ぎないのだ。そして、美は抽象における完結態を超えた、具象と抽象の二元的世界の彼岸に存在する明らかな完結的実在性そのもののものだ。したがって、加納城が、機能的な要素を振り落とされた現在も、なおその存在価値を主張しているとすれば、内奥に美という核心をもつ美的具体性でなくして何ものであるか。

吉景の脳内の圧力が高まり、全身が熱っぽくなつてきた。またも寝返りを打って、片脚を蒲団の外に投げ出した。この美に挑戦するのだ。挑戦に徹底し、美を目的としない情熱の不変の指向性と統一性との結果を、新しい城郭として結晶させるのだ。しかも、彼には加納城に手を下すことは、考えられぬ冒瀆と思われるのである。この破壊の次に来るものは、敗北感と恐怖心だけに違いない。加納城の美は、その具体的形相を失つた後もなお、彼の脳裡に鮮烈な烙印を残すだろう。破壊されてはならぬ永劫の存在価値が形相を剥奪されることによつて、もはや実体でなくなるにもかかわらず、なお現実性を引きとどめて、怨嗟と寛容とをもつて亡霊のように彼を苦しめるに違いないのだ。彼は、それゆえ、単に彼の個性の帰納による彼の場の形成を目的とすることによつてのみ、この美へ挑戦しなければならぬ。

加納城を残せ——不意に思い浮かんた。

吉景は床の上に跳ね上がった。脳から顔面の内部に、血管が破れそうな鬱血を覚えた。ずしりと響く命令であつた。目を開けた彼は、瞬間、眩暈げんうんするほどの暗黒に愕然となつた。吉景の心象時空そのままである。陰鬱な、冷たい夜の闇である。吉景はできる限り臉を広げた。何も見えない。後頭部のあたりが腐るような不気味さに彼は怯えた。いつまで経つても何も見えてはこない。視覚の欠如、それだけで世界は一変する。

しばらくすると、再び彼の網膜全面に、濁つた黄色い染みが妖しく蠢きはじめた。ゆっくりと柔らかく、煽情的に、

それらは近くあるいは遠く、吉景を嘲笑うようだ。とこうするうちにも、それらは徐々に秩序をなし、三巴状に渦巻き、変色して一つの明瞭な映像を結んだ。白い懷紙、その中央に滲むどす黒い血液。

吉景ははっとした。彼があのと見た巨大な人影は、奥茂という具体性が契機となつて背後に投げ掛ける茫漠とした闇だったのか。否、むしろその闇こそ明らかに奥茂を具象として抽出しているのだ。吉景は震撼して目を覆った。幻影は変わらない、白と血、目を開けた。幻影は変わらず、ますます鮮かに闇の中である。この暗黒が永久に定着したのではなからうかという、真実感を伴った疑惑が、吉景の心を翻弄した。せめて今、青空をも溶かすような太陽が夜を破ってくれたら。光の強度は闇の深さに無関係であり、闇は光を受け容れつつもその性質を稀薄化することはない。全き乖離関係にある二個の元である。そして、この国、この時代、この藩主、この私。すべては個と全との矛盾関係に端を発している。金縛り感の意識が、吉景の全身を鋭く締め付けた。

吉景は手探りで燭灯に火を点けた。薄明るく照らし出された部屋の内部は、以前とまったく変りはなかった。軽い失望を抱き、同時に軽く安堵して、睡魔が恐怖を浸し切るまで待つことにした。

可能性はあるのだ。加納城取り壊しの条件を、築城完成後に破棄すること。それは道義的な背信行為であるとともに、一国一城令への反逆でもある。

眼を剥き出しながら、彼は胸震いを禁じえなかった。このとき、額の傷痕を露わにした奥茂の厳しい表情が、吉景の脳裡に浮かび上がった。吉景はそれを直ちに掻き消したが、手ずから切り裂いた若い獵師の前頭葉から噴き出した血潮が眼前に飛び散った。

約三月前、厳しい残暑もやつと終わった永文二年九月下旬のことだった。綾蘭笠をかぶり、行藤と物射沓に身を固めた狩装束の吉景が、加納藩のお留場、間地山の南斜面から登る山路の入口で馬から降りた。日々の閉塞感を解放すべく小鷹狩りに出掛けたのである。

鳥見役と数人の武士が今日の獲物のようすを探るため、まっ先に走りだした。

「お歩きになるのですか」と、同じ狩装束をまとった老臣・浅居が尋ねた。吉景は「体を動かしたいのだ」と答えて山道を登りだした。

小径跡が残つてはいるが、年に一、二度しか通らないため道筋もわからぬほどに草や木の枝が食み出している。それらを小刀で薙ぎ払い踏みしだきながら進む吉景の後に、弓や空穂をもて余しぎみの浅居と、鷹匠、犬牽、少し離れて五、六人の武士が続いていた。

時折り、小動物が葉ずれの音をたてて逃げたり、鳥がけたたましく飛び立ったりする。白い雲が幾条か、真青な空にくっきりと浮かんている。

登るにつれて風の強さが加わる。吉景と浅居の頭の上で、綾蘭笠が吹き飛ばされそうだ。薄の穂が一面になびいては、また寄せ返して穂をもたげる。木々に残っていた葉がちぎれ飛び、木末も折れるように鳴り響く。

半時ほど登って皆が汗を流しはじめたころ、急に傾斜がゆるくなり、仮の拠点となる中腹に辿り着いた。灌木と、まだらに生える松の木や檜の木と雑草ばかりの、ほとんど平坦な広場である。

吉景は綾蘭笠を外し、鹿の皮で作られた行藤を脱いで、くすんだ緑色の針葉を空間に突き刺している瘤だらけの大きな松の木陰に腰を降ろした。

浅居は、気の利かない部下を叱りつけた。

「殿、床几にお坐りください」

それぞれの居場所を確保したり、水を飲んだりする家来たちが落ち着くと、大きく息を吸って吉景は空を見上げた。大鷹が二羽、悠然と気流に乗って地上の獲物を狙っている。

「あれらの鷹に獲物を取られるでないぞ」

吉景は鷹匠のそばに置いてある鳥かごの中の鵠はいたかに声を掛けた。

「はっ、かしこまりました」

鷹匠が緊張した面持ちで言った。

「お前に言ったのではない」

吉景はそう言って笑った。周りの者たちも笑った。

吉景の狩衣かりぎぬが風が吹き抜けた。東風をともに受けて、月代さかやきに結った彼の髪は乱れ、ぬすびとはぎの豆果が幾つも付着している奴袴ぬばかまがはためいた。

西の方角から武士たちのざわめきが聞こえてきた。木の間を縫って近づく彼らは、獵師らしい一人の男を引き立てている。右手に弓を持ち、左手には、矢も突きささったままで血液を滴らせている兎をぶら下げた若者であった。鳥見役や武士たちが目を付けたとき、横合いから矢を放ったのだという。

「なかなかの腕利きだな」

苦笑しながら言う吉景を、引き据えられた青年はぼろぼろの裾から逞しい手足を露わにして、眉毛の奥に光る眼まなこでじつと見上げている。

「牢へぶち込みますか？ それとも……」

武士の一人が刀の柄に手を掛けた。

「まあよい。放してやれ」

「しかし、この男は当地がお留場であることを知りつつ入っていたのです」

吉景の表情から、不意に余裕が消えた。そのことに気付かなかったわけではない。だが、言葉が直接外部から耳に伝わってきたとき、奇妙に吉景の神経は刺戟されたのである。

「なぜ禁制を破ったのか」

吉景に質たたされて、若者ははつきりと答えた。

「獲物が多いからです」

「卯月藩の法度に叛く危険を犯してまでも、ここで獵をする必要があるのか」

「必要はありません。どんな仕事でも、食べるだけなら稼げますから。でも、私の生きる場所は私が決定します。それだけは御上おかみの与り知らぬところですよ」

この言葉を聞くと、武士たちは顔色を変えて、薄汚れたざんばら髪が野放図に逆立っている獵師の頭をむりやり押さえつけた。

浅黒い皮膚にしっかりと引き締められた、張ち切れそうな筋肉の塊。門かどのような骨張った顎。太く低めの鼻――

吉景はその若者を興味深げに観察していた。無造作に造形されていながら、しかも、結果的には無視された部分を織り込み、特定の対象との関わり合いにおいてのみ自己を実現する肉体構造である。

吉景は、珍しいものに接したかのように獵師を見下ろす浅居には気もとめず、いまにも土の中からでも飛び出してきそうな弾力を感じさせる若い獵師に、なお話しかけた。

「なるほど、稀有けうの発見だったわけだな。しかし、お留場の獲物が売れるのか」

「もちろん、それを知られたら売れないどころか、とうの昔に処刑されているでしょう」

「隠しているのだな」

「いえ、隠すわけではありません。単に、まったく言う必要がないだけです」

吹き起る風に舞い上がった土や枯葉から顔を背けて、吉景は後ろを向いた。吉景は、しだいに募る焦燥を感じた。言う必要がない――たしかにこの獵師には言葉の必要はない。否、言うてはならない、同時に、言わないことが許されている。認識内容は必然的にその現象化を欲するのではないのか。というよりも、それが現象化されるとき、即

ち表現されるとき、内容として明瞭に輪郭を形作るはずだ。この表現が主体的に行われる場合、それは世界への働きかけ、行動となる。

吉景は、自分を焦燥に叩き込んだ獵師の言葉と自分の苛立ちの波源を見定めようと、思考を集中させた。

この男は明らかに行動した。それも、実践的な行動だ。事象化に際していかなる媒介をも要しない、事象化それ自体の流動の軌跡が常にその奥にある内容によって描かれる行動だ。反面、伝達的な行動もあろう。それは、音によって、言葉によって、色彩によって、形によって、それらの中に包み込まれた世界を提示することだ。本質的に内容の事象化に媒介を置く行動である。そして、その内容を形式として定着する。ところで、行動とは認識内容の世界化である。より直接的に言うならば、自己の社会化である。とすれば、行動した瞬間、自己と外界との関係は一変するはずだ。なぜなら、働きかけられることによって世界が変化し、それは同時に自己の変化へと還ってくるのだから。即ち、行動以前に関連の中で有意味性として捉えられていた外界の客体的対象は、行動によって否定性を露わにされると同時に、行為者との間へ欠如という断絶が横たわる。行動は自己と外界との関連の変革であり、直前の関連の否定である。この仕方において外界は、実践的行動によって受動的独立を、伝達的行動によって能動的独立を獲得する。なぜなら、前者はあくまでも作用されるからであり、後者は定着した行動に変貌して対峙するからである。ここに、行動という次元において、二つの独立した元、個と全との相互作用が始まる。あとは、行動が完結するか、閉塞するかだ。

……暗い静寂の空間で独り矢を放つ青年から放たれる波動に、吉景が放つ波動が明らかに同期した。吉景は激しい眼差しで若い獵師を振り返った。

言う必要がない。そしてこの男は何人にも煩わされず、ただ行動し、行動の純粹性を保ってきた。

触発された苛立ちが羨望と嫉妬に変わり、重苦しい憤りへと沈澱する下降螺旋を、吉景は雖もみするように感じなければならなかった。

「この場で手打ちにいたしますか？」

しばらくの間、風の音だけに委ねられていたその場の状況が、主君の意向を尋ねる源川という武士の声によって変化した。吉景は、その問いを放置して、ゆっくりと若者に近づいた。そして、視界がその一点のみであるかのようにに獵師を凝視し続けるうちに、吉景の唇は紫に変色していった。

「私が切る」

若者は、驚愕に突き上げられて領主を見上げた。瞬間、領主と敵対関係にあることを看取した。若い獵師は、鮮かに切断された直截面の向う側に、透明にとろけようとしてもなお屈折と反射の性質をつなぎ止め、色彩的な存在の仕方に着する吉景の平面的な陰影を見た。

「お前の名は？」

「やすけ」

若い獵師の声はやや震えていたが、吉景の目を気丈に見返しながら答えた。

「やすけに弓矢を返せ」

吉景の言葉の意味を理解しかねて周囲がざわめいたが、催促する主君の命令で、源川がやすけの前に弓矢を置いた。

「殿、いかなさるおつもりですか？」

浅居が尋ねた。それには答えず吉景は、「やすけ、弓矢を持て」と言った。

吉景は基本的には領民を尊重する穏やかな性格で、この程度の法度破りは咎めないのに、いまの表情や振る舞いはまるで別人のようだと、浅居はいぶかった。

万一、吉景が負けたら……万一？ と浅居は自問した。吉景は武道の鍛錬にも熱心だが、刀で弓矢と対戦する稽古をしたことはない。ましてや、いかなる実戦をも経験したことはない。猪のような体つきで、かつ鹿ほどにも俊敏そ

うな若い獵師を相手に、吉景が勝つ確率はそんなにも高いだろうか？ 否、逆に一縷の望みがあるとしたら、野生動物を相手にしてきた獵師に対して、吉景は人間を相手に稽古をつんできたということかもしれない。

浅居は不安になってきた。もし吉景がやすけの矢に斃れるようなことがあれば、卯月家の恥を通り越して、幕府の權威にまで傷が付く。ということは、幕府が卯月家に対してなんらかの措置を講じてくる可能性を招き寄せることもある。

「殿、たかが獵師を相手になさってはなりません。この男の始末は源川にお任せなさいませ」

こう言った浅居を、やすけは睨みつけた。

「やすけは、私に先んじて透明な動機を事象している。おそらくは無意識だからこそ体现しうる、個による全の超克に挑んでいる人間だ、手討ちなどにすべきではない」

吉景は言った。

「それどころか、おのずから時空に先んじて個性と存在価値を表象しており、生きる権利が外界を侵蝕している。やすけ自身が、侵すべからざる領域と化していることを、私はひしひしと感じる。にもかかわらず、彼はこの封建社会の中で捕縛され、死すべき運命に陥ってしまった。個性を体现している人間にとって、あつてはならぬ運命だ。ならば、運命に逆らわなければならない。しかし、仮に私がこの場にいなかったら、逆らう術もなくやすけは浅居の命のもと、源川によって首を落とされていたであろう。ところが私がここにいる。そして私は不本意にも、彼の生殺与奪権を持っている。私はやすけを放免することも、手討ちにすることもできる。ただし、そのような生ぬるいことをやすけは望むまい。私もそのような安易な手段を選びたくない。ならば運命に逆らおうとしている私が、運命に逆らう術をやすけに提供しよう。そのことによって、運命に逆らうことを共有できるからだ。彼の矢に射抜かれるとしても、私は後悔しない」

「なりませぬ、殿。このことが公儀に知れたら、どんなお咎めを受けるやもしれませぬ。卯月家の存続が危うくなります。また、万が一、殿におかれまして……」

吉景は急に激昂して、「ええい、黙れ」と浅居を遮った。

浅居は主君のあまりの変容ぶりに驚きながら片膝を突いて頭を下げ、それ以上、止めようとはしなかった。

「やすけ、いいか？」

やすけは微かに和らいだ眼差しながら、不敵な面構えでうなずいた。

「皆の者、手出しをするな。私が死んだら、やすけを自由の身にするように」

そう命令して吉景は、やすけに自分の納得する位置に立つよう促した。やすけは弓矢を持って俊敏に飛び跳ね、五間余りの距離をとった。武士たちが彼の背後に扇形に展開した。ちょうど行膝むかばきや綾蘭笠あやいがさなど余分な狩用の装具を脱ぎ捨て、身軽な格好になっていた吉景は太刀を抜いた。やすけも矢をつがえ、狙いを定めた。

意外に離れたな、二の矢、三の矢を考えているのか、と吉景は思った。

距離が遠くなれば、私の刀が届くまでに時間がかかる反面、私が刀で矢を撥ねのける可能性が大きくなる。撥ねのけて私が距離を縮める間に、二の矢、三の矢をつがえるつもりか。その手さばきは素早いだろう。しかし、やすけは鳥や兎、狐、狸など小動物だけを相手にしてきたのだから、動くものを見れば反射的に、逃げようとする獲物の速さに合わせて背後から射ることが習慣になっているはず。

それら獲物と人間の、動きの速さと方向の違いを利用するしかない、と吉景は考えた。

「いくぞ！」

言うなり、吉景は右前方へ走った。矢が、吉景の右前方を飛んでいった。思ったとおり、動物の速さに合わせた軌跡だ。二の矢をつがえようとするやすけに向かって、吉景は左へ右へと方向を変えながら前進した。二の矢が飛んできた。それは早くも吉景の速さと方向を察知した軌跡を描き、しかも吉景の目を狙ったものだ。吉景はその矢をから

くも太刀で払い落とした。そのわずかな時間差を使つて、やすけは粗末な空穂から三の矢を引き出そうと右腕を背中
に回した。すでにやすけとの間合いを3尺にまで縮めていた吉景は、防御するためにかけられた弓の上から、やす
けの首に太刀を振り下ろした。瞬間、やすけが引き攣りながらも笑みをうかべたようだった。頸動脈から血が噴き出
し、やすけは激しく仰け反つて斃れた。

吉景が勝つたのを見て、浅居や家臣たちは関の声を上げて喜んだ。

「殿、ご無事でなによりでございます。ありえないとは思いますが、心配で頭がくらくらいたしました」と浅居が
言った、「とんだ邪魔が入ったものです。さ、鷹狩りを始めましょう」

太陽は間地山の真上に差し掛かろうとしている。明るいながらも冬に向かつて勢いを失いつつある陽光に照らされ
たやすけの肉塊は急速に生気を喪失し、やがてただ転がったままの物体になった。まといつた檻樓を野分が時折り
はためかせている。

吉景には高揚感も充実感もなかった。自分が勝つたにもかかわらず、運命に逆らう運命の共有という論理は、ただ
自分が生き残り、やすけという行動者を殺した空しさだけをもちたらしめた。しかも、やすけの最期の笑みらしい表情が、
烙印のように脳裡に刻まれていた。消し去ろうとしても、その映像は糊塗した焼き目の下から、また焼き目が露わに
なる。

あれはなんだったのか？ 勝利の笑みか、それとも私を哀れむ笑みか？ 悲しみの笑みか？ 怒りの笑みか？ 呪
いの笑みか？ あるいは単に、苦痛による表情のゆがみだったのか？

それはもはや、解きようなない謎として残るしかないのだ——吉景はあらゆる望みを失ったかのような深い無力感
に陥った。やすけではなく自分自身を殺したような気もしてきた。自分が生きて、此処に在るべきではないという思
いにも囚われた。こんなことなら、対決しなければよかったか……

そのとき、やすけが囁いた、「机上の空論に訣別しろ！ 純粹に行動しろ！ 自己を事象しろ！」

周りの者たちに聞こえたのではと思われるほど、はっきりした声だった。家臣たちは耳をそばだてることもなく、
何事もなかったかのように狩を続行しようとしているようだ。

吉景のある思念が分裂反応を起こして急激に密度を増し、あまりにも稠密になって理性の被膜が裂けそうになるの
を感じた。

吉景の脳に閃きが突き立った。

清岳に新城を建てるのだ！

吉景は胸震いした。これこそ、無意識裡に求めていた解だと思った。汧乃との約束以来、良き治世を行なうことに
努めてきた吉景に、日々、責務を果たしているという自負はあったが、独自の知的活動や感動などの、心の充実感が
なかった。その誤差は内面の歪みとして蓄積し、人格崩壊の危機に直面していたと言っても過言ではない。それが今、
一気に解放された思いであった。

清岳は現在の城山と、かなり高度のある真間地山との間、やや北寄りに隆起した丘陵で、加納城創築者の池永政輝
が当初、第一候補にあげていた場所だったという。

西側間近に人馬を阻む峻壁を成す真間地山の険しい裾野を控え、北西麗には房矢川の急流がくねっている。しかも
地形が階段様^{よう}となっていて曲輪に適し、適度の広さをもつその頂きは本丸の配置に具合がいい。ただ、わずかに加納
城の城山を見下ろすとはいえ、やはりその方向が死角になる欠陥があった。

しかし、おそらくは加納の地に城築を計画する者は誰もが、清岳をも地選の候補地として考慮に入れるだろう。現
在の城山からは領内主要地域の展望が得られる反面、逆に城内のようすもまる見えとなる。しかも、戦闘の際、一度
領内に侵入されれば、その周囲は容易に包囲されてしまう。一方、清岳は西と北とを揺るぎない自然の防塞に守られ、
東と南の斜面を登りにくい段々で幾重にも荒つぽく保護している。ただ、領民の生活圏からはやや外れており、統治

の中心地となるには不都合であったので、そう遠くない将来に戦乱の世が終わり平穏な時代の来ることを予想して、戦略的には一歩劣るが、政庁としての利点を備えた城山に変更したのである。

確固たる目的が定まり、強い意思が固まると、吉景の心は燃え盛った。手をかざして清岳を眺め、次々に脳裡に浮かんでくる新城の勇姿を想いめぐらした。

一刻も早く具体策を練りたくなった吉景は、「帰るぞ！」と叫ぶなり、脱いだ狩衣もまとわず歩きはじめた。「殿、殿」悠長に鷹狩りの続きをしようとしていた浅居がうろたえて声をかけた、「やすけの遺体はどのようにいたしますしょう？」

築城の思いつき自体、やすけから命令されたような気がしていた吉景は、吊いをする気は毛頭なく、「捨てておけ」と激しく言った。

吉景の人格が変わった——浅居は驚いた。身分にかかわらず人命を最大限、尊重していた吉景が、死体を放置しておけと命じるとは信じがたいことだ。目も口調も立ち居振る舞いも、直前の吉景からは想像もできないほど陰しく、粗暴になっていた。

永文三年の一月も晦日、奥茂と冴乃は江戸に到着しているころであった。吉景はその日、清岳に登った。これまでも密に五、六度登っておおまかな構想を練ってきたが、今日は城郭建築に詳しい重臣の長谷部と、普請方など数人の腹心を連れてきて、本格的な地選の決定と縄張の具体的な計画を立てる目的で来たのである。長谷部は周囲に注意深く目を配り、ときどき立ち止まって地形図らしいものを書いたり、概略図と比較したりしている。

吉景は呼吸を弾ませ、頂上を目指していた。しかし、夢中で草を薙ぎ払い、掻き分け、石につまずき、また、木の枝に顔を打たれ、茅の葉に手指に小さな切り傷をつけられたりしながらも、脳の暗部にわだかまる不安を感受し、暗い心持ちにならないではいられなかった。吉景の歩みは単なる歩みであって草木の繁茂と等値であり、包括的な、あるいは逆に単一的な、何の意味もない世界を形成している。統一ではなく、単にいかなる過不足をも持たぬ、系として分離・抽出することさえ不可能な或る状況に過ぎない。分離してもしなくても、ただ有関連の構造を持続し、しかも、築城問題に対して何の意味も積極性も持たない、すべてが等値な要素の塊りである。

しかし次の瞬間、つい先刻まで疎外を生まぬ単一の世界だった情況の中に、吉景が投げ出されたままの姿で存在していることに気付くと、主観としての意識に取り込む景色を、空や山や木や草や土、百舌など冬の鳥たち、そして臣下や彼自身等々を、それぞれの呼称を持つ独自性として、情景の構成要素として徐々に解体を進めていった。

それから山頂までは意外に近かった。

吉景は南東に大きく広がった卯月の領下を眩しそうに見下ろした。そしてすぐ、遠くに小さく見える加納城へ視線を移した。城を圍繞する塀や、常緑樹の緑や、微かな芽吹きをまじえた枯れ木の間から曲輪や角櫓が覗き、黄金の鯉を燦然と輝かせて高い石塁の上に天守がそそり立っている。一面に望まれる家並や、そのはるか彼方に横たわる海を背景にして、その背景を遠心的に分散させた、雄大で稠密な、力感溢れる城郭であることが、いまさらながら胸に迫ってくる。

しかし、具体性は常にその使命を終えるものだ。加納の城下町を扇状に形成したあの城も、反応を継起する成分を使い果たしたのではないか。軍事的にも経済的にも、そして政治や思想、文化の面においても、既にその存在によっては発展させようのない臨界に接して、動的な進行の前に機能を失い、ただ美の完結態へと昇華されたのだ。それは、使命を全うしたものの、かつての栄光を従えた悠然たる飛翔である。美の唯一の礎であるべき合目的性および適応性を振り捨てた後にもなお、否それゆえにこそ、より純化された美として厳存する崇高な雄姿である。

長谷部が話しかけてきた。

「藩の統治には、やはり不便でしょうね」

「もちろん承知している。しかし問題ではない」と吉景は言った、「価値を転換するのだ。その裏付けとして、町を合目的的に網の目のように構成し直す」と、含みありげな微笑を浮かべた。

意識は自由への条件である。そして、歴史に時代的参加をする存在の仕方は、人間の欠如を充填する行動において時代的であり、したがって、全と同化した透明な触媒である半面、創造をもたらす契機でもある。吉景の意図するのは、反動ではなく、創造への志向性をもつ反逆という仕方の否定による虚無、即ち、帰納化に必要な場、自由空間を獲得することであった。そして、頭初の、築城と反逆とが同時に充たされる方法を放棄した現在、まず、演繹された吉景を包含する時間的な関連の中に配置される新しい城の空間構造、即ち、戦略的あるいは政庁としての合目的性による受動的なそれではなく、彼の個性が充溢する時間と空間それ自体の能動性による構造を具体化し、次いで、一国一城令への反逆によって虚無を押し拡げ、構築された城を契機として新しい次元の世界を形成しなければならぬ。それは、もはや築城に意義を託す唯一の手段である。なぜなら、奥茂の策謀により城築という行為が直接的に反逆とならないならば、その行為による既成事実、結果として、加納城取り壊しの条件を破棄する際の間接的な役割を果たすに過ぎない、間伸びした従属的な行動に形式化されるからだ。

「あくなき努力——まさにそのとおりだ。倦怠から倦怠へと開拓するその道程において、社会と人間それぞれの構造および関連性の複雑化が行われる。倦怠からの逃避という倦怠の連鎖なのだ。それはそれでいい。だが、卑近な具体性は想像以上に私たちを束縛するものだ。生活の場、労働の場、これらは人を最も強く頑迷に揺り動かす。場の様式も、むろん常に複雑化していく。だが、それは前時代的に終始するものだ。というのは、場の複雑化は人間の複雑化と反映し合ってもたらされる結果にすぎないのだから。社会構造の細分化や記号化によって人間精神が疎外されるというのは、馬鹿々々しいほどに愚昧で有害な妄想なのだ。社会は決して人間に先行することはできぬ。逆に、精神の微分化の前に社会があまりにも鈍感であり、あまりにも前時代的であり、あまりにも曖昧であることこそ、人間の自由を拘束する原因なのだ。場における時間空間的な構造の必然性、合目的な緊密性は、人間の精神をむしろ解放する。この結論を躊躇させるものは、社会を人間的な構造であると見なすこと、または、その期待にほかならない。しかし、はつきりと認識せねばならぬ、人間は社会と相交わることがなく、社会と矛盾関係にあるのだ。この視点が、精神をその場から解放する契機となるだろう。恐れることはない、城を中心としながらの町の網状構造化、建築物の役割別合目的化、世襲による身分制度の廃止と、生産・経済の合理化、統治の必要最小限の機能——これらの奥底に深く潜んで、内的価値秩序の敷衍ふえんと人間の尊厳を謳歌することだ」

こうまくし立てた吉景は、浅居に笑いかけながら、「必要であると感じるときこそ、真に必要なのだ」と言った。浅居は難しげな表情で、ただうなずいていた。

「ところで、縄張の目安はついたか」と吉景は長谷部に尋ねた。

「細かい部分はまだ詰め切っておりませぬが、おおよその見当はつきました」

長谷部は吉景をあらこちら案内しつつ説明しはじめた。本丸を中心に、二の丸から四の丸までの位置と方角、堀、塀、石垣、櫓門や升形の配置等々、吉景の選択の余地を残した柔軟性のある経始だった。

浅居は乱れる白髪をときどき押さえながら、夢中で歩き回る吉景から離れて一人たたずんでいた。西には、川床の岩石へ体当たりして白く砕け散る音も聞こえそうな房矢川。東はるか遠くには、銀の帯を横たえたような古浦の大河。そして真向かいに、浅居が幾十年ものあいだ過ごしてきた加納城が聳えている。

しばらく揺らいでいた浅居の視線は、やがて、身ごもった娘の膨脹した腹部を眺めるような父親の一寸いちずな、それでいて老執の空虚に満ちる枯れた色彩をこめてその城に注がれた。そしてすぐに、彼の薄い皺だらけの臉は閉じられた。加納城も間もなく取り壊される。そして、新しい城からこの領下を見下ろさねばならない。加納城への惜別が熾烈な実感となって、老臣の目頭に熱く滞った。二十代初期から浅居が生きてきた場は、加納城の内部であり、土と空気の香り高い卯月家の統治下である。さらにまた、勤勉で善良な領民たちの活気に満ちた息吹の中であった。彼は不意

に、先代の姿を思い浮かべたりした。

「思ったとおり、なかなか具合のいい地形だ。ここに決める」

調査を終えた吉景が笑みを浮かべながら戻ってきた。浅居は軽く頭を下げた。

「そうですか。では近いうちに祓いの儀を――」

この浅居の言葉に吉景は、わずかにわずらわしげな表情を見せたが、そのまま話頭を転じた。

「認識とは意味性の発見なのか。とはいえ、その発見と同時に、関連は意識によって切断され、敵対的な状況が生まれる。生きる情動だ、創造への条件だ。ここからあの海岸まで、二十間幅の道路で貫く。その両側に十間幅の運河を掘って海水を引き入れる。南北方向には橋を渡して中央の道路に交叉させる。そうすれば、馬は思い切り突っ走ることでもきよう。荷馬車や人はゆつたりと歩けるだろう。海産物も運河を利用して直接大量にこの直下まで運べよう。そして、中央路に平行に幾本もの小路を通し、その升形の内部に集約的に領民と武士を住まわせる。城から伸びる強い一本の絆で彼らを小さな統治の系に関して結び付けるのだ。しかも、それら放射状の動線に対して円弧状の動線を設けて、横のつながりをもたせる。さらに、対角線にも細い道を作り、往来する時間の無駄を省く。関連付けられた広がりにおいて、空間的には同時的存在であるにもかかわらず時間的にずれているということは、たしかに人間の精神を圧迫する。世界は、時間的にも気が狂うほどに同時存在的でなければならないのだ。気が狂うほどに。そうとも、人間は誰も彼も発狂してしまえばいい。通信や交通など、物理的現象における絶対速度の束縛を超えることだ。すべての人間が狂気の果てに悶絶することだ」

こう言ってから吉景は浅居を覗き込み、「どうしたのだ、浮かぬ顔をしているが」と、たいして気にもとめていないようすで尋ねた。

「いえ、べつに……ただ無性に、何もかもが懐かしく思われてきたのです」

「感傷だな。諦めの悪い奴だ」

「そうかもしれません。しかし感傷とは、人間にとって数少ない憩いの場の一つではありませんまいか。それは、なにかしら常に恐ろしい影に怯えている私たちを、陰陽対決の構図から解放する貴重な契機です。なるほど、青年の感傷は、その非生産性ゆえに好ましいものとは思われません。が、少なくとも老人の感傷は、非生産的であるからこそ、歴史の大きな要素なのです。次々に世代を継承し、その継承の中から民族の、世界の伝統を培い、その伝統を核としつつ累々と歴史が積み重ねられます。反動的な傾向は時代の内部に遍在するのですが、それは老人が、単に世代継承という受動的な行為を、現在時点の新しい創造力になりうるとする錯誤のもたらす結果なのです。過去と自己の世代を信じるなら、未来の世代を信じなければなりません。個人的にしる社会的にしる、人類の喜劇的な悲劇の原因はここにも潜んでいるのです。老人もまた、老人としての自覚に目醒めなければなりません。伝統に時代性を滲ませて伝統の質的な変革を企て、新しい歴史に対する受容力を用意することです。歴史の方向を次代に示すことです。青年はそれを、感傷であるとか懐古趣味であるとか非難するでしょう。それはいい。彼らの反発が新しい時代への原動力となる。老人は、もとより、感傷の限界の中に委ねるしかありませんが、ここに世代間の軋轢が歴史の創造力となりましょう。馬鹿々々しい悲劇が厳粛な摩擦となりましょう」

吉景の嘲笑と浅居の類笑みとが微妙に交叉した。吉景は足もとの草を一握り、根っ子からむしり取って投げ捨てた。浅居は話を続けた。

「生の証しは、過剰か欠如によって為されるものでしょう。貧困層の人々は、その経済的な欠如ゆえにけつこう逞しく生きている。富裕層は、その余剰ゆえに自らの動きを止められませんか。何の過不足もない、生きているのか、それとも生まれてこなかったのかわからぬほどの私には、かえってその証しははっきりと見えるのです。私は現状に適応しようとするのが精いっぱい、それを否定する思想に及んだことさえありません。現状以外のあらゆる思想は、私にとってはあまりにも荷の重過ぎる驚愕なのです。殿のお話を伺ったときも、加納城と、かつての卯月家に代わって、

えたいの知れないものが襲いかかってくるような気がして、おろおろと目を覆うばかりでした。たとい、それがより良い状態であるにしても、私は動くのがおつくうなのです。必要に迫られることもない、理想もない、これが私です」主従は床几の上に腰を降ろした。長谷部や普請方たちはまだ調査に余念がない。二人だけの山頂に、はやくも冷めたい翳りを宿しはじめた日光が降り注いでいる。

「殿、あの雄大な美しい加納城も、やがて姿を消すわけですね。卯月家の、そして私たち家臣や領民の血を通わせ、生活の跡を刻み込んだまま。……私は肉親の死に目に立ち会うように悲しい」

吉景は一瞬ためらった。しかし、浅居をなぐさめようという衝動を抑えきれなかった。

「加納城は残す。私の生きている限り」

「えっ?!」と叫んで、浅居はしばらく主君の顔をまじまじと凝視していた。そして、力なくうつむいた。

「浅居殿は喜んでくれるはずだと思ったが……」

「また、なんということをしようとなさるのか。せつかく、卯月家もいちおうは安泰だと思っておりましたのに……」

吉景の表情が硬く強張った。

「新城が完成して卯月家が崩壊する前に、お前は死ぬだろう。心配するな」

その口調は、老臣に言葉どおりの意味のほかに、いかなる解釈の余地をも与えなかった。

浅居の体は小刻みに震えていた。吊るし上げられたような筋だらけの首、土くれのような染みの浮き出た顔。彼はかたくなに加納城へ視線を注いだ。

「いつから、そんなに変わられたのか……」

吉景は老臣の独り言を毒々しい笑みで受けた。

人間の変化の過程において、因果関係は偶然によって仕掛けられた必然なのだ。巻き込まれ、選択し、弾き出され、いつしか方々の流刑地に送られている。不毛の荒原か、肥沃な孤島か。いずれにしても先の見えない暗がりを一人堪えるのだ。そしてまた、別の流刑地へ泳ぎ着く。航路も道程もわかりやしない。叫んでも見渡しても古里など見つからぬ。万人のいる、しかし、誰一人いない世界の果てでどんな生を生きるか、どんな力を得て再び波間に投げ込まれるか、あるいは飛び込むか。母胎など憧憬に過ぎぬ、伝統など虚妄だ。ただ冷徹な情動をもって生の一瞬に自己を賭けることだ。過程を構成する瞬間を、契機における必然的因果の瞬間を信じない者に、永遠を信じる権利があるか。

「そのようなお心だから、奥茂殿のご心痛をも平然と観察していらっしゃるのです。卯月家のことも少しはお考えになつたらいかがですか」

「よけいな干渉はやめろ」

「いえ、干渉ではありません。私も卯月家には筆舌に余るご恩を受けてまいりました。そのご恩を顧みるとき、卯月家の安泰を願うことこそ私の義務であることを痛感いたします。もはや殿にではなく、卯月家のみに愛を抱かずにはいられなくなりました」

「それこそお前の自由だ」

「卯月家の誉を汚すおつもりなら、主君の座をお降り願いたい。私どもは、吉景様ではなく、卯月家にお仕えしているのです。吉景さまが〈お家〉に対する責任を果たしてくださらないとすれば、私たちもお仕えする義務はございません」

浅居は突然、口をつぐんだ。

いまさら何を悲しみ、何に対して憤るというのだ。価値と創造は、手段や目的の彼岸にあるのではなかったか——こう考えつつ、吉景は、怒りを、屈辱感を、そして少なくとも彼らに与える苦しみの謝意を、齒の奥で噛み殺した。ようやく我にかえった浅居は、真っ青になって跳ねるように吉景の前にひれ伏した。不意を衝かれて、吉景は訝

「お許しください、身のほど知らずの暴言、ひらにひらにお許しを！」

不意打ちに構えた吉景は、わずかに増した余裕の中、沈黙のまま老臣を見下ろした。

「殿、私は取り返しのかめ冒瀆に手を染めてしまいました。殿を侮辱することによって、私は卯月家の尊厳に傷をつけました」

吉景の目の色が変わった。

「では、私への謝罪ではないのか」

「はい」

「ならば立て、私は卯月家の人間であることを放棄したのだ」

「いえ、殿のお許しがあるまでは立てません」

「私に辱めを加えようというのか、私個人に？ 立て、浅居」

浅居はいっそう深く地べたにへばりついた。吉景は異様に興奮して立ち上がった。

「お許しください、殿」

「うるさい、立て！」と叫んで、吉景は浅居の手の甲を踏みつけた。浅居はなお立ち上がろうとしない。吉景は浅居の、あるかないかの白い二つ折りの髷と月代に刺った頭頂に視線を遣ると、瘦せて骨ばった胸を力いっぱい蹴り上げた。浅居の全身は弓なりに反った。「立て、立て！」と吉景は狂気したように命令し続ける。しかし浅居は、ころがされ、苦痛に呻き声を押し殺しながら、必死に這いつくばっている。

やがて、吉景の激情は鎮まった。がっくりと床几に腰を下ろし、足下に視線を落とし、いつまでも荒い呼吸のままである。

風向きが変わったようだ。真間地山から吹き降ろし、また清岳へ昇ってくる冷たい空気が、海の方へ抜けてゆく。

松傘が一つ、吉景の頬をかすめて落ちた。

「殿……」

聞き取れぬほどにこもった囁き声が、老臣の口からしぼり出された。頭も着物も泥でよごれている。土下座しているというよりは、叩きのめされて起きる力もなく上体を折り、無意識に腕を突き立てているようだ。血管が張りのない皮膚を盛り上げて乱れた襷を成している手の甲には、泥まみれに血が滲み、細い肘はいまにも頰れそうに大きく震えている。

「殿、奥茂殿をはじめ私ども家臣一同は皆、殿のご治政を心から待ち望んでおります。どうか、どうか以前のような折り目正しい藩政にお戻りください」

萎縮し切った頭を懸命にもたげて、浅居は吉景を仰いだ。深く刻まれた額の皺、落ち窪んだ眼。何も期待できぬ絶望に追い詰められた者の最後に宿す、動物的な残照。

餌を獲るように、切実な、真剣な懇願であった。

「いやだ」

吉景は撥ねつけた。支えの糸を切断されて、浅居の首は再びのめり込んだ。

「政こそ、何もできやしない。為しうる大きなことといえば、せいぜい戦の口火を切る、ほんの手続きくらいのものだ。しかも、時代が何らかの意味の閉鎖状態にまで進めば、それは必然的に死闘へ爆発するに違いない。政治はその必然性をすら動かすことができぬ。時代様式が極限まで膨脹した臓腑を孕み、ときには宗教の名を借りる経済的閉鎖から、ときには思想の名を借りる支配権の閉鎖から、あるいはそれらの絡み合った閉鎖から、喰い過ぎて突っ張った腹の皮に亀裂を生じ、腐蝕した臓腑がはみ出し、血液の混ざった膿が吹き飛ぶように、対外戦争へと、内乱へと巻き込まれてゆくのだ。見ているがいい、戦は、その周期を徐々に引き延ばしこそすれ、決して永遠に無くなりはない。なぜなら、人間の条件そのものが、あらゆる閉鎖の根本的原因を成しているからだ。戦は、生物種の本質が欲

するものではない。人間性が要求する戦いなのだ。戦によって、時代が幾度も幾度も解放されてゆくならそれもよからう。私は社会の閉鎖系化に抗う術を知らぬ。どの道、大衆とは愚かなものだ。そして、その大衆と手に手を取り合い、自らの首を絞め上げてゆくのが政治だ。歴史とは、畢竟、大衆と政治の招いた蹉跌を次々に尻拭いする過程に過ぎぬ。私は、そのいずれにもたずさわりたくない。社会の閉鎖系化は、むしろ、個人の閉鎖系化を直接的には意味しないのだ」

浅居はいつの間にか埃を払い落とし、吉景に正面切って正座していた。

「殿はあまりに独善的に過ぎる。殿の中に渦巻いているのは、ご自身で仰言ったように観念ばかりです。観念の骨組だけでは、現実的には何の役にも立ちますまい。事実から視線を背けた真実の捏造です、虚偽です」

「どんな社会において、どんな時代において、真実が現実に対して有効性を発揮しえたか。そして、真実を創造せずに、いったい何を創造するのだ？」

「いえ、真実とは、現実の中から突然に挑みかかってくるものです」

「真実を検証できるのか」

吉景は床几を蹴って立ち上がり、山を下りはじめた。暗い表情の一行は後に続いた。

江戸の藩邸に到着すると直ちに、奥茂は忙しげに何処へとも告げず一人で外出しはじめた。それはあまりにも異様だった。一日のうちに二度も三度も出たり入ったりする。かと思えば、終日自室に閉じ籠ったきり食事さえろくろく摂らないときもあり、たまには譫言のように唐突な言葉をつぶやく。不規則な、重心のない生活であった。目的のある行動に狂奔しているというよりは、焦躁に迫り立てられる者の足掻きに近い。

そんな奥茂が、江戸詰の人々の注意を惹き、驚きと奇異な目で見られるのは当然であった。しかも、江戸家老にすら、今度の彼の出府について真の目的を知らせていなかった。というのも、むしろそれは奥茂個人の思惑だったのだが、波紋や動揺が広がるのを防ぐためであり、また、城築の件は奥茂にとって、吉景と国家老と、そして冴乃との間に生じた問題であるとすれば、ことさら江戸の者たちを煩わす必要もないと判断したからだ。それゆえ、ただ冴乃を送り返し、ついでに江戸表の近況を視察することだ、とだけ説明しておいたのである。

しかし、彼の憂慮にもかかわらず、明確な理由もない突然の出府と、それに続く落ち着きのない言動や憔悴し切った姿、そしてまたとりわけ額の生々しい傷跡などから、江戸の卯月藩内部では臆測が乱れ飛び、ついには急速に、吉景と奥茂との間に何か悶着が起こったのであろう、との風聞が取り沙汰されるようになっていた。

それこそ、奥茂の最も恐れるところである。風聞が公儀に聞こえれば、詮索が始まる。いかなる場合にせよ、大名目附と直接関わることは不利を招く。特にこの際、できる限り内外の摩擦を避け、めんどろな雑事と幕府の耳目から遠ざからねばならぬ。

奥茂は平静な言動を心がけ、流言の消え去るのを静かに待とうと努めた。だが理性とは裏腹に、蒼褪めた顔から放射する視線の刺々しさや、頬の神経質な顫動は募っていた。逆断層のような意識状態が肉体の表面にまで伝播する緊張によって、奥茂の存在は今にも鋭い金属音を発して張り裂けそうだった。

どんよりと曇った昼下り、本を開いたまま奥茂は文机の前に動かなかった。

本年九月からは、また吉景の一年間の江戸在勤が始まる。その時期は多少遅延させることができるとしても、なるべく早い機会にすべてを終わらせなければならない。結果を予測することは不可能である。ただ、私には必死の願いがあるのみだ。吉景を前面に立てて卯月家の平穏な存続を図ること、そのみなのだ。冒瀆？——それも畢竟、相対的なものにすぎない。宇宙から抽出され海と大地に生きた祖先の血を継承し、宇宙へ還流することこそ、おのの世代が拠って立つ、そして各世代の在り方を規定する最上位の尊厳ではないか。全の存亡に関して、個の犠牲はありえない。なぜなら、その危機に直面した瞬間、全にとつても個にとつても、個的な存在の仕方は無意味となるから

だ。

奥茂は、折りからの底冷えのする寒さに共振して、体を小刻みに震わせていた。

——それにしても、それにしても、早く実行しなければならぬ。血管の内壁を激しく叩きつける血流が、いっそう彼の苛立ちを昂ぶらせるのだった。

我知らず荒々しく立ち上がったとき、近侍が来客を告げにきた。角桐沙忠さちゅうだという。祖父・卯月信隆の末娘で、

花田家の家老、角桐十左に嫁いだはるの次男である。奥茂はいぶかりながら彼を通した。

「突然おじゃまして申し訳ありません」

挨拶もそこそこに、沙忠は興奮し切った面持ちで奥茂の前に坐った。筋肉質だが僅かに華奢な繊細さを秘めた若々しい侍である。再び時候見舞いでも述べようとしたのか、沙忠は目を上げた。が、奥茂の額の傷痕に気付くと、跡切れたように固くなった。そして、能動的であるべきなのに、一瞬のうちに受動的な立場に置き換えられた者の、ちぐはぐな定まらぬ表情で黙りこくってしまった。

奥茂が唇を歪めながら口を切った。

「これか……安眠を貧っている間に、空から星が降ってきたのだ。偶然とも必然ともつかず、それが私にぶち当たったに過ぎない」

奥茂は病的に粘着性の声で笑った。

しかし、彼の甥はまだ姿勢を崩さずに、奥茂へ対座したままである。紋付の羽織に茶色の袴。傍に投げ出された大刀。凜々しく整った顔を強張らせて、沙忠はじつと奥茂を見詰めていた。輪郭もはっきりしないほどに透明な瞳が、男らしい眉毛と長い睫を持つ二重目蓋とに引き立てられ、彫りの深い陰影を醸し出す。

奥茂は逆に「何の用だ」と尋ねなければならなかった。

沙忠ははつと自分の立場に戻った。そして、双手をつき、頭を垂れて言った。

「殿がお隠れになりました」

沙忠の主君、花田勝直が亡くなったという。彼は既に七十歳を超えていた。べつに驚くこともなかったが、奥茂は一応、沙忠に悔みの言葉を告げた。しかし、甥はこれには応じず、反抗的な視線で奥茂を見返したのであった。

「お世継は？」と奥茂が訊いた。

「順調に、嫡子・勝近様が新しい領主となれました」

奥茂は身を引くようにしてから、静かにうなずいた。世代は交替したのだ——家禄の継承が滞りなく進んだ花田家に対し、奥茂は密かに羨望を抱き、同時に、現在直面している卯月家の存亡の危機にあらためて暗い焦りを覚えなければならなかった。

「ところで、お前がわざわざ出向いてきのは、それを知らせるためだったのか」

「いえ」と沙忠は即座に、決定的な否定を下した。まるで主君の死は問題でない、とでもいうふうな口ぶりだった。

これまでの持続的な楽音が、不意に鳴りだした騒音によって掻き消されてしまったようだ。

「追腹おいばらの件です」

沙忠は苦々しげに吐き捨てた。彼の口調には当惑と憤懣がうかがわれる。奥茂も胸を突かれた。

「勝直様がお亡くなりになると、一兩日のうちに重臣二名、その他数名が主君の後を追ったのです。私の父も、十五日未明、自室で切腹しました」

こう言う沙忠には悲しみも哀惜もなく、むしろ軽蔑的な感情が剥き出しになっている。追腹は御法度なのにと、奥茂は腕組みをして考え込んだ。

「なるほど、追腹は、一つの決断という意味では崇高な行為かもしれませんが、決断的な行為には、少なくとも稀少価値がありますから。しかし、それはあくまでも自発的な、否むしろ衝動的なというべきでしょうが、選択に委ねられ

なければならぬはず。現実には、自らの生を牽引する主君という存在が亡くなった結果なのです。存在の条件となるまで、奥深く家臣の心に食い込む主君などいるわけありません」

張りのある沙忠の声音が、いつの間にか上擦っていた。奥茂につかみ掛かりそんな興奮である。黙して聞く奥茂は、直ちに甥の苦しい立場を理解した。

「私も追腹を迫られているのです。最初のうちは皆、私が自ら殉死するであろうと期待して、誰もが何も言わずに待っていました。まるで、楽しい芝居の幕あきを待つみたいに。父の遺言状にも、私に死ねと書いてありましたし。：しかし、私にはそんな意思は毛頭ありません。だいいち、私が死んだところでただ穀潰し（こくつぶし）が一人減るだけですし、それ以上に私は生きたいのです。そんなわけで、私がいつまでも死なないものですから、周囲がしだいに私を陰で非難しはじめました。なに、待ちくたびれた観客の野次ですよ。幕もないのに、開くものか。だんだん露骨になる彼らの誹謗をも、私は平然と受け流していました。実際、私はべつに痛くも痒くもないどころか、後ろめたくもないのです。ところが、実は、勝近様ご自身、私の追腹を望んでいらつしやるらしいのです」

沙忠は言葉を止切らせ、きつく唇を噛み締めた。

奥茂は、ありそうなことだと思った。十左の追腹には、花田家への謝罪の意味も含まれていたに違いない。

「卑怯だ」

沙忠の声は鋭かった。

「私が追腹しなければ、角桐家を断絶させるというのです。なるほど、常套的かつ効果的な手段だ。兄という嗣子がいますからね。私など消えても、もちろん世界の大勢はおろか、角桐家の存続には支障ありませんし、そうなれば〈家〉という化け物によって加えられる圧力は強大なものとなり、けっきょく花田家の威信にとってはなはだ都合が良くなるわけです。暴挙でもなく寛容でもなく、ただ政治的な、あるいは格式としての威厳を、余さず、溢れるほどに示すことができますからね。しかも……私は煮えくり返るような憤りを覚えるのです、兄までが私に、死んでくれ、と頼むではありませんか。死んでくれ、と。兄が単に、死ね、と命令するのなら、あるいは殺すなら、私はがまんもしましよう。しかし、手段として私の命を断てというのです。〈お家〉のため、と。そうだと、愛のない関係において、死を要求するには大義名分がなければならない。人間として、何人（なんびと）が他人の死を要求しうるか。兄としての、または人間としての優越すらをかなぐり捨て、〈家〉の大義名分の前に卑劣にも膝を折る。まったく、反吐（へど）が出そうです。だが、兄にしたところで、〈家〉などたいした問題ではありませんよ。単に世間体、武士道、虚栄、そんなわけのわからぬものが混沌として渦巻き、畢竟自己の身の安全を〈家〉にすり替えただけなのです。もともと、虚栄心や羞恥心のまったくない人間もまた、無様なものではありませんが。かといって、それが生命（いのち）と等値、否、それ以上の代物だとは笑止千万ですよ。己の生命（おのれ）ならいざ知らず、別人の生命とね」

沙忠は、神経的に拳を振り上げたり苦笑いを洩らしたり、興奮にときどき喉を詰まらせたりして語り続けた。

「いやがらせですよ。先君への忠誠を果たせというのではなく、かえって自己の権力を示すために企んだ拷問ですよ。だいたい、身分の高いお方ほど、巨万の富に腹を膨らませた者ほど、嗜虐的な好みが強いものですからね。だからといって、殉死を奸計によって強いるなどもってのほかです。主君への愛というただ一点の崇高さもそれによって汚され、同時に、死者への最大の凌辱と化してしまうではありませんか」

なお怒りをぶちまけようとする沙忠を、奥茂が厳しい表情で強く遮った。

「なんとしても、お前の立場は難しい」

これを聞くと、沙忠の顔は急に引き締まり、青褪めた。精神的にも日常生活においても、窮境に置かれていることはむろん、重々（じゅうじゅう）わかっていた。だからこそ、奥茂の渋い言葉が、沙忠の中にあつた細い支えを折らずにはおかなかったのである。

沙忠、したがって角桐家は明らかに、勝直と花田家に大きな負目があるのである。

四年前、まだ十六歳であった沙忠が、こともあろうに勝直の寵愛を受けていた保志という側室と通じたのだ。激しく燃えた恋で、駈落ちさえ考えたという。しかし、社会的な容認の形で与えられる祝福のない恋愛には、破綻が訪れやすい。二人の関係は三月余り続いたが、深夜、沙忠が保志の部屋に忍び込んで密会しているところを、勝直自身に目撃されてしまった。もともと、情熱溢れる恋慕が人目につかぬはずはない。勝直は薄々勘づいていて、冷厳な傍観者のように立ち現われたのである。

現実を目の当たりにした勝直の驚きと怒りは熾烈だった。一般ならば、その場で二人とも切り捨てられるか、市中引き回しのうえ獄門に処せられる咎であつた。にもかかわらず、勝直は沙忠の叔父である吉景の体面をおもんばかつたのであろう、二人の罪はいちおう和談内済で赦されることになった。

そのとき卯月與茂が、勝直への謝罪と角桐家との久離を申し入れるために、花田藩まで吉景の代理として赴いたのである。しかし勝直は、卯月家に対しては角桐家との久離の必要はないと言い、父十左からの沙忠の勘当も願ひ下げとする、大きな寛容を示した。

とはいえそれ以後、残忍な復讐と思われる勝直の沙汰が、沙忠と保志に関して次々と下されたのである。まず、当事者の二人および角桐家一門は絶対に自害してはならぬこと、次いで、十左の家老職罷免ならびに角桐家の減俸と世襲家老職の地位剥奪。さらに、沙忠の江戸番下級武士への格下げ、そして最後に、勝直を仲人とする沙忠と保志の婚姻命令が申し渡された。

この最後の処置は、勝直としても覚悟を必要とした。というのは、二人を結婚させることによって事件が家臣に露顕し、勝直自身もある程度の權威の失墜と恥辱とを忍ばなければならなかったからである。しかし、それは、おそらく、權力の地位を笠に着て毒々しく高笑いする勝直の二人の男女への、とりわけ保志への、無慈悲な復讐であつた。勝直は「惚れて惚れられた美男美女、羨ましい夫婦だ」などと冗談めかして言っていた。

発覚してからわずか十日後に、勝直の媒妁で二人は結婚したが、保志は半年余りで極度の衰弱に陥り、勝直の子か沙忠の子かわからぬまま流産して死んだ。それより前、保志の実家、足輕組頭の山科家当主五郎とその妻は、直接勝直からは何の類も及ばなかったにもかかわらず、周囲の厳しい白眼の重圧に堪えかねて出奔していた。

保志の死後、沙忠には、勝直はまったく干渉しなくなった。それは主君の意識的な無視にほかならなかったのだが、それゆえに沙忠は非常な屈辱感と苦しみとを覚えながらも、生活環境としては広く解放された。

勝直が示したこれら一連の動きは、社会的な観点、第三者としての立場からは、疑いなく特赦であつた。少数の家臣たちは主君の報復であろうと付度し、当然の権利を行使しない勝直の強い自己顕示からする行為であることを嗅ぎ取っていた。なぜなら、復讐とは畢竟、贖いを求めぬ行為だからである。一方、おおかたの家臣に映じたのは、君主の温情ある配慮と、保志に対する深い愛情、そして沙忠という家臣への思いやり、および恋愛への理解だった。

だが、沙忠と保志にしてみれば、臨界状態にありながら冷やかに計算する激情であり、己の経た過去の一部をも抹消し尽くすほどの女に対する憎悪、そして隠蔽された威丈高な嫉妬である。生きることの許可という、生き地獄への突き落としだったのだ。

「そうではない、私は生きたかったです」

苛々と考え込んでいた沙忠は、出し抜けに大きな声で言った。

「殿のご命令がなかったとしても、もし私が死を欲したならば即座に自害し果てたでしょう。というのも、殿が私たちに復讐なさろうとしたとき、私たちは彼から自由になったはずだからです。そして、愛とは、とりもなおさず生きることへの情熱ではありませんか。少なくとも私にとつては、生命そのものへの純粋な回帰なのです。人間性以前の、あるいは、人間性を止揚した生命への意欲なのです。愛することは生きる情熱であり、愛されることは生きる動機なのです。必要とすることによって価値を与え、必要とされることによって価値を授かる。愛なくして生の意義はありません。そして私は、保志を愛し、子が生まれるかもしれない行為に及びました。なるほど、生まれてきた子が独立

してどのような主体性をもつことになるかを知りません。とすれば、取り返しのかめ過誤を犯す危険もありましよう。しかしまた性愛は、媒介のない崇高な飛躍でもありますまいか。それこそ、愛し合った一番の男女のみが果たしうる裁断、物質としての合目的性への瞬間的な意思の投下なのです。つまらぬ行動には決して許されるべきではない、過ちの可能性を孕んだ情動なのです。だが、飛躍は余分な条件によって阻害されるでしょう。なぜなら、あらゆる条件は、より密な、より汚れた連続性をもたらすものだからです。必要十分な条件は、ただ、生と愛だけにすぎません。しかし、勝直様との関係は保志にとって条件付きのものだった。少なくとも、勝直様が主君の座を維持している限り。そして、殿はご自身、その条件を有した者と見なされることを、また、保志には快樂の道具に甘んじることを要求された。だから、殿と保志の関係には飛躍する権利がありません。二人の人間関係が、崇高な行為のみに与えられる過誤の危険性に挑むことは、まったくの暴挙です」

大刀を傍に引き寄せて握り締め、紅潮した頬を引き攣らせながら、沙忠は傲然と言い放った。そしてすぐに刀を叩きつけた。

「なにゆえに私が死ななければならないのだ。特赦を受けることによって、まるで主君の生命と同化させられたみたいではないか。私たちは受けたのではない、単に押し付けられたのです。だから、解放されるはずだった。しかも、勝直様の行動は、私たち二人の関係をいささかも変質させなかった。それこそ、彼の愛の浅さ、というより単なる快樂の手段であることを証明するものです。真摯な愛が人の魂を揺り動かさない、などということがあるものか。殿に、いったいどれほどの切実な痛みがあったのでしょうか。ただ、上位者の自尊心が僭越にも、まったく関わり合いのない方面にまでのさばり出し、特赦という仮面を被った二重の偽善として現われたに過ぎません」

沙忠は肩を怒らせ、固く結んだ両拳を膝にぎりぎり押し付けた。

「それにしても、私は自分自身に腹が立つ。一顧にすら値しない卑俗な特赦に、呪うことも憤ることも憎むことも馬鹿々々しいほど問題にならぬ復讐に、この四年間というものの常時重苦しい責任を感じてきたこの私に、そして、筋違いではあつてもとにかく屈辱を与えてしまったこと、公的に認められた主君の側室を奪ったことに呵責するこの私に。むろん私は、勝直様の死を望んだことは一度もなかった。その状態のまま、私たちは自由であると思いたかった。とはいえ、彼がお亡くなりになったとの報に接した瞬間、私はそうした有形無形の干渉から解き放たれるかもしれぬと秘かに期待したのも事実です。が、何も変わりはない。再び実質的な干渉が始まり、追腹しないというだけで殿への欺瞞を冒しているような気がする。ただそれだけだ。そうなのです、死はけっして何ものをも解決できやしません。入れ替わり立ち替わり、形を変え品を代え、執拗に繰り返されては、ついには問題となくなるか忘却されるまで、現実を与えたとすれば、私たちの行為によってこうむった花田家の恥辱は贖われますまい。おそらく、この世界には、互いに等価なものなどないのです。だから、私が追腹しても殿が亡くなられた結果と同様、何も解決されるはずはありません」

侍女が燭灯の灯をつけに入ってきた。曇り空ではあるがまだ薄暗い程度で、ほんのりと燃え上がったその灯は、近い周辺の空間と物体とを僅かに黄色く染めるだけだった。

湿っぽい寒気である。疲れたらしく、目を潤ませるときき痙攣的に浅く呼吸しつつ、どうする当てもなさげに沙忠は口を鎖した。

救いを求めにきたのではなからう。何か言いたいのだ、誰に向かってでもいい、夢中に吐き出して、いまにも破れそうな、存在することにおける微視的な均衡を、どうにか保ち続けたいのだ。

それは夷茂にしても同じであった。築城と卯月家の存続との間に融和を図って挟まれた彼も、溢れ出そうな涙と叫び声を思い切り人前に晒したい衝動を幾度か覚えていた。しかし、感情と感受性を捨て去れないとすれば、涙腺を切ることだ、声帯を潰すことだ。

不意に夷茂は高い音を部屋中に響かせて、書見台に広げてあつた本を閉じた。

「花田家がいいたい、どんな解決を望んでいると考えるのか。そして、逆にお前が生き続けたとして、なんらかの解決が得られるのか。社会は単に、社会における〈家〉の位置付けを要求するだけだ。解決など必要ではない」

「いえ、私はただ勝直様個人と関わったにすぎません」

「〈家〉の存立なくしてお前はない。なぜなら、お前が滅びても〈家〉は生き続ける、が、〈家〉が滅亡すればお前も必ず葬り去られてしまうからだ。そこに〈家〉の優越がある。歴史は常に、個に優越する全を産み出すのだ。むろん、花田家に関しても言えることであり、それゆえに、勝直公の問題は花田家の事件となる。もはや、お前に残される社会的な余地はあるまい。あくまでも追腹を拒絶するならば、角桐家は断たれるだろうし、お前自身、遅かれ早かれ、勝近公のご沙汰によって死罪となるだろう」

「では、私に追腹しろとおっしゃるわけですね」

「そうは言わぬ。ただ、私には、既に決定された社会の機構と力とを承認する以外に術がないのだ。否、そうあるべきだと思う。もちろん私たちもまた、社会の改革にできるならば積極的に参加すべきではある。そうした散在する積極的な姿勢という意味の胎動がいつしか、統一された具体的な目標に向かってこそ、結集した運動となつて社会の变革が実現される。そして、新たな体制も同様に、畢竟私たちの関与しえぬところから私たちを支配する。こう考えると、けつよく常に時代時代の体制から逃れられなくなるのだ。逃れる、という表現を私は厭うまい。私は、全心全霊をもつて人間の営為を信じよう。仮に滅亡するとしても、それで十分だ。なぜなら、どう足掻いても人間は人間を超えることはできないからだ。待たねばならぬ、堪えねばならぬ。お前に欠けているのは、この忍耐力ではないか。呵責は、堪えぬ者に必ず襲いかかる。恋愛について野暮な無駄言を並べるのはよそう。だが、お前は〈家〉の問題を、そして身分的上位者に対する、少なくとも形式的な尊敬と忠誠とを回避した。繰り返すが、個人を支えるのは〈家〉であり、〈家〉を支えるのは社会構造だ。この構造について、私はあながち自由の束縛だとは思わない。人間の情動の、精神の、分散的な力の方向を見るがいい。それらと均衡を図り、一貫性を保っているのは、祖先、すなわち〈家〉からの力線によるなのだ。というのは、〈家〉は海と大地から、時間の先端にいるわれわれにまで、生きるための栄養を営々と送ってくれる大木だから。孤立感を抱く者は、それら力線を自ら意識的に断ち切った者どもの、身勝手な足掻きと後悔にすぎぬ。しかも、一個人のみが、断絶された全との関わり合いにおいて責任ある行動を採りうるか。私はそれほど私自身を信頼することはできない。信仰を持たぬ多くの者には、拠って立つ何らかの基盤が必要なのだ。それを、私は〈家〉に求める。あるいは、力線の方角に向かって跪拝するのは私だけなのか。なぜかは知らぬ。解釈が与えられたところで、どうなるわけでもあるまい。ただ、私は畏敬の念を抱くのだ。或る高さの、或る音色の音に続いて次の音が奏でられ、それが継続することによって、単なる空気の振動が美しい音楽として結晶するように、人間も継起的に子孫を生み落とし、継的に死に絶える、その繰り返しのことによって〈家〉を構築してゆく。連続性の驚異だ。ところで、音楽という芸術は始めと終わりがあから、個々の音の座標と意味がはっきり定まるのだが、人間の意識においては無限に終結しない系であるがゆえに、個々人の、否、各時代さえも、瞬間瞬間の位置づけも意義も永遠に決定されない。それが私たちの空しさの根源かも知れぬ。存在することにおいて、私たちは時間的空間的な広がりを占めている。そしてその拡がりの構造と、その中に事象する生は個的な質の差異もあるう。しかし、時間と空間の許容する生は、有限のみなのだ。半透膜の仕切りにくるまる私たち個体、それを社会的に不透性の境界として包み込む〈家〉——すべてが、茫漠と深まりゆく時空の中へ、その有限のままに溶け去ってしまう。だが、ここで眩暈してはならぬ。顧みれば、ややもすれば頼れようとする人間を暖かく受け容れてきたのは、血脈を生み出した海と大地ではなかったろうか。われわれの生命を支える食を育み、稠密な真実性をもつ海と大地ではなかったろうか。そして現在、その血脈を堅固な形式として確立したのが〈家〉なのだ。お前自身、それを形作つたではないか、お前の讃美する崇高な飛躍によって。私は恋愛を貶めようとは毛頭考えない。否、〈家〉の存続のための合目的な行為ではなく、結果的に〈家〉を形成する恋愛こそ、同時に家門の尊厳と権威をもたらすものだ。恋愛によって幸福な家庭を

築けるならば喜ばしい……家庭が〈家〉の形式と調和するならば喜ばしい。だが沙忠、人倫を犯し、〈家〉を没却した罪がお前の全身にまわりついている。単に血脈を保つことは、崇高という美名に甘えることだ。形式を尊重しなければならぬ、家禄を子孫に継承させねばならぬ」

湿度の高い冷えた奥座敷の中、奥茂の言葉は、艶もなく陰に沈んで消える。ようやく燭灯の明りも顕著に浮び上がっていた。沙忠に語りかけながらも、彼は時折、吉景を相手取っているような錯覚に陥るのであったが、しかし、誰を得心させるのでもなく、けっきょく己自身に決意を促しているのだった。

家長制はなるほど個性の滅却と、欺瞞と妥協を余儀なくさせる。とはいえ、それら虚偽を払拭し去って人間が生きうるとするのは僭越ではないのか。明確なのは、それ自身のみだ。人間の不明確な性の数々、それが最小限の明哲さを要求し、日本人は長い年月をかけて〈家〉という形式を捻出した。そこに意味がある。無理を冒した。そこに力がある。人間は、具体性のみと関わるにはあまりにも抽象的に過ぎる。が他方、無限の場で生きるにはあまりにも具象的に過ぎる。人間の可能性をそのままに、境界のない時間と空間の中へ放り込んだらどうするか。必ず有限の場を形作るにちがいないのだ。無限に接して身をすくめないとき、或る程度の濃度をもつ彼の人間性は半透膜から限りなく沁み出し、徐々に稀薄化する。無思想とはこのことだ。あまりにも広がり過ぎて、ついには無に等しくなる自己を行動させようとしたところで不可能ではないか。立ち惑い、叫喚し、ただただ喧騒が巻き起こる。懷疑、自由。——当然のことだ。しかし、いささかの認証もなく懷疑しうるか、いささかの定位もなく自由でありうるか。認証するところに責任がある、定位を定めるところに範疇がある。それが〈家〉の権威と枠なのだ。日本民族の培った、そして日本民族の歴史の方向を決定づけた一つの伝統的な要素なのだ。倫理こそ思想の基盤でなければならぬ。日本には崇高な倫理観に裏付けられた宗教がない。だが、無思想であってはならぬ、人間性を溶融させてはならぬ。それゆえに、〈家〉という倫理は必要なのだ。あらゆる自由思想も、倫理への対峙概念として抽出されたものではないか。

このとき、吉景の明らかな映像が奥茂の脳裡を挟り取り、瞬間奥茂は、無重力の感覚を覚えつつ深い陥穽の中へ落ち込んでいった。堰が切れたように、存在の片隈から焦躁が流れ出して鬱滞し、同時に、額の傷も重く疼きはじめた。「そんな馬鹿な。いったい家名にどんな尊厳があるのか、家禄にどんな秘密が籠められているのか。私には理解できません」

沙忠はいらだたしげに言った。

「生の形式だ。そして、生が最高位の尊厳であるとすれば、その形式は最高位の必要性なのだ。しかも、必要は尊厳に優越しなければならぬ。なぜなら、必要こそ尊厳の条件なのだから。だが、〈家〉という形式が生の連綿性を維持するための手段でもある限り、個体の生を断ち切る場合があるにせよ、必要と尊厳は決して矛盾関係に陥ることはない」

「やはり叔父上は死ぬというのだ。しかし私は死にたくない。まして自害などまっぴらです」

「自発的な死、追腹という形にする勝近公の情、^{なさけ}などとは言うまい。お前は処刑されるのだ。それに対してお前は抗議する。しかし、死罪へ追いやられる者は、既に生の間を全の世界において社会に譲り渡しているのだ。保志と通じたとき、お前も彼女も社会における生の間を放棄した。即ち、敗北は決定づけられていたのだ。肉体の死は、単なる手続きに過ぎない」

「手続きですって?!」と、沙忠は怒りを露わにして問い返した、「叔父上は生の形式を強調なさる。なるほど、形式には手続きが必要でしょう。しかし、人間の生はもはや形式の中に収まりきれぬほど肥大化し、複雑化しているので。叔父上はそれを看過なさっています。しかも、生への言い知れぬ意欲を無視された」

沙忠は大刀を握り取って立ち上がった。そして、正面を向いたまま微動だにしない奥茂を、軽蔑的な視線で睥睨した。

「最後の問題に解答が与えられることは、恐ろしいものだろう」

「けつこうです。そんな解答を突きつけられたら、私は生に失望するでしょう。が、とにかく私は生きる。忘恩の輩、不忠者と非難され、臆病者と呼ばれても私は追腹しない」

「お前は、生と生命とを混同して、生命を基準に置いている。それほど生きたいか、身売りや物乞いをしてまでも。個体の生命に、それらを代償とする価値があるか、あるいは、それらの行為が命と等価なのか。生を冒瀆するのはよすがいい」

「いやです」と沙忠は激しく拒絶して、敵視するような一瞥を再び奥茂に投げやった。そして、暇乞いもせず、足音を蹴立てながら廊下の闇の中へ消え去った。

奥茂は、沙忠の脛の形が残っている座蒲団を見詰めていた。

《家》の存続のための個体の死が、犠牲であつてはならぬはずだ。沙忠には残酷すぎたか。城築の計画に勇む兄の姿も、生々しく髣髴と網膜に浮かぶ。

とりとめなく思い巡らす奥茂の耳の奥に、沙忠の踏み鳴らした足音がいつまでも残った。

しかし、奥茂の内奥はしだいに非情な蒼さへ静まり返っていった。沙忠の足音が脳内から締め出され、外部からの騒音も張り詰めた彼の耳殻が完全に遮断した。そして、冴え渡るその内面の空洞に、微かな囁き声が凄惨に湧き起こった。死ね、死ね、死ね。……この三つの言葉がそれぞれ音色を変えつつ一周期を形成し、幾度も幾度も木霊する。いつしかそれらは重なり合い、巨大な叫喚となつて奥茂の全存在を揺るがしはじめていた。

長く固化したままだった。やがて、その内部の強い波動に共振するように立ち上がると、奥茂は巻紙と筆を取り出した。そして、事もなげに白い紙に墨を染めた。

冴乃も彼も無事に江戸に落ち着いたこと。吉景からあずかった工事の申請書は、大目附田原九郎右衛門に申請したこと。まだ検討は始められていないが、審議を有利に導く必要から、幕府の重職に種々の裏面工作をしていること。いちおう受理された現在、許可の可能性もあること。そして改めて、城築の準備の秘密維持と、気長に待つようにと書き添えた。

吉景への初めての手紙である。無表情に筆を置いてひねり封に閉じ、ゆっくりと文箱に入れた。

ほっと安堵したとき不意に、奥茂は背筋を這い回っている悪寒に気がついた。無意識に振り返ると、さきほど沙忠に荒々しく閉められた襖が暗い隙間を開いている。奥茂は一人あわてて、几帳面にその襖障子の位置を立て直した。

三

侍女が奥茂の来訪を告げた。瞬間、冴乃は絶望的な表情で振り向いた。やや少なめではあるが、艶のあるしなやかな垂髪が大きく波打ち、女らしさを湛える頬の肌がたちまち強張った。

吉景の構想を聞いてからというもの冴乃は、精神の深奥で理性と感性が夫への協力と反対とに分断され、心は宙づり状態のまま、破滅的な事態がいつかやってくるにちがいないという予感に否応なく脅やかされ続けていた。吉景によつて惹起され、押し寄せてくる波のひと寄せひと寄せが、冴乃の感覚受容体を直接、不気味に舐めていたのだ。特に、奥茂の出府と共に具体的な着手が始まると、吉景の傍を離れていることもあつて、ことさらそんな不安を強く抱かないではいられなかったのである。陸地に這い上がって卯月家を飲み込もうとする津波を待つような、諦めとも覚悟ともつかぬ重苦しい気持ちで日々を過ごしてきた。

さらに、奥茂が自分を伴つて出府したのはなにかの思惑あつてのことかという疑念を深めていた折も折、これまでまったく音沙汰のなかった奥茂が訪れたという。臃げに明滅していた予兆が突然、現実となつて彼女の前に立ち

現われたのであった。

どうせ避けることはできない。

冴乃は緊張しながらも即座に、こちらへお通しなさい、と侍女に命じた。

浅くなった息づかいを整える暇もなかった。侍女が下がったと思うや否や、奥茂の衣摺きぬずれが冴乃の耳に届き、足音が胸の奥に鈍い震動を加えはじめた。室内が暗く湿っぽい空気に満たされ、彼女は逃げ出したいほどの圧迫感を覚えた。

いつ襖が開かれたのか、既に奥茂の平伏した姿が見えた。冴乃を見上げる彼の視線は冷やかだった。それも、人間の冷めたさではない。業苦さいなに苛まれて、かつてあった生気を突き抜けてしまった者のふてぶてしい、それでいて悲しみを宿した無機質な眼球から放たれる視線である。

そんな奥茂をしばらく凝視していた冴乃は、急に我にかえると頬を打たれたように顔を背けた。ていねいな儀礼上の挨拶が、奥茂の血の気のない口から洩れている。乾いた声だ。遠くの方から聞こえてくるようでもあった、がまた、耳元で騒々しく反響するようでもあった。無意識のうちに聞き流して、冴乃は、べつに奥茂を忌避する気持ちもなかったのだが、否、むしろ城築の件について並々ならぬ尽力を示す誠意まことに、労いの言葉でも掛けなかったのだが、そのときは返事もできずにおし黙っていた。

麻織の茶色い袴かづもを手際よく引き寄せて、奥茂は冴乃に対座した。冴乃が侍女を皆下がらせた。

僅かに間を置いた後、奥茂は顔筋がんきんを消石灰で固めたような表情で口を切った。

「私の子をもうけていただきたく、お願いに参上いたしました」

華麗な打掛姿が一瞬弾かれた。

なんと言ったのか……冴乃は茫然となった。唇も微かに開いたまま、碧い瞳が奥茂をじっと見詰める。波濤は思いもよらぬ方角からのしかぶさってきたのだ。もちろん、どこいつて方向を予想していたわけではない。がしかし、その奥茂の言葉はどうてい考えも及ばぬことであつたうえに、現実の発話はつわとなって打ち叩かれると、予感はおるか、あらゆる抵抗の術も役にはたたず、冴乃はただ眩暈げんうんするばかりであつた。ときならぬ豪雨と轟き渡る霹靂かみときの直中、蹲うずくまってその鎮まりしずまりを待つ間のような意識の空白に陥る。

数瞬後、奥茂の言葉が冴乃の脳内に再生され、混乱した現実と幻想が狂おしく入り乱れた。

子供を産む——夫の弟の、目の前に坐っている男の——

小さな肩を竦すくめて、冴乃はまじまじと奥茂を見た。相手は、たった今、あれほど反現実的な言葉を述べたとは思えぬくらい無表情だ。そんな、据えられて動かない眼よりも、奥茂の着ている共衿に白く浮かび上がる無機物の小紋が、冴乃にはかえって生々しい視線を注いでいるように感じられる。

視角の隈でちらつくその小紋、つまり卯月家の紋所（釘抜）にはつきり気付くと、冴乃はようやく判断力を取り戻した。と同時に、彼女は、卯月家が危機に直面していることを、あらためて想起しなければならなかった。

奥茂はむろん、わたしの肉を求めるのではなく、卯月家存続という大義名分をかかげているに違いない。しかし、それならそれで、とうてい不可能な話ではあるが、なぜ順序立てて話をしないのか。なぜ、もつと人間味のある物言いをしないのか。大義名分に威を借りて、いかにも当然だとも申し立てそうな権幕ではないか。無礼な。兄嫁と義弟との関係にある近しい間柄とはいえ、ぶしつけにも、夫にさえ開かれたことのない女に対して、さらにいやしくも主君の妻に対して、自分の子を産めと迫る。

許し難い侮蔑であつた。冴乃はすぐに、激しい怒りに燃えはじめた。いったい、子を産む産まぬは別として、貞操を犯されることが女にとってどれほどの意味をもっているのか、この男にはわからないのか。

相変わらず冷然と構える奥茂への感情は、手ひどい凌辱を加えた男に対する憎しみへと変わっていった。

「無礼な。お下りなさい」

厳しく睨み返して、冴乃は鋭く言った。しかし、奥茂は微動だにしない。突然、冴乃は、正座したまま息絶えている人間を相手にしているような戦慄を覚えた。否、それ以上に、奥茂の肉体が現実から遊離してむくむくと膨脹し、冴乃の肉体を溶かし込んでしまうような恐怖に呪縛された。

「お下がりのさい」と再び命じた。が、その声にはもはや力はなく、冴乃は喘ぎながらきらびやかな打掛に顔を埋めるのだった。

誰を呼び招くわけにもいかない。まして、吉景に知らせることなど、不可能であるという以上に、もつてのほかである。心細かった。女一人で堪えることは至難であつた。しかも、奥茂はそうした状況を見越して、騙し打ちにも似た拳に出たのだ。

冴乃は、また狂おしい憎悪に駆り立てられた。そして、いま一度恐怖を振り切つて、「下がれつ」と拒絶した。

「義姉上……」とかすれ声で言うなり、義弟は一歩進み寄つた。

「ならぬ。下がれ、下がれ」

冴乃は驚いて身を退きながら、必死の面持ちで懐剣に小さな手まで掛けている。

「いえ、義姉上に殺されようとも、義姉上を手籠めにする形になろうとも、私は計画を変更しないつもりです」

決然とした語調である。女の限界だった。冴乃は、肉体の張りを失つて撓むように頹れた。

呵責はないか。後悔はないか——尖锐な疼痛が奥茂の額を突き抜けた。もはや無駄であるとはわかつている。しかし、罪意識から解放されるためにも奥茂は絶望しなければならなかつたはずだ、人間的な期待を断つことによって、目的への道を、物質的な因果関係の反応のように、手続きとして、正に単なる必然として選択させられなければならなかつたはずだ。

吉景と冴乃との生活について、何故もつと話し合わなかつたのか。選択しえた手段として、それは現在もなお、奥茂の意識野にちらつている。二人の間に子供を儲けるように説得することが、築城の決意を阻止しえなかつたと同じ程度に、どれほど困難であるにしろ、可能性の観点からは等値なのだ。この手段が、ともすれば、冴乃の姿に象徴されがちだった。

斥力を出し尽くした後の空虚な表情で俯いた女。僅かに黒髪を乱した、白く美しい顔。鮮やかな赤色の縮緬に施された金銀の縫箔も、布地の細波も眩しい。

だが、想い起こせば、吉景の意思をはつきりと質してみようかとは考えていた。鉄扇に傷つけられる直前まで、申請書を提出する条件として世継の話をもちかけるつもりだつたはずだ。否、その心積りであの座に出向いたではないか。兄に加えられた屈辱からする失念にすぎない。そうだ、あのとき忍辱への集中がなかつたら、いかにそれを為しえたか。——疑いは晴れた。吉景から投げ与えられた絶望である。今からでは遅い。結果のみを問題とすることだ。

驚きと恐怖の縁へ追い詰められたかに見える冴乃に向かって、奥茂はようやく説明を始めた。

「最初にお断わりしておかねばなりません。それは、性を私たちの生活の中の最も取るに足りぬものとして片限で扱おう、ということです。おそらく、驚愕や不審や、あるいは、露骨で失礼ではありますが、羞恥心とか貞操観念とか、男女間の政治性愛や罪悪感とか、そういった意識が、今の義姉上を完全に覆い尽くしているでしょう。しかし、敢えてそれらを片限に押し遣つていただきたい。むろん、私の滑稽さや馬鹿さ加減は承知しています。ありつたけの力で、そんな私を嘲笑なさつてけっこうです。軽蔑してください、無視してください。否、ぜひとも必要なのです。そして、どうか義姉上、性に関わるあなたの高貴さを、私情を、〈お家〉に関して託していただきたい」

冴乃は黙っている。微かに弾む呼吸を抑えながら、彼女自身も巻き込まれているという意識よりは、事態の成行きを静観する立場にあるようだった。

「義姉上もむろんのことではありませんが、私は私なりの考えで〈お家〉の格式を尊重いたします。ですから私は、卯月家にいささかの傷をも負わせたくありません。歴史は、それを背負つて立つ者に大きな責任を要求します。そし

て、歴史の一部、敢えて一部と申しますが、である過去への責任を果たすのは、歴史全体の責任を果たすのが永遠に未決着の未来をも組み込んだ全人類であるのに対し、その先端に立つ私たちにほかなりません。その要求の根底が、継続なのです、連綿と流れる生命の息吹なのです。〈お家〉も、血脈という一つの明瞭な系の歴史であるとすれば、それゆえに堅持すべき価値を有するわけですが、私たちにとつての最大の命題は、卯月家の存続を図ることでありましょう。そして現在、兄上の、直接には嗣子ししをもうけないという方針によって、間接には築城の件によって、その維持が困難になっているのです。砕けた水瓶はその使命に堪えぬばかりか、一切の内容と形式を喪失します。それが家名の断絶です。多くの先人たちが受け継ぎ受け継ぎ、丹精こめて作りつづけようとしている水瓶を、祖先が営々として築き上げてきた格式を、無惨にも、僭越けんえつにも、粉々に打ち砕き捨て去ろうとしているのです。私は、断じてそれを看過することはできません。次代に引き継ぐ義務があります。なるほど、今私の申していることが希望どおり実現された場合、永遠に完成されぬ水瓶の作製過程にあつて大きなひびを入れることになりましょう。しかし、それは補修すれば使用に堪えます。純粹な美を損ねはしますが、携わった人々の存在を証左すると共に、祖先の営為をあくまでも尊重し、作製行程における家名の維持、という目的にはかかっています。すなわち、義姉上あねうえと私の間に男児が生まれた場合、兄上と義姉上あねうえとの子を家嫡かちやくとして届け出るわけです。と申しますのも、乱れた形式が内容を統一するはずはない、と私は堅く信じているからです。格式を失った〈家〉は、また、血脈関係も乱れます。ごらんさい、卯月家の系譜は、遠く去つた傍系親族はいざ知らず、みごとに直系子孫、それも順当に長男の継承で貫かれているではありませんか。整然とした形式です。正に様式の美なのです。もちろん積み重なつた蓋を引つ繰り返せば少なからぬ汚点も暴かれるでしょうし、逆にかんりの好運に恵まれたこともわかるでしょうが、おのおのの世代が過去の位置を受けとめ、さらに完成度の高い格式にすべく努力してきた結果であることは間違いありません」

聞いているのかいないのか、やや眉根を寄せて、冴乃はあらぬ方かたを眺めたままである。吉景の好みから作眉つくりまゆにせず、細く彎曲する自然の明らかな長娥眉がび。稚子のように生き生きと反り返つた睫まつげ、羞はじらいを湛たえて深く沈む瞳。そして、目尻にさえ小皺一つ見えない真珠よりも艶のある柔らかな頬、未だ僅かに堅い、顎の丸みと項うなじのしなやかさ。――いささかも肉体的な疲労を経っていない、完成されているが、しかも未開拓の生硬な弾力を残す冴乃に、興は再びしばらくの沈黙を強いられねばならなかった。

人間にはたしかに、責任から乖離した側面がある。この女性の美しさも、惜情を秘めつつ保たれるべきものではないだろうか。必要からする美の破壊は、常に空しい所業である。

「義姉上あねうえが承知してくださいれば、築城問題に関して全面的に協力します。ここまでお話ししたうえで申し上げるのは聞き直りとお受け止めになられるかもしれませんが、拒絶なされば、私はいかなる協力も妨害もいたしません」

興茂の口調は再び抑揚も声色こゐいろも失つた。冴乃は微かに表情を動かした。

「興茂殿が妻を娶むとつて、子をもうければいいではありませんか」

「それはできません」

「なぜです？」

「卯月家の連綿と続いた長男による家督相続が跡絶えるおそれがあるからです。また、私の子が藩主となることは、まるで私が兄上を差し置いて藩主となるような気がして、とてもできません。もちろん、可能性というだけの話ですが。可能性といえ、私が男子をもうけることによって跡目争いなどの火種となるかもしれない可能性を、私は針の先ほども発生させたくないのです」

明確な理由を聞いて、冴乃は唇を噛みしめるのみであった。

「条件をつけることが、あるいは義姉上あねうえのご機嫌を損ねたかも知れません。だが、切羽詰まつた状況にあることをどうかご斟酌しんしやくください。先刻せんこく江戸城で、五日前に申請書をお渡しした大目附、田原九郎右衛門殿にお会いしたのですが、私と擦れ違いざま、露骨に渋面を見せて顔を背けられました。やはり、単に却下されるだけですむかどうか……

これまでも幾人かの領主が新規に築城しようともくろんで、徹底的に弾圧された例もあることです。特に、これといった由緒もなく、徳川家に一人の縁故者をもたぬ群小領主の我が卯月家です、申請書提出自体を理由にした家名断絶くらいは容易いことでしょう。まして世継がない現在、兄上はじめ重臣たちの切腹というような厳しい処罰を受けるやもしれません。ですから、少なくとも卯月家の長子相続の血脈だけは、せめて形式だけでも保ちうる状態にもつていって、築城問題を円満に解決すべく努力したいと思います。兄上が將軍に対して忠実であるか否かを問わず、私たちは兄上の妻あるいは臣下として命令に従わなければなりませんから。と同時に、一方では卯月家の構成員としての義務も怠ってはなりません。否、私の立場は、明らかに、後者を優先させる位置にあります。なぜなら、もし兄上が卯月家を中心として行動するなら、私たちはこうして二律背反に苦しむ必要はなかったはずですし、また、兄の当主としての権限も、お家の存続に関してのみ及ぼされるべきだからです」

淀みなく話す奥茂の弁舌に、冴乃は反論する気力も失せてしまいそうになった。実際、吉景との間に子供をもうけようがないのである。これまでただ何となく夫に引き摺られてきたのであったが、こうした事態に追い込まれてみると、やはり、卯月家内部のみならず、彼女の生家、曾田間家との関係をも揺るがすような重大事であることに気付かなければならなかった。

「もちろん、子供の出生を、しかも男児の出生をどれほど期待していいか、私たちの与り知らぬところです。結果に責任を持ってないことが非常に心苦しいのですが、私は身命を賭して嫡男の出生を祈ります。想定したくはありませんが、もし女兒が生まれたら婿を取るしかありません。また、兄上がどう反応なさるか、彼と私たちの関係はどう変化するか、これについても無責任ながら私は予測できません。……とはいえ、卯月家当主としての義務を遂行しない者が、積極的に贖い^{あがな}いうるはずもないのです。《お家》の枠外に飛び出して吉景個人の存在価値を主張しようとする兄のこと、その点は理解してくれるでしょう。そして、残された唯一の贖いであるべき恥辱への忍耐を能くしてもらわねばなりません。このとき、私たちの交わりには、一片の情感をも差し挟まぬことです。それが私たちにできるせめてものの、糊塗する罪の祖先への償いであり、不義を犯す罪の兄上への謝意でもあります」

奥茂は、話を進めるにつれて、だんだん生氣を失っていった。感情の表出がなく、ただ義務的に、機械的に、彼の要求の正当化のために口を動かしているだけだった。聞き手の冴乃も、美しい姿をべったり貼り付けられたように、何の感情も示さない。無味だった。味わう要素は一かけらも見当たらず。飲み込むか吐き出すか、その選択のみである。

奥茂も、語るべきことは語り尽くしたようである。まさか即答を待っているのではあるまい。が、彼はぼんやりと坐ったまま、いつまでも退出する気配を見せなかった。何を考えるでもなく、弛緩した堅苦しい気まずさの中で、二人は底知れぬ暗鬱の深みへずり込むばかりだった。

長い無言を横たえてから、そんな瘴氣^{しやうき}のような雰囲気^{ふんいき}に鈍く刺戟されて、冴乃が力なく呟いた。

「今日はこのままお引き取りください」

奥茂は、躊躇するでもなく、かといって積極的に彼女の決意を促す言葉を述べるでもなく、緩慢に退出の辞宜をした。

奥茂の退出と入れ替わりに、侍女が二人、音もたてずに入ってきた。まるで白い影のようだ。ただちに傍^{かたわら}でまめまめしくかしずきはじめた彼女らをはっきりと現実の中に受けとめながら、しかもなお冴乃は、それが今の彼女に関わりのない、時間的な位置を持たぬ動きとしか思えなかった。そして、侍女には目もくれず、長い間隙^{かんげき}を置いて、時折ゆつくりとまばたきするばかりである。あまりにも近すぎた奥茂の声音を遠くへ押しやって、冴乃は反芻しつつつと考え込んでいた。

問題となっているのは、彼女の子宮であった。この問題点を契機として無意識のうちに行なわれた内面の変容と共に、冴乃の存在は散漫に漂い散った状態から、再び肉体を核に凝縮しはじめた。羞恥や不安を感じるよりも、彼女は、

ある新しい在り方を眼前にして、未知の方向へ繊細な触手を果敢にも伸ばそうとする。引き寄せられるのか、追い立てられるのか、あるいは自ら進むのかわからなかった。

中天で燃えさかる真夏の日輪を直接見上げたような意識状態ながらも、朦朧と立ち上がって冴乃は襖に歩み寄った。そして、引き手に手を掛けようとした。と、急に氷づけになったように震えだした。既に待っているであろう人へ、声を掛けなければならない。が、それもできなかった。とはいえ、その部屋に入ることは避けられぬ義務なのだ。冴乃は躊躇いと畏れを抱きつつも、切り開くように襖を開けて、深く頭を下げた。

「入れ」

輪郭のはっきりした若く男らしい声が響いた。一瞬、冴乃はいっそう強張った。しかし、後退への力ではなく、見知らぬ世界へ移りゆく方位への抵抗を覚えたのだ。冴乃はぎこちなく敷居を越えた。和らいだ四月の空気は、夜の奥の間にも漂っていた。そして襖を閉め、ゆっくりと顔を上げた。

男は、のべられた床の上に普段着のままあぐらをかき、蒼白な顔に少しばかり歪んだ唇に毒々しい笑みを湛え、青白い眼差しで冴乃を凝視していた。冴乃は、一度上げた目をはっと伏せた。意識へ染みが広がるような濃度の変化に、身動きもできなくなった。

「今私が抱き締めようとすれば、冴乃はそれを当然のことにように受け容れるだろう」

何の前置きもない刺々しい物言だった。

「なにが当然なのか知らぬが、初夜でございます、と仰々しく触れ回って、肉体のためのみの宴のように装いをこらし、お定まりのしつらえられた寢床へしずしずと入ってくる。さて、夫婦の契りを結びましょう、と、戦きか不安か、秘かな期待か惜別の情か羞恥か、喜びか悲しみか、そんな混沌とした思いを破裂するほど胸の中にしまい込んで、それでも臆面もなく新郎の前に坐る。汚らしい。だいいち初夜など、衆目の眼前で過ごすのと同じことではないか。耳目をそば立てて、淫靡にようすを窺う下司どもの淫らかな笑いが見える。もともと、社会的承認という代物が馴れ合

いの産物なのだ」

苛立たしげに言い終わると、吉景はやにわに立ち上がって屏風を蹴倒し、枕元の水差しを驚掴みにして中の水を襖障子に投げ捨てた。大鷲の羽ばたきのような音と共に、豪華な襖絵はきたならしく濡れた。

「お前と交わることはしないし、子供も儲けない。戻るなら今のうちだ」

嫋やかな体をひりひりと縮ませて、あまりのことに目を見開いたまま呆然と見つめている冴乃を無造作に一瞥し、吉景は大きく寢床の上に寝ころがった。

冴乃は、仰向けになるなり口を噤んでしまった吉景から放射される波動に強烈なひずみを看取し、吉景の描像を、人格のいたるところに衝動性を隠し持った不可知な人間として捉えなおさなければならなかった。成熟への過渡に秘める微妙な精神の濃淡と波状的な不安定さとを、そうした暗い重層的な隠蔽の中にも、一人寢床を占有している吉景は表出している。

吉景の言わんとすることを把握できないわけではなかった。しかし、すぐに理性で整理できるほど単純な話ではない。それまで幾度も会話を交わし、双方の当主も合意した婚姻なのである。なぜ今になって、子どもを儲けないために交わりそのものを拒否するなどと言いだしたのか、とうてい理解し難い。しかも、未だ嘗てこんな激しい性格は見せたことがない。

冴乃の表情は、茫然自失から戸惑いへ、怒りから屈辱へ、そして裏切られた口惜しさへと、さまざまに変化していた。さらには実家、曾田間家に与えられた侮辱を感じるに至ったが、ついには吉景から肉体を求められぬ悲しみが、その意味における女の自尊心の痛みが加わり、冴乃の体は重圧に堪えかねるように小刻みに震えながら、吉景を射るようにつめはじめた。

吉景は冴乃に応えることなく、天井を見上げたまま荒々しく呼吸するのみだ。染みのついた襖と、横倒しになって

いる破れた屏風とが燭灯の明りに浮かんで、部屋全体が崩れるほどに乱れた情景をつくり出す。こうして、そこに存在するそれぞれは、あるべき姿でもなくあるべき位置にもない空間との関係における無意味さと、あるべき行動を採らずにただ周期的な韻律を奏でることによる時間の無視とを、単調に持続していた。

やがて冴乃の瞳から、まるで人形の目からのように涙が溢れだした。一筋はなまめかしい唇へ、また一筋は愛くるしい顎から喉元へと滴り、静かな奥の間に微かな嗚咽が続くばかりとなった。

ふと、初めて忍び泣きに気付いたかのように、吉景は冴乃へ視線を回した。そして起き上がり、過ぎた言動を後悔するかのように神妙な表情で屏風を立て直し、水差を元の位置に戻すと冴乃の方へ歩み寄った。そして、ためらいがちに彼女のほっそりとした手を握り締めて、「すまなかった」と憂えるように小声で詫言った。

冴乃は意表をつかれて泣くことを忘れ、懐疑的ながらもひたむきな眼差で吉景を見返した。

「聞いてほしい」

冴乃は吉景を網膜の中央に固定した。

「私は、冴乃との肉の交わりを、母胎への憧憬として葬りたい」

吉景は両手で冴乃の肩をはさんで、黒い瞳を覗き込んだ。

「具象は信じるも信じないも、問題とならぬ。具象に懷疑を差し挟む者は、自己欺瞞を冒していると言わねばなるまい。そして、具象がそれ自身において完結しているとすれば、また、それ自身においてはいかなる意味も持たぬ。すなわち、私たちとの関連をとらえることによつてのみ、具象は世界の中に特定の位置を占める。したがって、具象は意識による対象化によつてのみ、それに附される有意義性と私たちの生との間を媒介する。同時に、媒介でしかありえない。そして肉交もあくまでも具体性であり、それゆえ媒介的な存在の仕方である、と私は考えるのだ。媒介とは、現実的な形相を具えてさえいればいくらでも代替されうる。この延長線上からすれば、同衾する相手はなにも冴乃でなくてもよい。これが私には堪えられないのだ。というのは、冴乃を媒介者へと貶めることはむろんだが、同様に私自身も、少なくとも肉体に関する限り具象的な在り方、すなわち私の媒介として存在されるからだ。それゆえ私は、肉体そのものではなく、私と冴乃の抱擁を結果するはずの動機、人間的な愛を信じたのだ。もちろん、冴乃に対する愛が、冴乃との抱擁という具象的な形式をもたらず密接な因果関係を形成することは認めよう。否、おそらく、愛し合う男女がその愛から相手の肉体を求めることにおけるほど、偽りのない因果性をもつ真実な人間の在り方はほかにあるまい。だが、その行為は逆方向には何ものをも証明しえないのだ。そこに、具象の媒介的な在り方の不確実さが露わになり、因果関係の方向の重要性が理解される。すなわち、行為として具象化されるとき、既にその行為は単なる行為という具体性に変質し、始源的な意味を喪失していると思うのだ。それは、とりもなおさず、愛を冒瀆し、愛への不信をもたらすことではあるまいか」

語り募るにつれて、吉景の頬はわずかに紅潮してきた。まだうつすらと涙を湛えた反発的な眼差しの冴乃と吉景とは、深く見詰め合った。と、急に吉景は冴乃をかき抱いた。

「私も、冴乃の肉体の奥深く入り込みたい、眩暈く快樂の美酒に酔いたい」

吉景は、冴乃のなめらかな頬に顔を擦り寄せ、垂髪を撫でつつ、右手でしっかりと、細くくびれた彼女の腰部を引き寄せた。薄い着物地を通して、冴乃の初々しい肌の感触が吉景の心に沁みわたり、襟足のあたりから女性の甘い匂いが快く漂う。そして、ふつくと圧しつけて来る乳房の弾力。

——吉景は誘われるように陶然となつていった。白い項に唇を押し当て、ぴたりと合わされた衿元を僅かに開く。吉景の肉体はしだいにずり落ちて、白い肌のくすぐりと乳の香りの中、若やいだ胸乳に顔を埋める。左手は冴乃の張りのある太腿の奥へ向かう……

吉景は弾かれたように飛びのいた。

「因果関係があるなら、それを断ち切ることもできるはずだ。その関係が明瞭であればあるほど、それは容易なはず

だ。こうして媒介を抹殺することにより、互いに対してもつ私たち二人の意味と、その意味への志向とが独立し、より純粹な愛となるのだ」

吉景はいつの間にか正座をし、膝頭を力いっぱい握り締めながら続けた。十五歳の冴乃は、聞いたこともない考えに接して驚いていた。すぐには、感想を語る言葉も見つからない。

「生物としての機能面から見ると、男の肉体は充填装置を有する構造であるゆえに豊饒の否定性であり、女体は充填されるべきそれであるから欠如の否定性といえるだろう。そして互いに交わった結果、女体は逆に妊娠という豊饒を獲得し、男体は溢流させた後の欠如となる。こうした移行の過渡的状态、すなわち、豊饒から欠如へ、欠如から豊饒へ至る契機が男女の肉交であり、このとき否定性はさらに否定されて、少なくとも性的な平衡状態に落ち着く。とすれば、ここに肉交は愛から遊離した別の在り方となるだろう。というのは、私たちの脳活動が破綻をきたさない限りにおいて、それは世界との関連に定常的な開放系としての在り方を維持している。したがって愛もまた定常状態にある。これに反し肉体の結合は根本的に時間的でありながら、しかも満たされた状態をある程度持続することによって時間から放擲され、時間内容の変異からする世界との関連の変化に対処しえない、閉鎖系的な平衡状態の在り方だ。それゆえ私は肉交を拒絶しなければならぬ。なぜなら、この二つの在り方は本質的に矛盾するものであり、そして、結果はなくとも原因は厳存するからだ」

燭灯の光では判然としないほどに未だ髭は薄く、頭髮の艶といい、月代に剃った頭の滑らかな青さといい、いまや青年らしい潔癖さとひたむきな誠実味とを感じさせる吉景は、掛け襟を寄せながら聞き入り、徐々に興味を示しはじめたかのように見える冴乃を説得しようと熱心に語るのだった。

「愛は表現手段を持つてはならぬ。考えてみるがいい。美の追究事象である芸術において、もし意味・内容が同じであるとすれば、音楽や絵画などは、単に伝達方法の相違として片づけられてしまう。だが、そうではなく、意味・内容が要求する伝達方法つまり形式としてそれぞれの分野があるからこそ、おのおの独自の存在価値があるのだ。意味・内容が形式を決定し、形式が意味・内容を本質たらしめる。芸術におけるさまざまな形式が伝達方法の相違にすぎないとすれば、音や色彩や言語などの表現媒体は、単なる手段へとその地位を下げるからだ。私は、愛もまた芸術であるべきだと思う。なぜなら、芸術こそ最も純粹な人間性の発露だと信じるからだ。というのは、経済や科学、政治などは、生物的、日常的、社会的な要求に応えるものであり、これは種として社会を構成する生物の必然的営為だから。ところが芸術は、これら生物として当然のいとなみ、いわば生命維持活動に関して無力である。芸術作品の創作あるいは美の追究という営為が、人々の心に生き死にを越えた大きな影響を及ぼすこともありうるという蓋然性が芸術への動機になっているとはいえ、人間の生命にとって不可欠ではない知的活動に心血を注ぐ人間という生きものは、なんと健気であろうか。その事實は、芸術が人間の根源的な欲求であることを逆照射している。したがって私は、私たち二人の関係において独自の愛を築き、愛に関する限り表現自体も私たちの愛からする形式であるように努めたい。これは別にむずかしいことではあるまい。個々人がおのおの異なり、かつ異なった時代と環境に生きているのだから、何気なく芸術化できるはずだ。そう、何気なく命を燃焼させることこそ日常生活の芸術化であり、人間の至高の目的なのだ。しかし、それを困難にする要因が生殖だということを忘れてはならぬ。さらに、これまで挙げた理由のほかにはいま一つある。《家》の継承だ。これこそ、明らかに合目的的行為であり、直接に愛を手段と化す行為にはかならない。この点、私は冴乃にもご両親にも深く謝罪せねばならぬ。身ごもらない冴乃に対してはやがて、藩内をはじめ方々から陰に陽に非難が巻き起こるであろう。勝手を言わせてもらえるのなら、私が全身全霊をもって冴乃を守るので、どうか堪えてほしい」

冴乃は、本当に身勝手だと腹立たしく思いながらも、思弁と実生活を一致させようと苦闘しているらしい吉景の話を、じつと聴くほかに術を持たなかった。

「私は愛における肉体の結合を拒絶すると同時に、子供をもうけること自体をも否定する。この出生の否定がなかつ

たら、愛とはまったく別に、側室において世継ぎを生むことも考えられよう。しかし、私は私の存在を外延させたくない。私をこの世界に生み出すために携った人々は、遡及するにつれ、無数に増えてゆく。そして、その人々もまた、彼らを形成した永遠の古からの龐大な物質的な在り方を経てきたにちがいない。すなわち私は、無限に広がった底のない円錐体の頂点に立っているのだ。この点源は未来への方向性を持った逆円錐の頂点であり、時々刻々変化してゆく。このとき私は、充分ではないにしても、過去と未来に対して私の主体性を働かせ、私の在り方だけで半直線の位置を変えうる立場にある。だが、私が子孫をもうければ、また無限に延伸する可能性のある頂点を形成して、私の位置は〈家〉という系の中にあつてすら永遠に決着されないだろう。つまり、私の外延が生じるというだけで未来から固定され、私は自由を束縛されるだろう。生物が常に変異し、生存様式をも変えている根本的な原因は、自己複製を行うことからする、最小単位と見なすべき要素を持たない連続体だからなのだ。最小単位のない系には持続もなく定常もない。それゆえ、生物種は必ず滅び去る。私はいやだ。過去を控えているのは宿命だが、こうして頂点に立つ私が円錐体の中へ組み込まれるのは断わろう。人間存在そのものについても生物種と同様だからだ。少なくとも、私は抽出した血脈的系は、私をもつて終わりたい。終着点を設定することによって、何らかの定常を獲得したい。外延的な連続は畢竟、ようやく凝結した私の個体の無意味な流動にほかなるまい」

夜もだいぶ更けていた。吉景の話し声の合間、不意に開け渡る静けさが、ほんのときたま聞えてくる夜警の武士たちの動く気配を織り交ぜながら、向かい合つて坐る二人の心の中へ深く沁み込んでゆく。早春の夜気が薄着の冴乃には寒く、白い手で襟元をきつく合わせて次の展開を待ち受けようと思うのだった。

吉景は冴乃の反応を観察しながらも、まだ語り尽くしていないと感じなければならなかった。

女の肉体はその構造が受動的であることから、肉体を委ねる意思のみが彼女の男に対する主体性となるはずだ。ここに、女性の貞操という観念が社会的な問題として扱われる原因もある。男が愛する女の肉体を求める意味もある。女性は性の一方としてそれ自身に終わらない、肉体に象徴される愛の貴重な証しを奥に秘めている。しかし男にとつて、その肉体構造の能動性ゆえに、性的交渉をもつことは恋愛に関して何の意味もない。彼は、生きることに欠如からする、女性の意思あるいは肉体の質的な選択をするのみである。というのは、人間の場合、ある対象を求めるべきものとして決定された機能を持つゆえ、もはや人間として異性を意識するとき、肉体そのものの欠如と同様、意識自体もまた異性に対して欠如するからだ。なぜなら、意識、すなわち関連づける能力は生命の根源的な条件ではないか。さらに、その意識を意識する無限連鎖を積分する能力を人間が有するがゆえに、人間の精神に欠如がもたらされるのである。そして男の肉体は、物体性以上の何も秘めていないのだ。

「生そのものにおける欠如こそ、私にとつて婚姻の動機なのだ。そう、肉体の結合を前提としなくても異性を求める必然性がある。性という最も根源的な具象の上に形成される人格同士の結びつきは、生きる原動力となる。だから私は冴乃と結婚した」

吉景がこう考えるのも、嫡子の地位にあり、やがて卯月家の当主となるべき身でありながら、世継ぎをもうけようとする意思もなく結婚したことに、自分自身拭い去れぬ負い目を感じていたからなのである。それは、父母と〈家〉その他、当然のことと思っている家臣や領民らを欺くことではないか。

吉景は強い潔癖感から、幾度も婚姻を拒んだ。しかし、たとい彼が嫡子の立場を放棄しようとしたり、世継ぎを生まぬと表明したとしても、奥茂に領主の座を譲る煩瑣な手続きを踏まねばならなかったり、最悪の場合、藩内外を巻き込んだ謀略が画策されるなど、紛争を持ち込むことになるかもしれない。それなら、最終的には私に種がないということにすれば、しぜんに奥茂が領主になることができるのではないか……

違う、違う。——吉景は強く否定した。語りたいのは弁明ではない、心の内で腐蝕した遠い記憶にまといつく、太った蛆虫を見るような嫌悪や呪詛なのだ。吉景は思い出して、戦慄と嘔吐感を催おした。理性は知覚であることを忘れてはならぬ。いくつかの知覚の前提さえあれば、それらの間に生じる論理的関係は、もはや生の生なまに関わりなく抽

象的な思考として自由に動きまわるのだ。そして、その思考の運動が激しさを加えるにつれ、逆に生自体をも動かすようになる。しかし今、吉景は直接、知覚そのものに関わらないではいられなかった。

突然立ち上がって、吉景はいらいらと部屋の中を歩きだした。

「冴乃、私は性が恐ろしいのだ。私たちの生の茫漠と拡がる否定性の最中に、ただ一つ充填しうる闡明な対象を持つ欠如、それが生殖に関わる性なのだ。その性によって否定性は消し去られる。しかも、性は有限の欠如だから影響力が強い。選択肢は、相対する異性のみだということ、これほどに決定的な志向性がほかにあるうか。充填されることは恐ろしい。性こそ、美と共に人間世界の両極を成す完結的な在り方なのだ。美が普遍性であるのに反して、性は個体の破滅を前提とした時間空間への屈服ではないのか。完結とはまた、明らかに一つの喪失にほかならぬ。純潔の、無垢の喪失なのだ。汚穢を貫き通らねばならないのだから。痛みだ、恐怖だ、戦きだ。そして、性に関する限り、人間の重層的な在り方は許されぬ。しかも、この性の完結性は、人間存在の特質である、常に過渡的な存在、常に否定的である存在の仕方を抹殺しようとする。が、否定性を生きることこそ私たちの存在の価値を付加し、人間の創造性を触発するものではないか。創造性とは、正に現時点からの解放なのだ。私は事実、日常生活を送り、冴乃を抱くだけでも満足なのだ。しかし、しかし私は、ともすれば易きに就こうとする、意識を意識するという本質的に否定しつづける生き方から逃れようとする、恐らくは最も安易で選びやすい、それゆえに最も不自由な生き方の中に埋没しようとする、そんな自分が厭わしい」

生き方を模索しているというより、潔癖のあまり自分自身を否定し、引き裂いてしまう吉景を目の当たりにして、冴乃はこれからの暮らしに暗雲が立ちこめているような気がした。

ひとりでに怒張する異形の局部、なまぐさくも生ぬるい亀裂、番い合った姿態、あまりにも粘着質の生氣。すべての感覚がそのためにのみ引き寄せられ、欲情する男女の目合。長く尾を引く男女の呻き声、そして醜く膨れあがる女性の腹——吉景は目をつぶり、眉根を寄せた。

「思い描くだけでも、胃の腑からこみ上げてくる吐き気を禁じえないのだ。私の感覚はその野性に堪え抜くことができない。直接的なものの持つ極彩色のけばけばしさに、私は空想の予兆を払いのけようとする。尖鋭になればなるほど、情欲は耽美的にそそられ、同時に、その繊細さゆえに痛み傷つく。私は、こうした蠱惑と嫌悪との間に弄ばれ、病的なまでの恐怖を感じなければならないのだ。……しかも、白い血液と黄色い球体が合体して形を変え質を変え、新しい生命体を生み出すではないか。私たちの最も原初的な欲求の対象が食べ物と異性である、ということ、これが問題なのだ。原初的な要素は否定されねばならぬ、人間の在り方を人間の知性によって再構成せねばならぬ。ところで、食物ならば加工し、料理へと昇華することができる。しかし、目合は行為そのものだから昇華の余地はまったくない。したがって私は、性を無視しようとするのだ。人間が滅亡すべきか否かを私は知らぬ。ただ私は、宇宙から演繹された私の個体を逆に帰納する、すなわち宇宙の私化によって、私を宇宙の一要素として調和させたいと思う。つまり私にとって重要なのは、他己や人類の未来ではなく、私の個体なのだ」

このとき、冴乃の目が光った。居住まいを正して吉景に向き合い、毅然とした口調で言った。

「あなたという個体だけが重要なら、なんのための婚姻のですか？ わたしという存在はなんなのでしょう？」

虚を衝かれた吉景は、改まって冴乃の視線に正対した。

「あなたにとって私に選択権はないのですよね？ わたしの主体性は、あなたにとって無価値なのですよね？ 愛を芸術と仰有るのですから、わたしを巻き添えにせずとも自己愛に陶醉していればよろしいではありませんか」

冴乃が厳しい口調で問いを發した。吉景は意想外の展開に慌てて視線をそらし、唇を動かそうとしては閉じ、また話そうとしては躊躇したあげく、やっと掠れた声を出した。

「……私は…私は、女性を愛する気持ちを失っていたし、もちろん妻を娶る気もなかった」

「では、なぜ？」

「……冴乃に会うまでは……」

吉景の硬直し青ざめていた顔に、微かな赤みが差した。

「最初に会った瞬間、私は冴乃を愛してしまったのだ」

冴乃の表情に、ほのかな生気がきざした。

「私の人生にあるはずのないものが生じ、起こるはずのない出来事が起こり、避難や抵抗をする間もなく、存在まるごと冴乃という津波にさらわれてしまった。だから、私の主体も選択権も冴乃の中にあるのだ。私は、冴乃という大海原に浮かぶ小さな舟にすぎない」

「詭弁ですわ」と言った冴乃はひと呼吸おいて、俯きかげんに付け加えた、「わたしこそ、一目で吉景さまにすべてを奪われました」

二人は初めて心をこめて見つめ合い、坐ったままひしと抱き合った。吉景は呼吸も止まれとばかりに、冴乃の唇を吸った。

「すまぬ」

やがて吉景は冴乃の前に頭を垂れた。

「私の人生観は冴乃に会ってからも変わっていない。否、冴乃に会ったからこそ、いつそう私の論理は強固になってしまった。もちろん、抽象に生きようとするわが身はどうあれ、冴乃は自身の意思どおりにすればいい。仮に私のもとから去っても、私は生涯、冴乃を愛しつづける」

「わかりました」冴乃はきっぱりとした口調で言った、「子孫を残さないという吉景さまのお考えを受け入れます」

「ほんとうか！」吉景の顔が輝いた、「では、一緒にいてくれるのだな。私は冴乃を失わなくてすむのだな！」

うなづく冴乃を、吉景はまた強く抱きしめた。

「嬉しいぞ、嬉しいぞ！」

興入りを前に、目合の実演を交えて微に入り細を穿って説明を受けた冴乃もまた、自らも含め、男女の肉体とその変化、行為を、浅ましくも醜悪と感じ、嫌悪感とおぞましさを覚えていたのだった。その行為をしないで済むということに、冴乃は取りあえず安堵したたのだ。

とはいえ、一点の曇りもない青空のように喜ぶ吉景に腕を巻き付けながらも、冴乃は、この夫との一対一のつながりの中で、ここ奥の間に象徴された現在する社会を断って、純粋な抽象的存在に化してしまうのではないかという不安をも覚えずにはいられなかった。

「ただし、家臣や領民を心配させないように善政を敷いてくださいね」

「わかった。世継ぎのことも、そのうち奥茂と相談しよう」

二人は、それぞれの床に横たわった。

吉景に部分的ながらも共感し、その思惟を受け入れたとはいえ、一方では、取り返しをつかない変容に巻き込まれてしまったような不安も覚えて、寝息を立てる吉景の隣で、冴乃はなかなか寝つくことができなかった。この時すでに冴乃は、吉景の〈爆発〉を予感していたのかもしれない。

それから八年余り。あの日までは、淡々と、しかし熱意をもって政務にいそしんでいた吉景だった。汚職や暴力などに対しては法を厳正に運用し、公平感を持たれる富の分配に心を砕き、農林水産や商工業などに関するさまざまな規制も撤廃した政策が功を奏して生産意欲が盛んになり、さまざまな分野の産業が活発になった。有名な社寺や、特徴ある温泉などがあるわけでもないのに、旅行者や芸能集団、文人墨客、行商人などが領内の活気につられるように大勢訪れ、庶民の消費、娯楽、文化活動なども旺盛で民度も高くなっていた。幸い豊作・豊漁にも恵まれ、領内は穏

やかな活気に溢れていた。二度の江戸詰も無事にこなし、吉景は若くして〈名君〉との評判が立つようになった。

その間、冴乃は、吉景が側室も置かず、酒宴なども好まないため息苦しい思いをさせがちな家臣や領民たちに心を配った。城内ではときどき茶会や演芸会を催したり、ときにはそんな催しに領民を招いたりした。また、女性や子どもも安心して生活できるように、領内の要所要所に番所を設置したり、年中行事などにそれとなく援助金を出したり、陰に陽に良好な藩政を支えていた。

ところが、昨秋の鷹狩りから戻ってきたときには、吉景は別人になっていた。目が、水差しの水を襖障子に投げ放った最初の夜と同じ光を放っていたのだ。冴乃は何か起こるにちがいないと直観した。事実、それからの吉景は政務に集中しなくなったばかりか、鬱々とした表情で始終いらだち、怒り散らし、身勝手な行動を取り、一人のときには苦しげに考え込んだりしていた。

そして、あの〈築城宣言〉に至った。

実は冴乃は子孫を断つことに同意はしたものの、婚姻以来、子を産み育てたいという情動を完全に鎮めることは不可能だった。諦めようと心がけ、日ごろ意識することはほとんどないものの、城内であれ城外であれ、母親と子が一緒にいる光景に出会ったりすると、心が激しく乱れのをどうすることもできない。しかし平静をよそおわなければならず、かといって吉景はおろか、他の誰にも訴えることのできない苦悩は、行き場を失って冴乃の内面に厚く重く鬱積していた。女体としての尊厳と輝きをもたらすべき属性は見捨てられ、男女の愛における純粋な関係、即ち再生産行為による実在性としての使命を果たすことなく、空洞を包摂しながら表象する生命でありつづけた。もし彼女の肉体そのものが何らかの意味を有するとすれば、愛の形式としてではなく、手段としての用途であろう。

いや、用途ならば、と冴乃は思った、子を産み育てるという使い道が拓けたのではないか。しかも、わたしを嫁として迎えたのは卯月家であればこそ、卯月家の血を継ぐことが使命、奥茂の、同じ血を引く弟の——考えているうちに、冴乃の意識は薄れていった……。

やがて「おかたさま、御方様」とうろたえた侍女たちの声が、耳許にぼんやりと聞こえた。水を含まされて、冴乃はようやく意識を取り戻した。しかし今は、仰々しく世話をやく侍女たちさえも厭わしい。まだ自由にならない目蓋を開き、いつになく陰しい眼差で彼女らを次の間へ退かせた。

奥茂の子を産むくらい、なんでもないことのようにも思われた。冴乃の肉体を奥茂個人へではなく、その機能こそを求めている卯月家へ単に開くことは、吉景との愛に関して如何なる新たな意味も生じない。夫婦関係に限局すれば冴乃自身そう考えるし、吉景もまた、そう処理しなければならぬはずである。というより、抑えきれぬ情動である「妊娠」への能動的な行動は、冴乃の自己実現の少なくとも一部であり、自分の子ではないのだから吉景も積極的に評価しても論理的矛盾は生じない。というより、吉景は根本的に自分自身のことしか眼中にないのだから、問題視することはないはずだ。

吉景との生活（それはおそらく、吉景の生活、と表現すべきであろうが）を否定するつもりはなかった。ただ、こうして気付いてみると、彼女の生を導いていた要素は、吉景を支える妻の役割というより、むしろ卯月家の構成員としての枠であった、と感じられるのである。それも、生きることへの主体的な情熱ではなかった。言うならば、社会の圧力に屈してきたのである。しかし、愛に関しつつ肉体を求められるとき妖しく燃え立つであろう、薄絹の下で血が通う冴乃の生への契機は、我知らず観念的に身悶えしている。唯一の主体であるその契機が、志向性を見出しえずに、苦しげに喘ぎ惑う様を、冴乃ははつきりと意識した。このままでは吉景が求めぬ限り、彼女の肉体は形式としてすら成り立つことはできぬ。

冴乃は力なく頭を振った。黒髪が肩のあたりに重くまとわりつく。成熟した果実は、愛でられ、食されるために一瞬の輝きを放つのではないか。しかし自分は、成熟期を無為に過ぎて、ただ時の経過とともに落果するのみなのか。しかし、その果実すらも、次代への使命だけは全うしようとするのではないか。

恨みがましいもの思いの中、冴乃は徐々に、否定的に距てる障子紙を焦がさんばかりにゆらめく炎を感じ始めていた。その障子紙を破れば、向う側で燃える炎を掴むことができそうな気もした。世継ぎを産むという使命も招く、卯月家も要求する。そして、自分自身の生き甲斐を求めて存在を伸ばそうとすることが、いったい罪を犯す結果になるのか。

罪？——瞬間、冴乃は自ら衝激を覚えた。夫々吉景の磁場から遠く離れて、自分の肉体的存在価値を極大化した考えに激しく驚いたのである。

目合が神聖な行為なのだと思えば、未だはつきりとした輪郭を持たぬまま包みこまれている主体性を吉景に委ねて、いつか美しく形作られる時まで純粹に守り通すこと、それが吉景に対する愛の証ではなからうか。けっきょく、その主体性が形を現わさないとしてもな、秘して光芒を放ち続ける永遠に高貴な忍従ではあるまいか。そして、けっして外部へ洩れ出ることのないこの光芒こそ、吉景の憧憬であり、愛の対象なのかもしれない。それともわたしは、吉景を愛していないのか。六年間の忍従は、ただ引き摺られてきただけだったのか。あるいは、社会的慣習への屈服だったのか。さらに、吉景から愛されている、と信じていたのは錯覚だったのか。

そしてまた、相手が誰であろうと、ひとたび生殖手段へ開かれた女は、けっして無垢な形式への志向を保つことはできぬ。或いは、志向する資格を失うのではないか……。

しかも、使命と社会に連なる彼女自身の生き甲斐という、現実的な地面に足先を触れようとするいま、その地面もまた言い知れぬ湿気を帯びた暗い場であつてみれば、やはり、安らかな生から懸け離れた状態にvarietyないのだ。そして、吉景との絆と、激しく降りしきる雨粒を透かして思い描くに至った行為との間には、鋭い亀裂がある。その果てには、茫漠と収斂する虚無が事象している。

——これまで看過していた問題が次々と浮かび上がってきた。冴乃はついさきほどまで、高みから垂らす吉景の（抽象的な言葉）という不可視の糸に縋りついてたのかと思うと、自ら疑念を抱かずにはいられなかった。突然きつく感じられてきた帯の下、冴乃は絶え絶えな息をするばかりだった。

いきなり、高い笑い声が室内をころげまわった。しかしそれは、感情がこもっておらず、くすぐられたときのように、単なる生理的な反応に近かった。

「自滅しうることも、人間の大きいなる特権なのだ。そうではないか、浅居」

奥茂の出府以来、常時つきまとっている老臣Ⅱ浅居に向かって、同意を求めるでもなく吉景は言った。そして、ときどき笑いやめては、含み切れずにまた吹き出してしまふ。そんな状態が二、三度続く間、角桐沙忠の兄Ⅱ徠起は呆然とするばかりであった。

「能動的にしろ受動的にしろ、個の肉体的な死への意識による志向こそ、最も日常性に富む抽象的な行為だろう。自死も、沙忠の言動も、この日常性に浸りきった自滅の一形態と考えてよい。生命という系の目的が、その存続・増殖に向けられているとすれば、この営為への志向こそ、あるいは志向の可能性こそ、人間的な存在の仕方を証左する有力な手掛かりなのだ。とすれば、個の自死は人間の尊厳にとって重要なことではあるまいか。なぜなら、科学は急速に、生命現象のみならず精神活動をも物質的な在り方として追究してゆくに違いあるまいが、しかし、私には、この世のすべてが物質的な在り方として科学的に解明されたとしてもなお、この自死を選ぶ意思が、人間性の象徴として残光を放ち続けるように思われるからだ。宗教や観念論、または欺瞞に満ちた皮相な人間礼讃が科学に屈服するとしても、やはり、この個的自死という素朴な行為はあとを絶つまい。あらゆる事象において、変化の内容と形式は不可分である、換言するならば、因果性と必然性とは厳密に一致している。人間もまた、生きつづけるという選択をするように仕組まれた存在ではあるが、人間は関連を意識する知的活動によって内容と形式すなわち因果性と必然性とを分離する。この分離こそ個的自死を可能たらしめ、決定論的推理と予測から人間の意思を自由たらしめる。なぜなら、

事象における内容と形式とが一体ならば、存在の仕方は規定されてしまうからだ。そうだと、その結果掌中にするのが自我の創造なのだ。私たちはそこでのみ勝利の雄叫びを上げねばならぬ」

他人事に関わっているとは思えないほど、吉景は興奮していた。諦めきった浚面で主君の長舌を受け流す浅居を横目で見ながら、角桐は、未だにあっけにとられたような表情だった。

「自我が創造されるとき、個性は確立する。と同時に、新しい時空の地平が出現する。この瞬間、時空と自己とは溶融し、透明な関連をもつ。その透明な関連への質的な意識が認識なのだ。そしてこの認識こそ、抗しきれぬ質量感を伴った実在感として、ともすれば際限なく深まる実在への不信を払拭し、確固たる時空に抱擁されていることを実感する」

吉景は不意に、舟底が抜けたような気がした。甘酢っぱい香りと苦いような味が記憶野から滲出してきて、朦朧と拡がる白い薄暗がりの中、遠い映像が徐々に浮び上がってきた。吉景は息を殺して、その映像を凝視した。それは緩慢な動きである。途切れ途切れの、不必要なまでに局部を拡大した映像である。

観察者の立場でそれを見ながら、現在と過去との間に揺さぶられていた吉景はすぐに、経験の反芻の中へ、主題と連なる新しい体験の中へ、めり込んでいった。

臥っている吉景は、傍の侍女に執拗な熱っぽい視線を注いでいた。あどけない童顔とは裏腹に、十二歳とは思えぬほど露わに光る眼差しである。やや迫った額を蔽う艶のある黒髪がなまめかしく肩へしなだれかかり、切れ長の目蓋と、慎しみ深いとは言えないが明るく輝く瞳、下唇がわずかに厚目の真赤な唇、ちよつとしやくれかげんの顎、着物が包みきれない官能的な肢体——侍女の姿が少年の性欲を強く刺戟する。肉体の志向が収斂し、布団の中で、内圧で破裂しそうに隆起した。

「あら、いやですわ、若さま……」

少年の熱い視線に今、初めて気付いたかのごとく、侍女は型どおり顔を片手で隠し、流し目に微笑みかけた。

吉景の胸の患いが診断されたのは、四カ月ほど前のことだった。吉景は絶望に打ちのめされ、一時は言葉も出ず、食べ物も喉を通らない状態だった。〈家〉を滅ぼす病として恐れられていたので、上層部だけの秘密とされた。

しかし、若さは生命力そのものである。吉景は、湧出してきた生命力だけで絶望を通り越すと嘘のように食欲がわき、安静を続けながら牛肉、鶏卵など滋養強壯の食材も積極的に食べた。そのおかげか、二月ばかりで症状は安定し、吉景の肉体は急速に成長していった。変声を終わり、背丈もぐんと伸びた。知的な要求が強まると共に、さまざまな本を読み獲り、いろいろな分野の学者に講義を受け、時には武道や舞などの催しものを開かせて、退屈を凌ぐというよりは、却って意欲的な主体性を見せたのであった。

しかし、やはり終日寝た切りの生活は、不自然な鬱滞をもたらさずにはおかなかった。健康が上向きになるにつれ、成熟しはじめたにもかかわらず運動を禁止された肉体の反発力が充満していった。わけもなく苛立つて医者や側近へ当り散らし、蒲団を蹴飛ばしたり枕を投げたりする。また、不意に涙を流すこともあった。父や母が見舞いにきても、顔に蒲団をかぶったまま頑なに口を噤んでいる。病状が快癒へ向かっていることは疑いもなかったが、どことなく狂暴な陰翳を宿す眼は、ますます虚ろに鋭くなっていた。

このころから、吉景は看護の侍女の選り好みを始めた。一目見て追い返す侍女もあれば、しばらくしてから忌避する侍女もあった。女体に対して強い欲望のあることがはっきりと意識されるにもかかわらず、どう処理すればいいのかわかることができず、時折り物狂おしげに自虐しながら何人も看護の侍女を交代させた。

江奈を見た瞬間、吉景は彼女との間に蒼白い稲妻が光ったのを感じた。秀でた額、奥目の二重まぶた、高い鼻、微かに大きめの唇、顎から延びる白蛇のような項、帯揚げを盛り上げる胸、そして、着物生地もはちきれそうな太ももから腰——吉景の全身は戦いた。欲望が為体の知れぬ幻によって引き摺られる。なぜか後ろ暗いことのような気がして、吉景は抵抗した。幻は形のない形、動きのない動き、自己の否定。それは彼と同質であった。

吉景は幻を理解した。一番の男女の間に潜在する生命、吉景の行動さえあれば、やがて誕生するであろう生命への明らかな内在——幻は絶叫する、狂乱する。飛び跳ね、呻吟し、喉を掻きむしりつつ、吉景を嗾ける^{けしか}。欠如が赤い亀裂を開く。隆起が亀裂を貫こうとする。

吉景はからくり人形のように起き上がり、反射的に身を縮めた江奈の体を押し倒した。

「吉景様、ご助言願えませぬか。私一人の力ではどうしようもないのです」

知らぬ間に吉景の呼吸は重苦しく弾んでいた。訝しげに彼の沈黙を眺めていた角桐徠起は、その間によりやく我を取り戻し、依頼の件に立ち入ろうとした。

「死ね、と言ってほしいのか」

ややあつて低く問い返した吉景の言葉に、角桐徠起は見違えるほど意気込んで、

「はい、それだけでけっこうなのです」と答えた。しかし、吉景は苦笑を浮かべて、ゆつくりと脇息に凭れ掛かった。

「どのみち、沙忠は勝近様のご沙汰で処刑されるのです。もちろん、あれだけの不義を犯したのですからそれも当然でしょうが、しかし、せっかく勝直様の特赦を受けたのです、できることなら、今、時期を外さぬうちに追腹^{おいばら}という形で自害させたいと思います。もはや死が決定している者のために〈家〉が取り潰されるなど、馬鹿馬鹿しいことではありませぬか。しかも、処刑されるとなれば、沙忠自身はむろんのこと、角桐家もまた甚しい恥辱を加えられます。私個人としては沙忠が処刑されるのもいたしかたないとは思いますが、実弟であれば、道を立てる術もあるというのに、みすみす辱^{はづかし}めを受けるのを見るにしのびないのです」

顔を引き攣らせながら角桐がこう言うと、吉景は頭を擡げ嘲弄するような表情を作った。

「そんなに沙忠の死が大切なら、私がかくまつてやろう」

角桐も、また、それまで無関心であったはずの浅居も、とたんに蒼褪めて狼狽した。

「殿、とんでもないことです。花田家と悶着が起こつたらいったいどうなされます。勝近公は將軍家を控えていらつしやるのです。いささかでも間違えば、卯月家は滅亡の危険にさらされましょう」

「いいえ、沙忠が追腹しないかぎり、角桐家お取り潰しは必定なのです」

二人は急ぎ込んで吉景の見解を否定した。反射的に、吉景は大きく笑った。

「〈家〉か……社会構造とは、常に錯倒を余儀なくするものだ。民族主義と国家主義とを取り違えてはならぬ。たとい、民族自決の原則に立つ国家であっても、民族の志向と矛盾することはある。このとき、国家は民族に従属しなければならぬ。個人と〈家〉との関係においても同様な錯倒が生じやすい。二者の軽重^{けいじゆう}を区別すべきではない。国家も〈家〉も、要するに社会形態は、私たちにとっては生の場^{せい}なのだ。私たち個々の人間と同列なのだ。社会を不当に外界視することによって、私たちはあまりにも共有するものを背負い込んでいはずまいか。その共通性に甘んじて、生きることへの潔癖さを失つてはいまいか。ここに、生への曖昧さが生じるのだ。社会に対する過信が、個人の責任を社会の名によって社会へ転嫁する原因となる。もはや、社会の存在を前提せずに、純粹な一個人として行動を求めべきなのだ。人間の意識段階は、そこまで進歩しているのではあるまいか。この段階においては、人間の先験的な善悪性は問題とならぬ。孤独の中で、いったいどんな善悪が生じようというのだ。それゆえ、私たち一人一人が自我、すなわち生の場を創造し、そうすることによって、組織という可変の共有物を捨て去り、それぞれの個性の拠って立つ人間性という唯一の本質的な主調低音に耳を傾けねばならぬ。社会は、こうして、おのおのが抱いた真の實在感の上に、無数の世界観を許容しつつ大きく包容するものであつてほしい。このときはじめて、全と個とが両立しうる、否、もはや全と個の二項対立も問題とならず、個的であることが全的であり、全的であることが個的である社会が実現するだろう。そして、最も単純な社会形態として生の場が組み立てられるはずだ。ここにすべての人々の創造的な躍動が展開される。なぜなら、これこそ普遍性に基づいた生の形式なのだから」

人間や社会の未来を信じるのか——吉景の胸裡を、隙間風が吹き抜けた。鳥肌の立つ肌触りを無視して吉景は言葉を継いだ。

「この意味で、私は沙忠を擁護する。なるほど、彼の行動は愚かしいことだった。番い合ったまま離れなかったばかりに捕まる蜻蛉にも等しい。だが、沙忠は潔癖ではなかったか。彼自身の世界を築きはしなかったか。大袈裟なことではない。恋慕することによって世界認識を彼自身の仕方ですえ、行動することによって世界を変えたのだ。なぜなら、直向な恋愛は、独自性の最も敷衍的な形式なのだから。そう、世界の変革こそ、世界に対する私たち独自の関り合いの仕方こそ、人間の生における最も重要な使命なのだ。これこそ、命を代償として為し遂げるべき仕事なのだ。なぜなら、変革は宇宙の新生を意味するからだ、時代が既にして成した宇宙に組み込まれていた自己を、この覚醒によって解放するからだ」

吉景は話を止めて、浅居と角桐をちらと見た。

「とはいえ、心配するな、私は沙忠をかくまおうとは思っていない。沙忠の潔癖さを汚す権利を私は持たぬ。もともと、恋愛とは孤独なものなのだ」

浅居は仰々しく安堵の溜息を洩らした。が、角桐徠起は悲痛な面持ちに変わっている。

「たかが恋愛沙汰ではありませぬか。それに大きな意義を見出して擁護なさるとは、吉景様らしくもない。弟は、女狂いをしただけで、もはや武士としての資格を失っています。しかも、卑怯未練にも命を惜しむとは、情ないことです。男の理想を求めて身を滅ぼすなら、まだがまんもできましよう。しかし、女一人のために《家》をも巻き添えにして、親族の顔に汚辱の泥を塗りたいくことは断じて許されません。そのうえ、父上の遺言までも無視しているのです」

「たかが恋愛沙汰、とお前は言う。しかし、いったい女性に対してすら誠実でありえぬ者が、他の何ものに対して誠実を誓うことができるのか。人間存在の最も原初的な、自然な志向に真摯でない者が、より稀薄な志向性に真摯でありうるか。もちろん、親兄弟を愛するべきであるかもしれぬ。だが、親兄弟とはいわば偶然に成った関係なのだから、愛する必然性は恋愛におけるよりも薄弱なのだ。個体の独立を認めるならば、親兄弟や《家》を愛さないからといって責める権利は誰にもない。愛される自信があるなら放っておけ。愛されたいなら努力しろ。そして、愛されないなら当然と思え。これが、血脈間における愛の存否なのだ」

「しかし、愛においてすら避けえぬ事態は生じます」

毅然として角桐徠起はこう言った。吉景は一瞬たじろいだようであったが、すぐに態勢を立てなおした。

「それは社会構造との軋轢にすぎぬ。なぜなら、愛こそすべての関係を内包するものだからだ。純粹な愛は決して顕象しない。存在の条件として、人間の生き方の底流に秘かに沈む慎ましい契機なのだ、それ自身においては何ものをも主張しないのだ」

「しかし、なお、愛においてすらも避けえぬ事態に陥っています」

角桐徠起は執念く繰り返した。じつと彼を睨みつづけている吉景は、苛立たしげに手を動かしたり、坐り具合を直したり、脇息に肘を掛けては離したりしていた。

「殺せ、殺せ。お前の手で殺すがいい」

たまりかねたように吉景は突如こう叫んだ。と、そのとき眩暈を覚えて、彼は再び時間の裂目から滑り落ちていった。

「吉景様の御子を授かりました」

淫らで艶やかな笑みを満面に浮かべて江奈が、十三歳になっていた吉景に告げた。強い潔癖感の写像である不潔感と罪悪感に苛まれながら、その後も吉景は欲情に駆られて江奈と肉の交わりを続けていたので、何回目の目合でそう

なつたのかはわからないが、当然の結果である。

「どこにいるのだ」

表情を強張らせた吉景が尋ねると、江奈は彼に近寄り、「ほら、ここに……」と、青白い吉景の手を導いて、自分の下腹部に当てがった。見ただけではまだ目立たないが、触ってみると、着物の上からでも僅かにふくらんでいることがわかった。吉景はしばらく確かめるように撫で回していた。常態ならばふくやかな柔らかな弾力が伝わるのだが、そのときは、張り詰めた硬い感触であった。

指先に神経を集中させていると、江奈の胎内に宿る生命の萌芽が彼女の肉を透過して、吉景に触手を伸ばしてくるような気がした。そして、自分と江奈を介して人間が生まれるという実感を胸に受けとめる一方、江奈に対しても肉欲の相手というだけでなく、粘膜を密着させた直後から生じていた男女の親しみがはつきりと感じられるのだった。今思えば、その親密感是好悪とか愛憎とは異なる、存在の欠如を充填し合った者同士の、互いの機能によって生み出した生命を共有する者同士の、その生命によって同化を確認した者同士の、同一性の親和性ではなかったか。しかも、それは純粹に感覚的な同一性である。肉体が在ることのみを前提として、肉体の完き存在への行動を選択することだけによって、仕方の問題ではなく形式的な手続きだけによって、結果される本来的な共有性なのだ。この限りにおいて、存在の単一性への復帰はいかなる努力をも要しない。ただ、在ることだけが条件なのである。

吉景と江奈との肉体の核心は、ぴつたりと接合したかに思われた。吉景は深い安らぎを覚えながら、愛撫の手を江奈の腹から離れた。

刹那、吉景と江奈とは空間によって隔てられた。感覚が突如、研ぎ澄まされて吉景の安らぎは暗転し、不意に自分も江奈も虚空に孤絶していることを意識した。あらためれば、どのように縊り合わせようとしても不可能な、独立した系である。感覚とは、存在間の断絶を確認する作用であり、断絶を量的に意識する機能でしかない。それゆえ、関わり合いの仕方を無視するのだ。とすれば、江奈は吉景にとっていったい何ものなのか。感覚という、対象の直接的な把握によって誘導された結合は、吉景の生において何を意味するのか。世界観とは、関連の質的・量的な意識でなければならぬ。なのに、江奈との関係において質的な意識、即ち理性が欠如してはいなかったか。感覚による意識は、関連づけに過ぎない、在ることに過ぎない。次元の欠落した宇宙の平面図である。立体性を持たぬ、自由空間のない、肉体的に規定された、時空内容の必然性と因果律による素材である。創造の場のない、単なる世界である。

不潔感と自己嫌悪が全身を駆け巡ったのと、単に条件反射としての意識のみから交わったことに気付いたのと同時だった。瞬間、吉景は江奈と熾烈な敵対関係にあることを感じた。何故なら、感覚次元において自己外存在は断絶によって対立性を有し、しかもこの場合、対象となる女性は、存在を共有することによって、即ち、生命を新生することによって直接、吉景の個体維持を否定し、無限への還元を意志するからである。このとき江奈は、吉景との関連において位置を変えた。

吉景は急に敵意を含んだ視線で江奈を見た。ついさきほどまで、安らぎとともに感じた彼女への親しみも、逆に、振り払いたいような厭わしさをもたらす。よく見れば、既に下腹部は外からでもわかるくらい膨張している。

この内部で、忌わしい命が成長しているのか。私が移植した私の敵が――

江奈は、突然変貌した吉景のようすに、はっと身を引いた。

私に余剰などはない。無限に連なろうとするほど僭越ではない。この愚か者め――

かたくなな自己保存への希求から、吉景は手当りしだいの呪詛を思い巡らした。

死ね、売女――

ぶるぶると震えだした吉景は、荒々しく刀を取って江奈の腹部めがけて突き刺した。

女の膨張した腹部の切り口から迸り出た生暖かい返り血を浴びて、少年吉景は全身の毛孔が奥深く冷やかに収縮するのを覚えた。刺し込んだ刀を粘着性の抵抗に逆らって引き抜くと、江奈の官能的な裸体がぴくりと反応した。空

をつかむように差し伸ばした手の顫動も、紫色に変色した唇の震えも、やがて人形のように止まった。いったいいに開いた目蓋の中、締めなく瞳孔が拡がっているが、唇はくやしげに真一文字に結ばれ、鋭く穿たれた傷口からは血液が流れ出ている。

死体を見下ろしながら興奮のあまり乱れていた呼吸や心拍が収まると、吉景はきつく握り締めていた刀を死体の上に投げ捨てた。そのとたん、腹の底から喉元へ突き溢れた嘔吐感に、吉景はたまらず、口から鼻から、黄褐色の液体を戻してしまった。そして、嘔吐物の堪え難い味と悪臭が脳髓を浸したとき、実体とは無関係に生命を主張するあの幻が、息絶えたばかりの江奈の腹の切り口から這い出して、喘ぎながら吉景の肉体に喰い込もうとしはじめた。吉景はあわてて蒲団の中に潜り、耳をふさぎ、口をつぐみ、目をつむった。いまや、対の一方を失ったことが明確に観取できる表象となった欠落の幻は、その安息所を求めてさまよい漂うかのようだ。その内在的な生命は、吉景の体内における自己の事象化を主張してやまない。吉景の外延であることの証を求めてやまない。

吉景は抵抗し、追い払おうとした。幻のつきまといは執拗に継続された。脂汗を滲ませて、祈りにも似た思いで拒絶する。しかし、肉体をまとうていない幻は疲れを知らない。空を切る吉景はしだいに疲労し、衰えて消えようとする。その瞬間、局部が極大になって溶融する暗黒の細い隧道に魔的な快感が走り、濃厚な天の川が激しく迸り出た。

角桐徠起は浅居に話しかけていた。が、老臣にしてみれば、経始に腐心したり資材の生産地を探したり、大工や土工、石工集めの方法を考えたりと、城築の実現に向かって脇目もふらず行動している吉景が、その構想の原理として考えている個性という観点から、沙忠に共鳴することは当然であり、たとい従弟同士といえどもそれを曲げる事態は生じまいと思っていたので、彼の依頼は実に迷惑なことだった。しかも、武士道や〈家〉の問題を繰り返す徠起を、浅居もさすがにもて余していた。

その間に吉景はようやく、二人の遅々として進まない会話を耳にする現在時点へ遡ってきた（過去の出来事は時間的な位置を占めずに、或る未来の中に存在するものである。というのは、もし位置を占めるならば、やがては過去の時間として位置づけされるからだ。そこに、歴史を考察する自由と意義がある。そして、過去に残るのは、単なる出来事の航跡にすぎない）。

「浅居様、あなたが私の立場にあったら、いったいどうなされます？」

角桐は詰問するような口調に変わっていた。浅居がそれには答えず苦い表情で黙していると、脇から吉景が口を挟んだ。

「あいにく、私は他人の立場に立つことができないのだ」

「茶化さないでください」

徠起は興奮した面持ちで吉景に食ってかかった。

「茶化してはいない。他人の立場に立とうとする同情こそ、宗教と共に、人間の得た最も俗悪な、最も有害な、最も不純な関係だ。それは、不可能なことを実行しようとするがゆえに、自己に対する厳しさを見失わせる。個人の価値を貶める。何人であろうと、己の存在価値を主張すべきなのだ。同情の代わりに軽蔑しろ、宗教を無視しろ。これからこそ、自信に裏付けられた自己主張の透明な形式なのだ。事実、時代から演繹される個人は、それ自身の価値を持っているではないか。そして、宇宙観の共有を拒絶すると同時に、おのおのが自己の宇宙観の中心とならねばならぬ。この拒絶の契機が自己愛なのだ。すべての人間が、自己の尊厳を自覚せねばならない、尊厳に相応しい自己を形成するために努力せねばならない。そして、尊厳に基づいて自己自身を存在の条件とすることだ。これは、自己を対象化する人間の、いずれは選択すべき宿命であり、権利でもある。だから、同情を捨てろ、信仰を破れ。世界構成の根源に過不足はない。在ること、そしてその否定、それだけだ。とすれば、ここに残される道はただ一つ、世界と自己との関係に対する質的な認識のみではないか。なぜなら、憧憬の入り込む余地はないからだ。この諦観を踏んまえ

て、私たちは自己を未来へ投げかけるのだ。というのも、愛する情熱は創造への出発であり、愛されることは創造への動機なのだから。このとき、私たちは全き孤独を知るだろう、虚無の直中に巻き込まれている自分を見出すだろう。しかし、人間の主調低音は、自由であることからする孤独にほかならない。また、孤独とは、最も峻厳な自愛を要求するものだ。そして、愛こそ、あらゆる存在の仕方に堪える力なのだ」

角桐徠起は、むしろ呆れ返つてももの言えないようだった。それからひしやげた沈黙が続いた。吉景も浅居も無表情に坐つたままである。時機を失して苛立つた角桐は、ようやくごちない暇乞いを述べて立ち去つた。

四

浅居の切々たる願いに根負けして執り行ふことにした祓いの儀に立ち会うために、吉景は清岳の頂きに足を踏み入れた。藩内の関係者には、干ばつに備えて、雨水と、房矢川から汲み上げる水を溜めておく池と、汲み上げるための設備を建設するという触れ込みであった。ほぼ中央に張られている祭壇を囲う幕が寒風に煽られ、簡素な祭壇や、神主と巫女のものとおぼしき履きものが見え隠れしている。やや離れたところで燃えている焚き火のそばに、吉景用の床几が置かれていた。

永文三年三月の初めである。この年は例年になく雪の日が多かった。積もつた雪でぬかる泥を、吉景は重く馬上沓ばじようぐつに付着させながら、何かに牽かれるように東側の突端へ歩み寄つた。分厚く覆いかぶさつた雲はほんの僅かに斑模様だが、果てしなく灰色である。加納城も領下も氷の中の箱庭のように凍てつき、海は透明な空間を距てて遙かに遠く望まれる。

北風を右頬に受けながら、吉景は独り佇んでいた。鼻の頭が赤らみ、空気が冷めたいからか両の眼は潤んでいる。荒漠と拵る眼前の情景に、しんと降り積もる無色の暗さ、その内部から微かに響く流水の軋む音。皮膚感覚を晒した吉景の心に、言い知れぬ悲しみが、寂しさが、つと身を擦り寄せた。

先般、奥茂から二通目の便りが届いた。一通目は沔乃も自分も無事、江戸に着いたという知らせだったが、こんどのは、築城の申請をしたところ大目附が好意的に対応してくれているとのことである。しかし、限定しているとはいえ少なからぬ人員が関わっているゆえに、幕府に露見して急転直下、形勢が悪化しないともかぎらないから、慎重には慎重を期すよう奥茂は書いてきており、浅居も同じように諫めるのだが、吉景は耳を貸すふりをしながら大胆に築城の準備を遂行している。

事態がどうなるうと、もはや築城計画に変更はない。もし幕府の許可が下りぬ場合には、まず加納城を取り毀し、そのあと一気に新城を建設してしまうのだと、吉景は考えていた。

もつとも、そんな意欲が満ちる半面、計画が載っている台座が揺らいでいるような不安を払拭することができなかった。一年余り前のあの秋の日、間地山で獵師のやすけと交した会話によって、〈築城〉という挑戦的な行動への溢流が始まったわけだが、それは単に、やすけという契機がなかったならば踏み出さなかった、負の選択ではなかったか。つまり、築城を通して個性を創造するという意思はもともと吉景のなかにはなく、やすけに触発されて急ごしらえした脆弱な観念ではないのか。さらに言うなら、中に狂気をはらみながらも善き領主たらしとして籙たがを嵌めてきた自らへの反逆ではなかったか、家臣や領民への意味を成さない面当てではなかったか、自ら肉交を拒否するという極度の抑制に対する反作用ではなかったか。公儀と領主の対峙を全と個の対峙に置き換えただけの皮相な思弁ではないのか。領主という立場に胡座あぐらをかきながら稚拙な思考を巡らし、架空の骨組みであるにもかかわらず大層な装飾を施し、さも堅固で壮麗な建造物であるかのように見せかけ、沔乃はもちろん、奥茂、さらには浅居をはじめとする重臣

たちを欺き、むしろ自分自身をも欺いたのではないのか。

思えば、吉景の現実と理念とは訝乃に築城の意図を話した瞬間、大きな歪みを生じたのだ。それは、実践的行動と伝達の行動との質的な差異に起因する。というのは、経済活動や政治的行動など、人間の存在の仕方そのものを直接社会との関り合いの直中へ投げ込む行動が前者であり、芸術の創作や文化活動、学問の研究など、生身の人間の生き方を、少なくとも結果的には伝達手段という形式を介して社会と関る行動が後者だからだ。いずれも互いに浸潤するのだが、行動する世界の質に関して基本的に露わとなるものの質的な断絶なのだ。そして、行動を社会の中に実現させることが、個性の社会化なのである。

むしろ、現実生活において、その二種の行動は錯綜重複し、明確には分離し難い。だが、私はその純粹性をも求めているのではなかったか。生とは認識することであり、その認識内容の形式が行動であるならば、生と認識と行動とは、明瞭な因果性で結ばれた、というよりはむしろ同義の、人間存在の層を形成する同時的な要素である。したがって、一つの行動の系は、その完結まで等質でなければならない。これこそ、自己に対する純粹さ、自己の内部における因果性の厳密さではあるまいか。

吉景の築城は実践的行動である。なぜなら、城を建設することが目的ではなく、したがってその完成度が問題になるのではなく、単に築城することを彼の生き方とするからである。築城が彼の世界であり、それによって彼の世界が表象されるからである。ここに、やすけとの共通性を直感したのだ。そして、単に自覚がなかったという些事に過ぎないかも知れぬが、その若者は無口であつた、無意識であつた。否、状況へ調和していた。善き領主を演じながらも、その殻を破りたいという内なる熱い地殻が、やすけへの対決を希求し、相手を殺害した。

以来、子孫をもうけないことに協力する条件のように訝乃に約束させられた「善政を敷く領主」という仮面（少なくとも余人にはそう思われたにちがいない）をかなぐり捨て、実践的行動に踏み切ったのだった。

実践的行動を要求する認識内容が、その実現を前に外部と接触した場合、それは伝達の行動への質的な転換を受けてしまう。したがって、内容と形式との因果性、即ち、生きることの純粹さを喪失し、そのみならず、伝達の行動によって触発された社会が個に対する能動的な独立を得て、一方ではその系に関する個の独立が剥奪される。このとき、内圧に支えられる充実した堅固な形式ではなく、空虚な殻が攻撃的となった社会に押し潰されるのだ。もし、もともと脆弱な観念だったとしたら、なおのことである。

こうした経緯が、種々の妥協と紆余曲折とを強いる結果を招いたのだ。とはいえ、いったい私に、誰にも築城の意図を伝えずに具体的行動に出る術があつただろうか？ なかった。とすれば、「築城の論理」は初めから破綻していただのではないか？

いまさらながら自ら突きつけた反問に、吉景は微かにたじろいだ。

「殿、そろそろお越しく下さい」

浅居が吉景を促した。緩慢に振り返った吉景は、重い足取りで幕の中に入った。臣下たちと、神主と巫女が頭を下げて迎えた。吉景が前に進み床几に陣取ると、皆が一斉にゆっくり顔を上げた。

巫女の顔を見た瞬間、吉景の脳髓に閃光が走り心筋が痙攣した。

江奈だ！

吉景の顔面は引き攣り、蒼白になった。突然の尋常ならぬ吉景の意識放射に、その場の皆が凍り付いた。否、皆ではなく、巫女だけは扇をしなやかに舞わせはじめた。

吉景が病に臥せていた期間、体力的な負担で快復が遅れるほど、何十度も生暖かな自分の肉の中に誘った江奈だ。軟らかく締め付けられる恍惚と射出する快感に吉景を深く溺れさせ、麻痺させた江奈だ。十三歳の時、吉景の子を身ごもつたと告げられて、困惑と不潔感のあまり発作的に、おそらくは自分の子と一緒に刺し殺した江奈だ。

あれ以来、脳内から消し去ってしまったはずの出来事が、かおかたち顔貌も姿も、出会ったころの江奈にそっくりの巫女に

よって記憶の層から掘り起こされたのである。そして、江奈の傷口から血まみれの未生の幻が迫ってきたことを思い出し、吉景はぞっとした。あれは、人体という形式をまといたいという濃密な意識そのもので、吉景という源流へ遡るかのようだった。というより、強烈な吸引力で吉景の存在の超出を促し、反応しようという意思が眼前の空間に凝縮していた。

表層意識では、後悔はしていない、罪悪感もない。とはいえ、あの経験こそが吉景の性格と世界観の形成に大きな影響を及ぼしたことはたしかである。なぜなら、ふたりの人命を奪った自分に子孫を儲ける資格はなく、以降、黒い雲に覆われた人生を送るほかにないと自覚したからだ。そのときから、生きる権利と、吉景でなければならぬ生の意味を模索しはじめ、自分を主体化・絶対化し、自らの生を照らす太陽をつくることに没頭した。深層心理では、深く悔い、罪の意識にさいなまれていたのである。

しかしその精神領域は、冴乃に「善政を敷く」と約束してから、間地山で若い獵師のやすけに会うまでは、固く封印していた。その抑制の密室が、やすけを契機として爆破されたのだ。

「この巫女を生け贄にするんだ！ 焚き火に捧げろ！」

吉景は叫んだ。反射的に警護の武士たちが駆け寄り、恐怖のあまり立ちすくんだ神主を払いのけて巫女を捕らえた。

「なにをなさいます！」

驚いた浅居が顔色を変えて吉景を見た。吉景は一顧だにせず「薪をくべろ、どんどん燃やせ」と家来たちに命令する。

「殿、そんなことをなさっては鎮守神を怒らせることになります」

浅居は声を震わせた。吉景は浅居に向かって口を歪め、鼻で嘲笑しながら、「生け贄を捧げるのだ、怒るところか大いに喜ばれるだろう」と怒鳴った。

「無辜の民を殺めてしまつては、殿のお考えや行動を自ら貶めておしまになります。なんのために息詰まるほど思索を続けていらしたのですか？ なんのための壮大な構想ですか？ なんのために奥茂殿を苦しめておられるのですか？」

浅居は主君の腕に縋りついた。

「うるさい！ 私の記憶の墓場を勝手に掘り起こした女だ、許すわけにはいかぬ」

「（記憶の墓場）とはなんのことか私にはわかりかねますが、この巫女が生け贄にされねばならぬ積極的な理由について、今現在、私は了解いたしかねます。領主という立場を借りての人殺しと思えませぬ。なにより、人間の自由や尊厳や価値などについて熟考なさったと思っておられる殿こそ、そのような陋習を打ち破るべきではありませんか。創造を重んじ、個性を至上命題とされる殿がとるべき行動とは思われませぬ。それに、どのような理由があるにせよ、遠い過去の陋習である人身御供を鎮守神が喜ばれようはずはありません」

吉景がほとんど正気を失っていることを知りながら、浅居は自らの危険も顧みず懸命に説得を試みた。

「なにが鎮守神の怒りだ、なにが祓いだ。そんなものはやめたぞ」 吉景は喚きながら、まといつく浅居の萎びた腕を振りほどいた。

「神の怒りなど、たかが知れている。真に恐ろしいのは生身の人間なのだ」

立ちすくんでいる神主の笏と御幣を奪い取り、それらに思い切り唾棄して焚き火に投げ入れた。火の粉が舞い上がった。それでも足りず、吉景は傍に置いてある薪を何本も投げ入れた。火勢が一気に増した。

「さあ来い、おまえを火炙りにしてやる！」

巫女を焚き火の傍へ引っ立てて、吉景は言った。

払いのけられた浅居は白髪を乱し、もはや制止する気力も、吉景の狂気を包む余裕も失せ、その場の光景を茫然と眺めやるのみであった。

一陣の風に煽られて炎は乱れ、さらに明るく燃え盛った。火の明るさが増すにつれ、周囲は逆に薄暗く沈んでゆく。ほどなく雪も降ってきた。灰色の上空から無数の粒子が白く黒く間断なく落ちかかり、空間を充たして四方の遠景を朧に遮ろうとする。吉景は雪にも気付かないのか、べつたりと上気した笑みを浮かべたまま炎を凝視するばかりである。

燃え尽きろ、消えてしまえ。まるで、私の子や、やすけによつては宇宙の中に何事も生じなかったかのごとく、私の恐怖と呪詛を背負って跡形もなく失せるがいい。

一個の人間すら、存在することは恐ろしい。その存在自体が氣違い沙汰なのだ。存在とは、在ることではない、生きることだ、認識することだ。人類の歴史を支えているものは狂気であることを、知らないともいうのか。また、そうでなくして、いったい誰が建設しようとするのか。

吉景は急に寒氣を覚えた。首が衿の中に竦む。

雪か——眉をひそめてあたりを見回した。降雪はだんだんひどくなってきた。しかし、火の近傍はむろんだが、まどどこにも積もってはいない。遠くを眺めれば、次から次からと降りしきる雪の粒が幾重にも層を成して煙幕のように厚く、そうした視界に拡がる空間の極度の狭さにも関わらず、かえってその無限の奥深さを感じさせる。大粒の雪はただ静かに、ひたすら重く速く連続的である。

吉景は、そんな荒漠たる風景の直中へ吸い込まれてしまい、麻痺したように頭がふらついた。吉景は、はっとその眩暈を切り落として、無形の空間から身を退いた。と同時に、明確に造形されたものを探さねばならぬ不安と衝動に駆られた。

雲、雪片、山、木、草、火、土、そしてここに群がる人間ども。自然の意図など知るものか。

苛立つて、彼は定まらぬ視線を東方へ向けた。

何かないのか？ 加納城は何処にあるのか？

いつしか吉景は加納城の姿を求めている。微かに走った抵抗感も須臾にすぎなかった。

城は何処にあるのだ？

雪に満たされた空間に穴を穿ってやりたいほどであった。否、目を凝らせば徐々に見えてくる。城山が力強く隆起して、天守閣の姿が雄然と浮び上がる、あの黄金の鯨ささえも光り輝く。しかし次の瞬間、その映像は濃密な灰色の晦冥の中へ溶けてしまう。吉景の眼差はまた落ち着きを失い、よろけまわる。幾度かそうした繰返しがあった。と、不意に彼は屈辱感と自分への言い知れぬ憤りを感じた。惨めさが胸郭を吹き抜ける。きつく下唇を噛み締めて、吉景は火の方へ向きなおった。火の勢いは弱まっている。

「えい、なにをぼんやりとしているのだ。木をくべろ、ありったけの木をくべろ。逆巻く炎が雲を貫いて空の青を焼き焦がすほどに、大地が轟音を立てて干乾びるほどに燃やすのだ！」

拳を振り上げ、額の血管に激しく血液を脈打たせながら、吉景は叫んだ。塑像のように火の周りを取り囲んでいた武士たちは、あわてて作業に取り掛かった。大きな松の木や灌木、刈り取った雑草などが次々に放り込まれると、火の粉が飛び散り、炎が荒れ狂い、煙を巻き上げて、一時衰えた火勢も間もなく、前にも増して勢いを加えた。

「怖くないか？ おまえは焼けただれて苦しみ悶えながら死ぬのだぞ、怖くないか？」

穏やかな表情で炎を見上げる巫女の肩をつかんで、吉景は刺々しく言葉を浴びせた。巫女は大人びて見えるが、実際には十六、七歳と思われた。熱氣にほてった頬から項にかけての肌が美しく、純白の小袖に緋色の襦袢が清らかである。

「恐ろしゅうございます」

「ならば、もつと怯えたらどうだ、殺さないでくれと、涙ながらに請うたらどうだ」

「この場で起こることはすべて、鎮守さまのお計らいでございます。鎮守さまにお仕えする私は、鎮守さまのお計ら

いを謹んでお受けいたします」

吉景は、おもわず巫女から激しく手を離れた。己^{おのれ}からあまりにも懸け離れた巫女の心の在りように驚愕したのだ。吉景は巫女をまじまじと見た。鎮守神への平穩で絶対的な帰依、疑いを差し挟まぬ信頼、清冽な無私の行為が静かにみなぎっていることが感じられる。それは、神を信じる心と自己を信じる心が等価だから到達する心境ではないか、あるいは無償の思惟の地平ではないか。その神は高みにあるのでもなく、平面にあるのでもなく、周囲にあるのでもない。同一の場で共存してさえないだろう。

ならば、神を信じることのない私は、何を以て等価とすればいいのだ？ 私の生の場には、私しか見当たらない。訝乃の生の場と部分的に、あるいは他の周囲の連中の生の場と僅かに重なっているとはいえ、訝乃は訝乃の、他の連中はそれぞれの、生の場にいる。とすれば、私はいったい何を根拠として考えているのだ？

否、私は考えようと思っしているのではない。自らの意思によって生まれてきたのではないのと同様に、私の意思とは無関係に考えている。しかも、考えることをやめることすら不可能だ。極言すれば、考えさせられているのだ。ならば、自分は考えていないに等しい。しかし、考えさせられているとすれば、考えさせる主体あるいは考えさせることを考えている主体が私の外に存在していなければならない。しかし、主体として存在するわけがない。なぜなら、存在するとしたら私の外に在る客体だから。

ところで、巫女はおそらく鎮守神について考えたのでもなく考えさせられたのでもなく、中^{うち}から湧出する鎮守神への篤い思いを受け入れているのであろう。あたかも、水に浸した手ぬぐいが音もなく水を吸い上げるように。とすれば、考えも個^この中から湧出してくるのではなからうか？ さらにまた、この連関において、思^{おも}う主体が巫女でなくて何だろうか？ 巫女と鎮守神との親和的な間柄に、吉景は強い憧憬を感じ、高い理想を見た。

顧みれば、吉景は自らの固有の生き方に関してがむしやりに目的や意義を問い、理由をたずね、答えに向かって考えを巡らしてきた。〈思考〉という。〈思^{おも}う〉も〈考^{かん}える〉も同じ範疇の知的活動だが、前者は感性に重きを置いたそれ、後者は理性に重きを置いたそれと言えるだろう。ところで、思^{おも}う主体が巫女なのだから、考^{かん}える主体は私である。考える主体は意思を持つ。だとすれば、意思的に考えるか否かを問わず、考^{かん}えることが逆に、私の意思であることを指し示していることになる。とするなら、神を信じる心と自己を信じる心が等価である巫女の思いと同等であるためには、私の考^{かん}索^{さく}が自らの意思と等価であることを証明するしかない。そのためには、私の意思こそが、私という存在の（少なくとも）仕方に対して全責任を負うことを引き受けなければならない。

もちろん、築城を通じて個を貫き通そうという私の存在の仕方は私の意思であり、その意思が責任を負うことに迷いも逡巡もない。ただ考えてみれば、私の意思自体、すでにして全すなわち社会構造の中に組み込まれているのだから、考索による世界観もまた、それぞれが属する社会構造の表象である時代精神から逃れ出することはできない。この事実さらに、時代への反時代的参加という私の生き方もまた、時代精神と背中合わせに一体であることを意味している。とすれば私は、もともと私であることにおいてすら全から自由でもなく、個的でもなく、創造的でもない。しかも、個性は他との比較においてのみ輪郭が明らかになり、内容が浮かび上がる。つまり、相対的な在り方にほかならない。

このような考察は何度も反芻しているにもかかわらず、改めて自分はいったいなにを深刻ぶつて藻掻^{もが}いているのだ？ という虚しい思いにとらわれた。ふいに脱力した吉景は、人格の外皮が一瞬にして引き剥がされ内面がむき出しとなって、羞恥とおどましさに鳥肌が立った。思考回路がずたずたに引き裂かれ、考えがばらばらに飛び散ったまま、しばらくは呆然と空白の脳内領域を徘徊していた。

否、否、と吉景は氣力を振り絞って氣を取り直した。

〈個〉は相対的であるからこそ、社会構造や他者などと固着することではなく、僅かに身動き可能な〈不自由〉が生じる。社会構造も時代精神も、人間の個のおよび集团的営為とともに変容していくものだ。個が、連綿と積層されてい

る時代精神に包含されているだけなら、また、時代精神も何ものにも作用を受けず凝固しているだけなら、時代精神も個も密閉され、新鮮な空気も水も絶たれた生き物のように死を迎えるだけだろう。もともと〈個〉は、外界から厳密に隔絶した純然たる主体ではない。〈全〉は無限へと開かれた系であり、〈個〉は、〈全〉と〈個の集合〉との間に系を成しているがゆえに画然とした主体も境界もなく、両者の間で絶え間なく化学反応していることを顕^{あらわ}している。

この化学反応の触媒が、人間にはその作用が及ばない、あるいは人間と反応しない〈自由〉であり、人間を絶対性から解放する唯一の契機である。この機序によって〈不自由〉がもたらされ、私たちは幻覚たる主体らしき意識によって存在の仕方を模索する動機と活動源を与えられる。

このように、人間は不自由ながらも存在の仕方を創出・選択しつづけるがゆえに、常に現在時点の自己の実現態に対する否定性としての事象である。したがって、人間は、肯定性として何ものでもない事象と対になって存在しているはずだ。肯定性として何ものでもない事象とは、否定・肯定・欠如・完結を包含する〈無〉である。ところで否定性の生じる条件は欠如であり、欠如は完結しないことによってのみ事象する。そして、事象は時間空間を励起する。なぜなら、時間空間はそれ自体においては立ち現われることもなく、何事をも生起することもなく、ひたすら事象によって存在される全^{まった}き欠如として無に広がり、事象によつてはじめて、水が氷になるように姿を変えて顕現するからである。

ところで、全は社会構造という形式によって支えられ、時代精神という内容を胚胎する。いっぽう、全の構成要員たる人間の集団や個による営為の過程で生産されたり、発生したりする無数の断片が、社会構造および時代精神と複雑に反応し合い、新たな営為を生み、新たな社会構造と新たな時代精神をかたちづくる。ここで重要なことは、全は、それ自体においては目的を有しないゆえに営為を行わず検知不能であり、個や集団などが衝突してはじめて全として機能し、抵抗や軋轢を生じるということだ。たとえば、鏡のように凪いでいる湖〈全〉に、普通の形の船〈個・集団〉を普通の速さで走らせると、鏡面は波立って水の存在が顕^{へきま}わになる。そして水を切る舳先のすぐ前方にも波は発生し、後方へは水脈が広がってゆく。つまり、全は僅かに先回りして個を包み込んでしまう。

「しかし」と吉景は考えた、「鋭い舳先の船を高速で走らせると、波は前方には発生せず、後方には激しい水脈が残る。波が水を伝わる速さより船が速ければ、波は船に追いつくことはできない」

つまり圧倒的な個や集団は、全を突き抜けることができるのだ。そして全を引っ張り、歴史が時々刻々とつくられる。しばしば起こることではないが、武士社会を築き朝廷と対峙した平清盛や、戦国時代の息の根を止め中央集権を推し進めた織田信長などは、大きなうねりとなって次々に連鎖を誘発しながら社会構造を覆し、時代精神を変えた。これは、不自由から出発した存在の仕方の創造であり、全を超出した事象と言えるのではないか。

吉景は一瞬、視界が開けたような気がした。しかし、すぐに霧が目の前に流れてきて、その霧の気まぐれに過ぎ去った空洞の中を、さらに霧が埋めてゆく、そんな心象が尾を引いた。

不自由という条件下で個が全を突破するのは特別なことなのだろうか？ 特別な条件がなければ個は、全による規定に甘んじて生きなければならないのか？ そんな疑問がわいてくる。

全は外界と対峙しないがゆえに、（無限に反射し合う）意識を備えておらず、したがって全自体を対象化することはできない。それゆえ、全の時間軸である歴史は畢竟、受動的な合目的性なのである。これが、外界と関連し、自己を対象化する人間の個との決定的な差異の一つなのだ。したがって、人間は、全との反応において、個である限りにおける能動的な合目的性を受動的な合目的性の方向へ変質させねばならない。さらに、全は固定化すればするほど、その時代精神、社会構造への従属という個の存在の仕方を要求する。

具体的には、いまの幕藩体制だ。人は世襲の身分制度によって社会的な位置を定められ、その位置に相応しい欠如をもたされる。欠如の内容は、世襲や身分制度だけによるのではなく、生まれや育ちなど多くの要因が作用し合いながら形成され、変容してゆく。すべての人間が、産み落とされた瞬間からそれぞれ異なる欠如を持ち、生きる過程に

において唯一の仕方で充填してゆくのである。この疑いなき〈唯一性〉を〈個の存在意義〉と捉えてもいいだろう。この〈唯一性〉によってわれわれは、かろうじて生きつづけようとしているのかもしれない。

しかし、社会構造が経済的・法的に強固であればあるほど時代精神は重みを持つて垂れ込め知的活動の動きが鈍くする。したがって新鮮な世界観が生まれにくい。こうした全から生まれるものは、おおむね時代の退屈な反映であり、ほぼ同一の指向性を有する。そして全は、個々の欠如が同質性を持ち、稠密な場となつて爆発的な活動を起こすまで、愚かしくも全自体の潮流を継続する。しかも、全には何の主体性もないのだ。何を目的にいかなる仕方で行っているかを意識することはできないのだ。ただ人間が振り返つて、全が徹底的な崩壊にまで至らなかった、そして、或る指向性を持っていたと結論される視点からのみ、全は静的維持という合目的性を示してきた、と決定されるにすぎない。けつきよく、個の全への従属という存在の仕方と、全の受動的合目的性は、人間の認識の仕方の均質化をもたらしたがつて、この仕方が時代精神の直中へ組み込まれることから、〈唯一性〉の画一化をもたらす。それが社会構造の固定化や細分化と増幅作用を起こして、認識の仕方をいっそう蚕食する。この状況下に、人間にはただ、模式化された生き方の選択という不自由があるのみで、時代への従属的参加にしろ反従属的参加にしろ、ほとんどの人の営為は時代精神への符合である。

もちろん、〈唯一性〉として存在すること自体、不可侵の意義であり、そのみによつて人間として尊重されるべきである。なぜなら、人間は存在の仕方を追求する可能性を有する事象であつて、そのためには存在することが最低条件だから。したがつて、たとい大方は時代精神への符合人生だとしても、人間の存在意義を根底から覆へすことはできない。というのも、符合を否定するための自死すら、生の単なる放棄にすぎないからだ。

個と全について別の角度から見ると、個は全という抽象から演繹された具象である。ここにおいて個は、万人が生来有する〈唯一性〉として生きはじめ。それは未だ等し並みの意義であり、それ以上のなものでもないが、長ずるにつれ、〈唯一性〉として生を全うする者、生まれながらの異彩を放つ者、固有成性追求する者など、さまざまな在り方として事象する。それぞれの事象が全へと帰納し、全を変化させる。変化した全は個を演繹する。

こうして、また袋小路だ。

演繹される限り、人間は全から自由であることはできないし、演繹されなければ帰納も不可能だ。それゆえ、個はすべて全との反応である。しかも、全との反応を止めることは、無慚な個の破滅以外の何ものをも生起しない。また、個の生命が有限であるのに対して、全は、要素たる人間という種が絶滅するまで非有限あるいであり、時代精神を形成しつづける。とすれば、畢竟私たちには、全の反応感度や時代精神が脆弱であることを細々と望む以外に術はないのか……。

どれほどの時間が経過したのか、吉景がようやく意識したその場の情景は、神主の姿が消えていた以外、おそらく殆ど元のままであつた。〈記憶の墓場〉に降り注いでいる雪を溶かしながら激しく燃える炎、それを取り囲む武士、酷く心配げな表情の浅居、そして取り押さえられている巫女――。

その巫女のすがすがしい表情が、吉景の網膜でぐんぐん大きくなつてきた。吉景は苛立ちと怒りに震えた。

個は全との反応から永遠に解放されないのだとすれば、個が求める主体も、存在の仕方の自由もない。ならば、何のための生なのか？ 不自由の中に閉じ込められている人間など、生まれなければいいのだ。だから、未生の子はまさに、この世に出さないほうがよかったのだ。その子を孕み、この世に産み出そうとした江奈を地獄に落としてよかったのだ。私は〈産む〉という大罪を犯さなかつたし、この世に生をもたらす男女が行なう共同作業の罪に比べれば、それを阻止した功のほうが幾層倍も大きい。そうだ、私はこの世に善を為した。もともと太陽は沈まなかつたのだ。だから、改めて求める必要もない。なにが歴史だ、なにが〈お家〉だ。ならば、たとい時代精神に組み込まれていようとも、築城という反逆の形で自らの生の場において、呪いと憎しみを浴びせかけてやろう。

上滑りな破壊欲の衝動が、無性に彼を突き始めていた。血走つた眼で巫女を凝視していると、彼女の澄み切つた

瞳、乱れない立ち姿に、言い知れぬ羨望の気持ちたちが疼くのをどうすることもできなかった。彼の息遣いはしだいに荒くなっていた。顔の筋肉を細かく痙攣させて、異常なまでに集中している。

巫女の腕をつかんでいた武士の手を無言で払いのけ、吉景は自分の両手で彼女の小さな肩をつかみ、炎の方へ一歩、踏み出した。このとき、浅居が老齢とは思えぬほど素早く飛び出して、「殿、それだけはおやめください」と吉景の足許にひれ伏して行く手をはばんだ、「どうか、ご自分のお手を穢すことはおやめください」

吉景が進路を変えるたびに、浅居も場所を変えた。

吉景は警護の者に目配せした。屈強な侍が「浅居さま、どうぞお立ち上がりください」と言いながら、力ずくで浅居を地面から引き剥がした。脂濃く充血した主君の肉塊を見て浅居は立ちすくみ、目を伏せた。

熱風が吉景と巫女の周りに渦巻いている。じりじりと近づくにつれ、皮膚が焦げるほどに熱くなる。それでもか、これでもか、と吉景は嘔き出す火柱に向かって巫女を押す。顔を背けたり、目をつぶったりしながら、真赤になって吉景は炎の傍へにじり寄る。それでも巫女は抵抗をしなかった。というより、穏やかな表情でしっかりと大地を踏みしめ、厳かに火柱へと向かっているかのようだ。

吉景は、はつと息を殺した直後、力も萎えるような無力感に捉われて、巫女から跳び退った。そして、喘ぐように浅居を振り返った。生まれて初めて疑念を抱いたような絶望的な不安の眼差である。

「浅居、お前は私を信じているか。私を、ただ、信じている、と言い切れるか」

そのとき、巫女が燃えさかる焰の中に身を投じた。火柱が大きく乱れ、火の粉が飛び散った。雪雲が途切れ、小さな青空から太陽が日差しを地上へ注いだ。すぐに分厚い雪雲が襲い、さらに激しく雪が降りはじめた。

一同は何をする術もなく、ただ火焰をながめていた。

吉景はやがて、鎮守神に激しく嫉妬していることに気がついた。巫女の心の在りように憧憬を抱いた。喉が、否、体の芯が渴いた。

「浅居、お前は私を信じているか。私を、ただ、信じている、と言い切れるか」

挟るほど老臣を見詰めながら、吉景は震える声で再び尋ねた。浅居は、唐突な君主の間に答えることもできず、僅かずつ彼から退くばかりである。その煮え切らない態度に歯ざりして、

「では、貴様らはどうだ、この私を信じているか」

力いっぱい自分の胸を打ち、吉景は他の家来たちに大声で尋ねた。

「黙っていてはわからぬ。なんとか言え、答えてしろ」

必死の面持ちで、彼は家来のひとりひとりの顔を覗き込んだ。皆、慌てて俯くのみである。

吉景はしだいに、毒々しい笑みをこしらえはじめた。

「そうだろう、もちろんそうだろう。家臣を愛してもいない、自分のことだけを考える私のことなど、信じようがない」

そう言いながら吉景は、まるで酒に酔ったかのように虚ろな眼差しになり、足許もおぼつかない状態に陥った。

「しかし」と彼は怒鳴った、「なぜだ、なぜだ、なぜだ。なぜ、皆はそうやって存在していられるのだ？ 何の疑問もないのか？ 人間であることに何の不平不満もないのか？ あつても、黙っていられるのか？ 何を信頼し、何を抛り所に行っているのだ？」

吉景はいまや、額に脂汗を垂らしながらわめき立てた。そして、夢中で火の周りの家臣たちの間を幾周も縫い歩きして、同じ問いを繰り返した。

大太鼓の連打のような熱風と火焰の音が凄まじく、時折り太い樹木が燃え落ちて、無数の火の粉が破壊的な勢いで舞い上がる。黒煙は暗い雲の彼方へ逆巻き、雪は乱れた軌跡を描き、視界を遮りながら降りしきる。

不意に立ち止まった吉景は、こんどは大きく笑いはじめた。腹をよじり、手を振り脚を蹴上げて、息も詰まりそう

な激しさである。

「そうか、そうか。なるほど、それはそうだ。私だつて吉景の家臣なんてご免こうむる。私だつて、疑問も不平不満も腹の中に納めておきたい。そうだとも、そうだとも」と喚き続けた。

しかし、それも長くはなかった。がつくりと上体を折り曲げたかと思うと、そのまま頰くすおれて雪の積もった地面に這いつくばってしまった。そして、微かすかな嗚咽おえつが漏れ出てきた。それはやがて、喉も張り裂けそうな泣き声へと変わった。雪をかぶり、泥を掻きむしり、大地を叩き、吉景は赤子のごとく泣きつづけた。

家臣たちは、そんな主君の姿をただ茫然と眺め遣るばかりである。火焰あかあかに赫々と照らされる幾体もの塑像が降雪のもと、ひっそりと佇んでいるかのようだった。

骨張った手先が病的に震えている。奥茂はその震えを隠すように、慌てて届書を大目附役田原九郎衛門の近侍に手渡した。紙の白さが急に輝きを増して、奥茂から遠く離れていった。それは、卯月家の存亡に関する大きな内容を包み込んでいる。

緊張の度が過ぎて、ここまでに礼を失した振る舞いをしたかもしれない——このとき、そんな不安が奥茂の胸元に熱く疼いた。実際、その部屋に入った時から手渡すまでの経過の記憶を、彼はまったく失っている。儀礼に関する心得があるとはいえ、その間、どんな行動を採ったかは彼の意識の外であった。しかし、もはや取り返しはつかなかった。届書は今、奥茂を越えて公おおやけのものとなっている。

奥茂の渾身の思いを綴った届書は、高座に坐る田原九郎衛門の掌中に握られた。大目附が封書を開き、文面に視線を落とした。

加納領藩主卯月吉景乱心のこと——。

不本意ではある。だが、吉景が築城の計画を放棄しないかぎり、卯月家存続に残された唯一の方法は、彼を隠居させて奥茂自身が後継城主となるほかにない。表だつては現われていないが、吉景の衝動的な行動や藩政の放置に対する疑念と非難は渦巻いているはずである。そうした家中かちゅうの状況を加味すれば、吉景の乱心という理由は公儀に對しても充分な説得力を持つ。そして、吉景の嫡子がいない現在、家督相続は当然、奥茂に回ってくる。しかしこの場合でも、藩の乱れ等々、武家諸法度違反を咎められて御家断絶の恐れがないわけではない。

奥茂は畏かしこまつて視線を落としながらも、大目附の反応を感じ取ろうとしていた。もちろん、田原が最後の決定権を握っているわけではない。彼の心証もなんら頼りにならぬ。にもかかわらず奥茂は、ともすれば、田原が直ちに裁断を下すのだ、という錯覚を払いのけることができない。眉、眼、口などの微細な働き、あるいは、読み進む際の手の動かし方、あるいは全身から漂う雰囲気。奥茂は持てるすべての感覚を研ぎ澄ました。

田原はいつまでも読もうとしなかった。悪寒が奥茂の背筋に走った。大目附の目はまったく動いてはいないのである。文書を両手の上に広げたままの姿勢で動きを止めている。広げるまでは、べつだん異常もなかったはずである。奥茂は、その場に待はべてる近侍たちをも見回した。彼らも、それぞれの格好で静止している。彼らは皆、皮膚の色艶、目の光、唇の潤み、身体に溢れる瑞々しき、そういった肉体的な生命要件のすべてを保ちつつ固着してしまった。

時間が逃亡したのか？ とすれば、奥茂自身も実は止まっているのか。そうではあるまい、意識が働くのだから。奥茂は思い切つて高座へ躍にじり寄った。明らかに距離は縮まる。と、この瞬間、戦慄が奥茂の体毛を逆立てた。

私は生せいから脱落している。——奥茂は恐怖と虚無感に弾かれて立ち上がり、部屋から逃げ出そうと脚を踏み出した。袴に足を取られて畳にころがった。奥茂は驚いて跳ね起きた。寢床の中だった。

庭の行灯が点ともっている。寝つきも悪く眠りも浅くなった奥茂が、深夜目覚めたときの不安をいくぶんかでも和らげるために用意させた常夜燈である。奥茂は上体だけ起こして、明り暗く照らし出されている植栽や庭石などを見やつた。そしてなぜか、心の暗い片隈に僅かばかりの温味ぬくみが、懷うすくまに蹲るのを感じた。しかし悪夢で、寝衣にまで沁み込

むほど冷汗を滲ませている生暖かい皮膚は、冬の冷氣に触れてたちまち収縮し、冷えてしまった。奥茂は乱れた寝衣を整え直し、きつく衿元を合わせると再び蒲団の中にくるまった。

それにしても心外だった。潜在意識からする夢ならば、けつきよくは自分自身の関知しえぬ状態で暴かれぬばならない。吉景を排して彼が城主の座に上るなど考えたことはなかったのだ。しかし、たとえば、或る男が熟睡している女の喉元に刀を突きつけている情景を見た場合、そのふたりが普段から最も信頼し合っている間柄であることを知る者ですら、殺害の危機を感じるはずである。それは、その状況に参加する者の意識や意思に関わりなく、経験に照応した一定の意味づけをもたらす。そしてこの意味づけは、例外を設けることを許さない。経験に対応した単なる条件反射である。

奥茂の城主への道も、彼が望むか否かを度外視して、築城の波紋の及ぶ範囲内に生じる可能性にはかならない。なるほど奥茂は、吉景の意図に対処する手段としてこの方途を考慮しなかった。しかし、波紋を客観視するとき、すなわち、その直中^{ただなか}にいる自己を意識するとき、それは少なくとも拒否という仕方では想起されてしまうのである。空腹のとき食物を前にすれば、食べたくなくとも条件反射として唾液の分泌を抑圧することはできぬ。それとなんら異なるところはなない。そして今、奥茂は、分泌された唾液が口中に充満していることを知らねばならなかった。飲み込んだり吐き出したり、焦れば焦るほど分泌は激しくなる。

奥茂は幾度も反転した。条件反射に対して悔やしさが籠み上げて来る。もちろん、唾液の分泌そのものの生理的反応に関するかぎり、人間の清廉潔白は単に感覚的なものである。だが、城主の地位の問題は、波紋を生起する者もそれに巻き込まれる者も、どうしても所有させられる人間性の傷となる。拒否の姿勢が固まるにつれ、その傷は深まって行く。逆に言うならば、その傷を傷として感受しない者は、生に対する愚鈍さであると言わねばならぬ。どれほど純心な魂でも、生きた年月の長さ按比例して、傷は増加し、深まる。とすれば、純粋な魂とは、人間性の高貴さとは、相対性にすぎないのか、それとも、傷手を負いつつもその痛みに堪えることそのものなのか。しかし忍耐もまた、醜悪であることを免れないのだ。

奥茂はさらに体を丸めた。寒気^{かんき}が寢床の中に沁み入ってくる。こうした傷と醜悪さを、少なくとも拒否という形で所有せねばならないなら、人間は、独り廢墟の中に取り残されたように空しい。奥茂は、胸苦しさから寝返りを打とうとしたが、あまりの寒さに、蒲団をいつそう引き寄せるばかりだった。が、それでも腹部に生じる胸震いは全身に及んでやまない。

奥茂はまた、奥茂自身に悲しむ権利があるのか、それを疑わずにはいらなかった。《家》を、人間にとって欠くべからざる生の形式、至上の価値として戴き、その存続のために個人を手段と化した行為も、それが現実になってみれば、どうしても後味の悪い、否、さらには人間であることを否定し去ったような、痛恨と断絶感に迫られる。しかも、奥茂は、手段が純粋であつたと信じている。必要な事態に陥らなかったならば、その手段は意識にも上らなかつたはずである。それほど、手段として独立していた。だが反面、手段化が純粋であればあるほど、その動機が手段にいかなる目的をも組み入れない厳密さに裏付けられていることとは関わりなく、個人は己^{おのれ}自身の人間性から引き裂かれてしまう。当然ではある。

奥茂もまた、生の内容である、(吉景の表現を借りれば)個の存在の仕方が、《家》よりも大切であることを認めていた。《家》を優先させるのは大名の地位という格式や、社会における位置を重んじているからではない。生の形式とは、極論するならば食^くい扶持^{ふち}であり、この観点から《家》の崩壊を極度に恐れているのである。身一つならばまだいい。家臣すべてをも、その形式を剥奪される結果に追い込むことになりかねない。否、それでも、主従関係の容認があるかぎり、経済社会があるかぎり、《家》という単位組織の解体であると片づけられもしよう。しかし、問題となるのは生命である。直接には子供である。その子もまた、大地を包含する宇宙から抽出されてくるのであり、大地に根を張る命ではないか。その子らも歴史の尊厳を背負いつつ、親の本能的な愛へ委ねられる以上に、重い使命

を帯びて立ち現われるのだ。親子の愛情は、単に個人的なものであつてはならぬ。それは、歴史への畏敬と接しているはずである。とすれば、親子の關係にあつて、子が子であるかぎり、親の子に対する最低限の責任は、経済生活の保証なのだ。生の形式の定着なのだ。これはむろん、全人類社会の課題となる。

そして、奥茂は、愛し合う男女の間には、そうした歴史を背景に控える生命が必然的に内在している、と考えていた。その生命に肉体という具体性を与えないことは、むしろ歴史への冒瀆である。この意味で、奥茂は吉景を許せなかった。冴乃という妻を主体的に迎えておきながら、冴乃をも歴史を冒瀆したのだ。徹底するなら、異性を愛さなければいい。子孫愛なくして生きることが、善くも悪しくも自己の溶融である。

とはいえ、奥茂もまた、自分自身を引き裂くことによって、愛を裏切っていた。たしかに、歴史を背負った命の責務は愛し合うことなのだから。すなわち、愛の結果具体化された生命を創造しなければならぬはずであるから。そしてさらに、個の全への調和、という生き方も、ただ受動的な立場にあると考えていたにも関わらず、実は個の全への能動性を含むものであることに気付かねばならなかった。冴乃をも巻き添えにした、吉景をも左右した。と同時に、奥茂は、自分が既に社会的に死んでいることを、明瞭に自覚するのだった。

そういえば、奥茂はその日、沙忠の処刑と角桐家お家お取り潰しの報を受け取っていたのだ。以前、訪れて来た沙忠に、お前は社会的な死にある、と言ったことを奥茂は思い出した。けっきょく、沙忠はその現実化まで生きつづけた。そして、角桐家の崩壊を招いた。予見したとおりであつた。だが奥茂は、沙忠の死と角桐家断絶に関して、なにかしら後ろめたいものを感じないわけにはいかなかった。というのも、沙忠に自害を勧めながら、現在むしろ奥茂がその立場に立っているにもかかわらず生き永らえていることもその理由であつたが、それ以上に、卯月家の存続を願うあまり、角桐家お取り潰しを祈っていた点なのである。むろん、この祈りは現実とは何の關係もない。が、無關係でありうるのは、角桐家が健在するかぎりにおいてである。いま、崩壊が事実となつて奥茂の前に土砂崩れのように展開したとき、呪咀にも似た自分の祈りが何らかの支配力を持つていたように思われる。そして奥茂は、逆に角桐家の呪いが卯月家に振り掛かつてくることに怯えを感じなければならない。

しかし、奥茂は必死に堪えようとしていた。確かめねばならぬ。八月までか九月までか、人の倫みちを外し、欺瞞を犯し、社会的に死んだ責任として、確認するために生きねばならぬ。生きたい……しかし、生きる気力が続くだろうか……

奥茂は大儀そうに起き上がった。押入れの襖を開き、その奥から幾重にも包装された文箱を取り出した。緊張と寒さで、彼の全身は傍目はためにもわかるほど大きく震えている。定まらぬ手先で焦りながら文箱の紐を解いた。中には、白い書状が入れてあつた。築城に関する申告書である。奥茂は、視線を背けるようにして、それが兄の筆跡であることを確かめると、細かく破いて火鉢へ投げ入れた。

冷たい火鉢の縁に手を掛けて、奥茂は、小さな炎がゆらめきつつ消え去るまでじつと見詰めていた。炭の灰に混じって、申告書は黒く縮れた。青い微かな煙が最後に立ち昇り、そのにおいを嗅いだ奥茂は、ぐったりとのしかかる疲労を覚えた。紙の燃えかすを火箸で突つきながら、奥茂は魂が抜けたように力なく眼を開いていた。

「冴乃！」

激しい声に、奥茂ははつと周りを見回した。誰の声だったのかはつきりしなかった。冴乃が振り向いた。髪は乱れ、着物は肌を露わにはだけて、荒涼とした雪の原野に裸足である。彼女は蒼白な顔をゆがめ、後ろ向きになって上体をかがめた。嘔吐しているようだった。幾度も幾度も、視線を虚空へ投げては、苦しげに悶える。奥茂は事態を見極めるために、彼女の方へ近付こうと焦った。だが、脚が動かない。見れば、彼も裸足であつた。焼けつくように冷たい氷の上で、足裏の皮膚がべったりと付着している。冴乃はなおも立て続けに嘔吐する。喘ぎ苦しむ口のまわりに、引き攣る指の間に濁った黄緑の嘔吐物がへばりつく。死んではならない、死んではならない。産んでくれ、健やかな男の子を。歴史のために、そして卯月家のために——長い呻吟の世界であつた。

やがて、奥茂は額にひび割れそうな痛みを覚えはじめた。ぐつと齒を食いしばり、彼は両手で頭をかかえた。が、悶絶するほどの激痛に、眼前の情景が溶け出した。捉えようとしても、ただゆらゆらと波打つばかりである。冴乃の姿が、氷の荒れ野が、形も色彩も失って、無音の晦冥へと遠ざかってゆく。しかし、その幻像は間もなく、夜明けの海にのみ込まれてしまった。細波が煌いて、既に太陽は水平線から浮かび上がっている。濃紺に深い暗さを沈めて、早春の海はようやく明るみを帯びるようだ。池に咲き乱れる白蓮のような蒸気が、城下の朝に漂い流れる。加納城の鯢も、金色に輝きながら、空に泳いでいる。

永文三年の四月も終わろうとしていた。吉景は十日に一度は届く奥茂からの連絡を待ちながら、大天守の六階にひとり佇んで矢狭間から、霞立つ清岳や、春の日差しがいっぱいに降り注ぐ城下を眺めていた。若葉が萌え立ち、水もぬるんで、家臣や領民もうきうきしている。

そんな華やぐ陽気とは対照的に、吉景の胸は、冴乃がいない寂しさに空洞が穿たれたようだった。奥茂の書状には必ず、冴乃は元氣であることが記されていたが、冴乃自身からはまったく便りがない。そのことに疑念を抱かないわけではなかったが、心は城築の細部を詰めることに奪われていて、深く考えもせず、穿鑿もしなかった。

ふと、下の方で湧き起こったざわめきに沈潜を破られた。足音があわただしく階段を昇ってくる。

奥茂からの知らせか？ 裁決が下されたのか？

吉景は、われ知らず身構えた。

「殿、江戸からの使者でございます」

息を切らした家臣が吉景に告げた。汗にまみれた使者が前へ進み出て、「奥茂様が自害なさいました」と、喘ぎながら報告し、奥茂の遺書を主君に手渡した。

吉景はものも言わずに書状をひったくり、食い入るような眼差しで文字を読み取った。

冴乃の懐妊に対する祝辞が短く述べられている。そして、願わくは健やかな男児がさずからんことを、と結んでいた。

吉景は愕然と清岳を見遣った。一瞬、雄々しく浮び上がった幻の城は、土塵を巻きあげながら轟音とともにゆっくりと崩れ落ちた。